

紀要 貝塚公民館 70th



貝塚市立 中央公民館

貝塚市立 山手地区公民館

貝塚市立 浜手地区公民館

貝塚公民館 70 周年紀要によせて

1953 年に貝塚市に公民館が開館してから今年で 70 周年を迎え、本誌を発行する運びとなりました。

これまでも節目の年ごとに本誌を発行し、貝塚公民館の活動を振り返ってきましたが、今回、この 5 年間の活動を振り返るにあたっては、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の流行という最も大きな出来事に触れずにはられません。

私たちは、令和元年末から始まったコロナの世界的な大流行というかつてない事態を経験しました。世間では、感染の拡大を防ぐために日々の生活の中で「密閉」「密集」「密接」という、いわゆる 3 つの「密」を避けるために移動の自粛が求められ、イベントをはじめ人が集う活動が大きな制限を受けました。

貝塚公民館も例外ではなく、令和 2 年度（4/7～5/31）と 3 年度（4/25～6/20）の 2 度にわたり、政府から発出された「緊急事態宣言」を受けて臨時休館を余儀なくされ、公民館に人が集うことすらできない時期がありました。再開後もコロナ感染の不安から活動を自粛する、あるいは、活動から遠のいてしまう利用者が多く、コロナ前には 3 館で年間延べ約 15 万人いた公民館利用者数が、令和 2 年度には延べ 6 万 8 千人弱に減少しました。その後の行動制限の緩和、廃止を経て徐々に回復しつつありますが、今なおコロナ前の状態には戻っていません。

このように公民館活動が大きなダメージを受けた一方で、コロナを経験したからこそ私たちは、当たり前の日常の有り難さや、豊かな人生を送るには人と人とのつながりがいかに大切であるかということにあらためて気づかされました。

また、ハード面では、オンラインの環境が整備され、遠方の人たちと交流できるようになるなど、新たな可能性を手に入れることができました。

貝塚公民館は、これまでの歴史の中で一貫して「つどい、まなび、むすぶ」場として発展することを目指してきましたが、今回、私たちはコロナ禍にどのように向き合い、この経験から何を学んだのかということの主眼に置いて、本誌「紀要」を作成しました。

公民館関係者をはじめ、広く市民の皆様にご高覧いただき、忌憚のないご意見やご指導をいただければ幸いです。

貝塚市立中央公民館長 甲斐 裕二

目次

■ これまでの5年を振り返って

◇ 障がい者の学習と公民館	1
◇ 公民館のボランティア活動	6
◇ 出かける公民館／地域連携事業（移動公民館・地域出前講座）	10
◇ 公民館の家庭教育支援	13
◇ 文化事業	20
◇ シニア世代の学びと公民館	25
◇ ICT 活用と現代課題に向き合う学び	29
◇ 青少年と公民館	37
◇ 市民とともに作り出す協働の場	42
◇ 公民館職員の専門性と職員研修	48
◇ 大阪の公民館・阪南地域の公民館	53
◇ 公民館の広報	57
◇ 団体支援	59

■ 付録

- ◇ 公民館職員体制
- ◇ 公民館運営審議会委員一覧
- ◇ 講座（10年分）
- ◇ 公民館予算変遷（10年分）
- ◇ 新型コロナウイルス感染症への対応と公民館の動き

※「新型コロナウイルス感染症」は、「コロナ」または「感染症」

「中央公民館」「浜手地区公民館」「山手地区公民館」は、「中央公」「浜手公」「山手公」と表記する場合があります。

障がい者の学習と公民館

1. はじめに

「おはよう」の挨拶とともに、楽しそうに公民館にやってくる障がい者福祉施設や作業所（以降、施設）の利用者と職員のみなさん。そんな当たり前の光景がコロナ下で見られなくなった。

障がいの有無にかかわらず、共に学び合う場を大切にしてきた貝塚の公民館が、この5年間で直面したコロナ下の学習保障。安全安心を求めながら「学びを止めない」ことにこだわり続け、不安や躊躇、とまどいを覚えながらも事業を前進させてきた。コロナ下による事業の休止を経験したからこそ見えてきた、共に生きることの意味を振り返りたい。

2. 障がい者講座のあゆみ

貝塚公民館が初めて障がい者問題の講座に取り組んだのが1978年のこと。同和問題の学習に始まった人権学習の一環として展開されてきた。以降、貝塚公民館の重点目標として位置づけられ、「学びたくても学べない」人たちの学習する権利として取り組まれている。

・講座のはじまり

1978年に視覚障害者を対象とした「盲婦人のための料理講座」は「視覚障害者のための教養講座」と「障がい者のための料理講座」の2つの講座に分かれ、名称を変更し、現在では「ホッとワーク」「ふれあい料理」として主に市内の視覚障がい者や障がい者福祉施設・作業所の利用者が参加をしている。

1980年代に入って障がいがある青年の活動の場として「ふれあいディセンバー」の取組が行われ「DODO講座」へと発展した。DODO講座は浜手公で10年間活動が続けられたが、青年たちが就職等で講座に来られない状態が続き2011年に講座を閉じた。

・自主グループの登場

また、公民館主催講座から「自助具グループ貝塚（1997年/学習グループ連絡会所属）」が誕生した。しかし、メンバーや講師の高齢化のため公民館に通うことが困難であるという理由から活動を講師の家に移し、2018年に学習グループ連絡会を離れた。

貝塚公民館は1970年代からいち早くノーマライゼーションの社会を目指し、事業を展開してきた。誰もが自分らしい生き方を追求できるよう現在も「ふれあい料理講座（3館）」をはじめ、視覚障がい者のための教養講座「ホッとワーク（中央公）」、自分たちでやりたいことをしよう、夢をかなえようと、青年を対象にした講座「夢にチャレンジ（中央公）」、「ふらっとサークル（山手公）」、就労体験の場「コーヒーコーナー（浜手公）」、作品を発表する場である「ロビー展示（3館）」などの講座事業を展開している。

3. 公民館の講座から

(1)ふれあい料理（障がい者のための料理講座）

ふれあい料理講座は3公民館で開講されている。各館により受け入れる施設が異なり、また、それぞれに料理ボランティアが存在している。

障がい者理解を踏まえながら受講者が主体となるような働きかけが行われていることは3館ともに共通している。ふれあう中で受講者、施設職員、ボランティア、職員が共に学び合える場となっていることは言うまでもない。

ここでは、コロナ下の講座再開に向けて各館の葛藤と困難な中での気づきを綴りたい。

① 感染症対策

2020年以降のコロナで各館とも講座が休講となった。再開に関しては、飲食が伴うこととあって慎重な判断と対応が求められた。

感染症対策として公民館の部屋は利用人数の制限をかけることとなり、どの部屋も定員の

約 50%となった。(2022 年からは 7 割程度まで回復)。

部屋の人数制限を設けたことで、中央公では施設を 2 グループに分けた。各施設は隔月での参加となった。浜手公では各施設の受講者を半数程度に減らし、山手公では毎月 1 施設ずつの受け入れと各館での対応は異なった。

部屋の人数制限に加えて、マスク着用、手指消毒、食器類の洗浄、飲食時のパーテーション、料理中の会話を控える、黙食、などの感染対策に努めた。

ふれあい料理は三密の場である。会話をし、教え合いながら料理を作り一緒に食べ、「おいしいね」と微笑み合う。そんな光景がコロナで一変した。

② 再開に向けてそれぞれの葛藤

講座の再開にはまず料理ボランティアの理解が必要である。再開を待ち望むボランティアの気持ちは同じでも、自身が重症化率の高い高齢者であることや、感染予防策をとっても、ボランティア活動に不安があるという心情から慎重にならざるを得ない館もあった。

職員においても、早々に再開してクラスターをおこさないか、責任を問われたらどうするかなど不安がよぎる。

コロナだけではない。浜手公では、ベテランボランティアの引退と新メンバーとの交代時期がコロナと重なり、新体制での運営を軌道に乗せる前に休館となったことも大きな痛手であった。講座に関わる全ての人と信頼関係を築いてこそ講座は成立する。開講できず、ボランティアと会えない時間がもどかしかった。

・コロナ下の工夫

参加に慎重になる施設も当然あり、ボランティアが待ち望んでいても、施設側の事情で休講期間が長引いた館もあった。山手公ではその間、ボランティアの意欲を保つために学習会を行うなどの工夫が見られた。

そのような中、1 回目の緊急事態宣言が解除された 2 か月後の 2020 年 7 月に中央公が講座を再開させた。再開に向けてボランティアは「感染予防を徹底してやりましょう」と理解を示してくれ、いち早く再開することができた。その後もコロナの状況に応じて休講することもあったが、山手公、浜手公も順次再開し現在では、どの館でも感染症対策に基づき開講されている。

③ 受講者の姿に励まされ

「再開を待ち望んでいました。施設利用者にとって公民館は社会との接点なんです」開講後、施設職員から聞かれた言葉である。

施設利用者にとって、公民館に行くことは他者とふれあう貴重な経験。

コロナで行動に制限がかかり十分な活動ができない分、公民館がいちはやく活動を再開したことを喜んでくれた。

しんと静まり返った料理室で黙々と料理を作り黙食する。“ふれあい”が最小限に抑えられた料理講座ではあったが、開講することで、いつもとは違う施設利用者の姿や事情を知ることができた。

1 つ目は、施設内でマスクを嫌がる施設利用者が講座に参加し、公民館ではマスクをつけなくては行けないと理解し、施設内でも着用できるようになったこと、2 つ目には施設利用者が拒食症になりかけ困っていた頃、講座に参加してボランティアに褒めてもらい、それ以降食事を摂れるようになったと施設職員から嬉しい報告も聞かれた。

また、コロナ禍で収入が減った施設利用者にとって、日々の生活は辛いものがあり、満足な食事ができない中、講座でおなか一杯食べられることを喜んでいるという切ない報告もあった。施設職員から様々な声を聞き、施設利用者の置かれている現状、ふれあい料理が果たしている役割の大きさを改めて認識することができた。



④ 誰もが参加できる場として

ふれあい料理は、できるだけ安価で満足のいくようにと献立作りにも熱心に取り組まれているが、食材高騰の負担が大きく、近年止む無く施設利用者の材料費を 300 円から 350 円に値上げをした。50 円の値上げに際しては 3 館の担当職員で話し合いをもち決めた。50 円値上げしてもやりくりがギリギリの館もあるが、これ以上の負担を利用者に求めたくない。受講者の経済的な負担を抑えつつ誰もが参加できる環境を保つために苦しい努力が続いている。

⑤ ふれあい料理講座の意義

コロナ禍において、講座再開に対する各公民館の対応は違ったが、ふれあい料理に対する思いは一致していた。安全安心をどう確保していくのか、関わる人たちのモチベーションをいかに維持していくのが課題であった。職員とボランティアが対話を通じてそれらを確認し講座の再開にこぎつけたことには間違いない。対話の中で折り合いをつけ、納得をしながら進んでいく。その姿を尊重することが職員の役割でもある。

今後の課題としては、高齢化するボランティアの活性化、料理を通して障がい者理解を深めることに留まらず、障がい者がおかれている状況や背景を読み取り、共生社会の実現に向けて発信していく事業となっていることを周りと共有しつつ、さらに発展させていきたい。

	参加施設	コロナ前	コロナ中
中央公	いぶき・どんまい・夢二色・らばん・あすなろ 一般/21 人 ボランティア 15 人	月 1 回開催	各施設 隔月 1 回 2020.7 再開
浜手公	いぶき・どんまい・らばん /14 人 ボランティア 12 人	月 1 回開催	受入人数を 半分にし 毎月 1 回 2020.9 再開
山手公	ほっこり・みずま・こすも すの里/15 人 ボランティア 6 人	月 1 回開催	各施設 3 ヶ 月ごとに 1 回 2022.5 再開

(2) ホットワーク/視覚障がい者のための講座

(中央公)

視覚障がい者のための講座は、1979 年に視覚に障がいがある女性対象の料理講座として誕生しその後、視覚障がい者のための教養講座として長年取り組まれ、2008 年から講座名を「ホットワーク」と改め、月に一度開講し定着している。現在は主として、貝塚市視覚障害者協会の会員が受講者となっている。



講座は受講者との対話の中で内容を決めるなど、主体的に関わることを促しながら進めている。最近では受講者の高齢化がすすみ、体調不良で欠席をする人もいる。担当者は出欠の連絡の際に日常の様子を聞き取るなど、個々の状況を把握しつつ孤立しないよう、つながりを絶やさないようにしている。

講談や落語、料理、創作、音楽鑑賞といったプログラムにクラブ員や地域のボランティア

の関わりがある。

(3) 夢にチャレンジ/障がいのある青年のための講座（中央公）

「自分たちがやりたいことを自分たちで実現しよう」と始まった夢にチャレンジ（以降、夢チャレ）は、主に青年層を対象にした講座である。「計画づくりから実現までを自分たちで」というコンセプトだが、実際は受講者から思いや希望を引き出すことが難しい。しかし、日常の様子や会話の中から受講者の好みや得意なことを感じ取り、個々の意見を丁寧に聞き出しながら職員は計画に盛り込んでいく。職員と受講者の日頃の関係性があるからこそ講座が充実したものになっていることは言うまでもない。そのような働きかけもあり、受講者にとっては夢チャレが自分たちの居場所となっており、一時期は20人の受講者が在籍していた。

講座は月に一度ではあるが、陶芸、ダンス、料理、絵手紙など多様なことにチャレンジできるのが人気である。公民館まつりへの参加もあり、舞台上で踊りを披露するだけでなく、模擬店を出店するなど意欲的である。家族や施設職員からは「よい経験をさせてもらっている」との声をもたらしている。



講座を支えるのは主に公民館クラブ協議会のクラブ員や自主団体の人たちである。どうすれば伝わるか、楽しい学びの場となるかを工夫し考えて講座に臨む。そのプロセスと実践が障がい者理解につながっている。

4. 障がい者理解を深める機会

(1) 公民館まつり

- ・施設や作業所の参加

3館とも公民館まつりは実行委員会形式で行われている。公民館クラブをはじめ、公民館の育成団体や公民館にかかわる団体で構成されており、市内の施設からも多くの参加がある。施設は主に模擬店での出店、舞台での発表で参加をしている。実行委員会には施設職員の出席が見られ、本番に参加するだけでなく機材の搬入搬出など準備や片付けを施設利用者とともに積極的に関わっている。

公民館まつりの参加は、パフォーマンスを通して日頃の練習の成果を発表することや、模擬店で接客するなどの楽しさにあり、利用者にとってやりがいや達成感を感じられる社会参加の場である。

(2) ロビー展示・文化事業

- ・障がい者福祉施設合同展示「にっこり展」

（中央公）

公民館のロビーに市内障がい者施設・作業所の利用者の作品を展示しようと、中央公民館クラブ協議会主催で2016年より継続して取り組まれている。

そもそもこの取組は、クラブ協議会の福祉活動のひとつとして特別養護老人ホームに慰問をしていたことが始まりである。時代とともに増えてきた施設と、もっと関わりを持とうということでロビー展示が提案され「にっこり展」という名称で取組まれている。

毎回、絵画、陶芸、書道、小物、共同制作など多彩な作品が公民館ロビーを彩る。クラブ活動などで行き来する人が足を止め、期間中はロビーが一層賑やかになる。

この事業を通して、クラブ員が施設に足を運んでインタビューや聞き取りを行い、施設の情報をパネルに作成し作品と共に展示をしていることも特徴的だ。このような作業を毎年行うことでクラブ協議会と施設の交流の場ともな

っている。

・こうせい展（山手公）

2019 年度から 3 年にわたり重度の知的障がいがある自閉症児、小学 3 年生のこうせい君の作品展「こうせい展」を開催。

こうせい君の作品がイベントのチラシに採用されたこともあり、今まで描いた作品を多くの人に見てもらいたいという母親の思いと重なり開催となった。



イキイキと自由に表現された作品たちは、こうせい君のこだわりが詰まっており、来館者を楽しませてくれた。

3 年目には、展示期間中に母親のトークイベントも開催。作品にまつわるこうせい君のエピソードや子育てなど自身の体験談から人とのつながりの大切さを話してくれた。

5. 障がい者の就労体験の場

・コーヒーコーナー（浜手公）

市内の障がい者福祉施設利用者（以下、施設利用者）が社会参加や就労体験の場として週に 2 回、コーヒーコーナーを運営している。

2020 年後半からコロナの感染拡大に伴い、施設利用者の活動はしばらく中止していた。

2022 年 4 月に施設利用者の活動が再開。再開と再会の喜びを体で表しながらクラブ員や公民館利用者をもてなす施設利用者。

時には公民館事務所へ「クッキーはいらんか〜」と、元気な売り子の声が響く。職員との絶妙な掛け合いがありロビーに賑わいが戻って

きた。



クラブ活動の前後、コーヒーを飲みに立ち寄るクラブ員が、コーヒーの注文とともに施設利用者に「元気？」「久しぶりね」と声をかける。会話や人と関わることが楽しくて、施設利用者はコーヒーコーナー運営の日が待ち遠しく、公民館へ来る日を楽しみにしている。

6. おわりに

公民館に来ていろいろな人たちと関わることは施設利用者にとって楽しみである。「おはよう」と声をかけられ挨拶を交わすことが良い経験になっていると施設職員はいう。

公民館が社会との接点であるとしたら地域にもっと障がい者が立ち寄れる居場所があってもよいのかと思う。公民館は講座事業を通して、障がい者を理解する機会がある。理解というより活動を共にすることを通して顔見知りの人が増えたという感覚である。顔見知りになると町で見かけても声をかけやすい。〇〇さんと呼び合う関係の広がり地域にも生まれていく。顔見知りが増えることが共に生きる社会への実現へとつながっていくのではないかな。そんな風景を描き、公民館は障がいのある人への講座事業を行ってきたのではないかな。互いに尊重し支え合う社会に向けて、人と人をつなぐ意味をコロナ下で考えさせられた。

公民館のボランティア活動

1. はじめに

貝塚公民館では、多くのボランティアグループが自主的に活動を行っている。それぞれのボランティアグループは公民館の講座や事業から生まれたものもあれば、職員の呼びかけにより組織されたものなど成り立ちは様々である。

しかし、活動者が自分の居場所をそこに見出し、仲間と出会いつながり、学習と実践の連鎖でそれぞれの活動の意義を深めていることはどのグループにも共通している。

公民館のボランティア活動は、活動者や周りにどのような影響をもたらしたのか。公民館講座事業に欠かせないだけでなく地域貢献にも寄与しているボランティア活動の実践を記したい。

2. ボランティア育成のあゆみ

貝塚公民館におけるボランティアの活動は、1975 年の保育つき講座おや子教室開講が先駆けとなる。

おや子教室は、「子育ての最中にある女性にも学びの機会を」と子どもを預かり、女性たちに気兼ねなくゆったりとした環境で学習してもらおうと企画した講座であった。当初、子どもたちの保育はクラブ活動をしているリーダーや婦人学級の人たちに依頼していたが、1979 年頃から講座受講後の母親たちが「子どもがお世話になったから恩返しをしたい」と言って保育ボランティアになるケースが増えてきた。

1989 年には「おや子教室」の定員が増加したことを機に「公民館保育を考える会」が発足した。「公民館保育を考える会」は、各地の保育に関する事例を学習し、その結果を踏まえ公民館に対し提言を行い、そのことが貝塚公民館における保育基準の設定や公民館の専用保育室設置につながった。

こうして、公民館と市民ボランティアが共に協力して講座を開催するという公民館ボラン

ティア制度が確立した。

1981 年「障がい者のための料理講座（現ふれあい料理）」開始に伴い、ふれあい料理ボランティアが、1996 年に「日本語会話よみかき教室」開講に伴い、日本語会話よみかき教室ボランティアが誕生した。

そのほか、かばさんルームや公民館の図書コーナーにある図書の整理を担うボランティア、コーヒーコーナーボランティア、浜手ロビーコンサート（現アフタヌーンコンサート）企画委員など、様々な場面で多くの人ボランティアという形で公民館を支えている。

こうしてみると、ボランティアは公民館の講座運営に欠かせないものであることがわかる。ボランティアと職員と一緒に公民館の活動について考え、ときには議論しながら講座を開催することにより、受講者だけでなく職員、ボランティア相互の学びにもつながっている。

ともに支え、支えられながら、公民館はボランティアとともに歴史を紡いできたのである。

3. 講座を支えるボランティア活動

①保育ボランティア（3館）

ボランティアの草創期から活動する保育ボランティアも新型コロナ感染拡大で活動を停滞せざるを得ない日が続いた。

コロナ感染拡大前まで保育つき講座は春期、秋期と年2回開催していたが、コロナの影響により、中止または規模を縮小せざるを得ない状況になった。

保育方法についても、おもちゃの数を制限し、使用する際には消毒を徹底した。

子どものおやつは3館それぞれのやり方が違い、中央公ではおやつを当面無くして水分補給だけにした。浜手公ではおやつは各自持参、山手公では従来通りおやつがあるなど、異なる対応であった。3館で統一するのではなく、各館の状況に応じ、ボランティアと職員との話し合いにより決めたことを尊重した。

各館とも保育ボランティアは、子どもと接す

ることが嬉しくて、保育つき講座を楽しみにしているという。わが子のように愛おしそうに保育をする保育ボランティアたち。コロナ明けには以前に保育をした子に再会し、その成長を心から喜んでいた。

2018年度まで中央公では、おや子教室以外にも天然 eco 生活、日本語会話よみかき教室といった講座などでも保育を行うなど活動の場が多くあったが、令和元年からはおや子教室だけになっている。

そのような中、保育ボランティアは自身の子育てなどの経験を生かして、単に保育をするだけでなく、講座受講者の子育ての悩みに寄り添うなど聞き手として親との交流を深めている。

また、講座の一環で先輩ママとして経験談を語るなど、保育以外でも活動の幅を広げている。



一方、3館の連携事業として、保育ボランティアの養成講座または交流会を毎年開催している。保育士資格の有無にかかわらず志のある人や保育つき講座修了後の受講者が養成講座を受け、毎年数名の登録がある。コロナ下においても養成講座は続けられ、「お世話になったから、今度は私が支えたい」と恩送りの循環が途切れることなく続いている。

②ふれあい料理ボランティア（3館）

ふれあい料理ボランティアはふれあい料理講座において、献立の立案、食材の仕入れや当日の受講者への指導など、全面的に関わっている。そのほか、ホッとワーク（視覚障がい者対

象事業）をはじめとする公民館主催の講座においても協力をしている。

コロナ感染拡大により、各館のふれあい料理講座も中止が相次いだ。食べものを扱う講座だけに不安は大きく、慎重にならざるを得なかった。また受講者である施設側もなるべく外部との接触を控えざるを得ない状況のなかで、公民館に出向いて料理を作るということは難しいことだった。



特に浜手公、山手公では料理ボランティアの不安は大きく活動できない時期が続いた。

（ふれあい料理については「障がい者の学習と公民館」を参照）

③日本語会話よみかき教室ボランティア（3館）

日本語会話よみかき教室（以降、よみかき教室）は、在住外国人やさまざまな要因で日本語に不自由を感じている人に対して、日本語の習得をめざす講座である。

中央公、浜手公では、日本に嫁いできた女性が多く受講しており日中に開講している。

一方、山手公では企業などで働いている人の利用が多い。技能実習制度の導入により、地元の企業や介護施設など多くの分野で在日外国人が働いているため講座の需要は高まっており、夜間のよみかき教室は多くの受講者でいつも満員の状況である。

緊急事態宣言下では、日本語会話よみかき教室ボランティア（以降、日本語ボランティア）が自宅で受講者を教えるなど、自主的な活動で

受講者の学びを止めない工夫を続けていた。

講座の合間には受講者の出身地であるタイや韓国の料理を作ったりするなど日本語ボランティアと受講者との親睦を深めている。



2020 年度には 大阪府と共催で「識字・日本語パネル展」を各公民館で巡回展示したり、2022 年度には「韓国のこと知ってる？」の講座を開催するなど、市民に広くよみかき教室を知ってもらう努力を続けている。

日本語ボランティア自身も大阪府人権教育地区別セミナーに出席したり、KAIFA と合同の研修会や大阪府教育庁と合同で「大阪府識字・日本語教室サポート出前講座」を開催したりするなど、日本語ボランティアとしての研鑽も重ねている。

また、日本語ボランティアは受講者にとって単なる日本語の指導者というだけでなく、困った時に相談できる人であり異国において信頼のおける人になっている。受講者と強固な信頼関係を築きながら活動をしている。

4. 講座や事業から生まれたボランティア活動

① 遊び隊（中央公）

1995 年、つるかめ大学の有志で結成されて以来、世代交代をしながら継続されている遊び隊。コロナ以前は、市内すべての学校園、地域の依頼や各施設に昔ながらの遊びや手作りおもちゃで数々の楽しいあそびを届けていた。市内の子どもたちの間では知名度が抜群である。

年間 50 回以上をこなす活動は他団体の地域活動と比べても群を抜いており、メンバーは依

頼がくることに生きがいを感じている。

ところが、コロナによって全ての地域活動は中止となり、メンバー自身も高齢のため活動に躊躇する場面に直面した。活動と感染リスクを考え込み、正解のない問いにメンバーが塞ぎこみがちになることもあった。

現在は、コロナの時期を乗り越え、園や地域からの依頼も多くなり活動を通して明るさを取り戻している。しかし、高齢による体力の衰えもあり世代交代が喫緊の課題となっている。

② 傾聴ボランティア（中央公）

2013 年に市内で初めて「傾聴講座」を開講。受講後、傾聴ボランティア「そよ風」（以降、そよ風）が誕生した。

介護施設などを訪問し、施設入居者の話を聞くボランティア活動を始めた。

しかし活動が波に乗った頃、コロナによって介護施設などの訪問が不可能となった。そのような中でもそよ風のメンバーは月に一度の定例会は欠かさず情報交換やスキル向上のために学習を続けた。

コロナで十分な活動ができない日が続いて悩んでいた頃、講座「介護について語り合う場」（以降、語り場）から声がかかった。

語り場では、認知症を患った配偶者の介護に苦しむ人たちが講座に参加していた。語り場で悩みを話すことによって気持ちが楽になるようだが、それでも苦しんでいる様子が見て取れた。この人たちをそよ風につなぐことはできないかとの考えからの誘いだった。

そよ風が参加したことで、異なる角度からアドバイスを受けることができ語り場にとってもよい刺激となっている。

活動が停滞する中、語り場とつながったことで新たな広がりを得ることができ、個々の経験やスキルが活かされる場面があったことは、従来の活動を前に推し進めるエネルギーとなった。

5. 市民がつくる憩いの場

① コーヒーコーナー（浜手公）

お昼のひと時、一杯のコーヒーでくつろぐ人が浜手公のロビーに見受けられる。ゆったりとした空間を醸し出すのはコーヒーコーナーボランティアの人たちである。

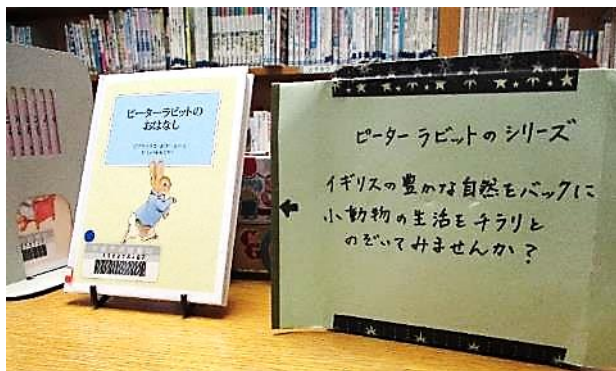
浜手公では、1995年に利用者連絡会の旧役員が中心となりクラブ員の交流や居場所作りの一助となる喫茶コーナー（通称 コーヒーコーナー）の運営が1階ロビーでスタートした。月曜から金曜日の週4回、地域ボランティアを中心に11時から14時まで開催している。

1杯50円で始めたコーヒーコーナーは、物価高騰時も値上げすることなく現在も続いている。

人が集うことを目的としたコーヒーコーナーが、コロナ下で集えなくなり、その間に公民館から足が遠のく人も増えロビーが閑散としていたが、感染が少し収束した時には、コーヒーコーナーを中心に人が自然と集まっていた。

ときには「あなた最近どうしてるの。わたし今公民館にいるから時間があったら出ておいで!」と、スマホで仲間を誘っている。そんなボランティアの声かけを浜手公ではよく見かける。ここでは、地域のつながりが公民館を中心にしてつくられているのだ。

② 図書コーナーボランティア（浜手公）



小さな子どもの目に絵本の表紙が飛び込んでくる。子どもも大人も思わず手に取って読んでしまう。そんな工夫が浜手公の図書コーナーにはある。絵本と子どもの橋渡しを長年

担うのは、地域で家庭文庫をするボランティアだ。絵本の楽しさを多くの子どもたちに知ってもらいたい。そんな思いが伝わるようなあたたかな空間が図書コーナーに醸し出されている。

6. おわりに

公民館のボランティア活動は名称がついているものばかりとは限らない。公民館が講座や事業を手伝ってほしい時や、困っている時に「よっしゃ、手伝おうか」と気軽に声をかけてくれる市民がたくさんいる。それは日頃の公民館職員と市民との関わりから生まれる信頼で成り立っているといっても過言ではない。

職員や知り合いからのちょっとしたきっかけから始められることも多いボランティア活動。「ありがとう」の言葉が嬉しく、励みとなり、続ける中でいろいろなことに気づき、自分事から他人事へと視野が広がっていく。「放っておけない」というおせっかいの精神は、公民館を超えて地域へと向けられる。地域で活躍する人の中に、公民館の利用者を見つけることが多い。

公民館のボランティア活動は「やってあげる」ではなく、楽しさの循環である。楽しさのなかから気づきが生まれ、さらに「やっていこう」という機運が生まれている。「ともに学び、ともに育つ」という共生の場が脈々と紡がれていることをそれぞれの活動から見出すことができる。

貝塚公民館の主なボランティア活動

- ・ 保育ボランティア
 - ・ ふれあい料理ボランティア
 - ・ 日本語会話よみかき教室ボランティア
 - ・ コーヒーコーナーボランティア
 - ・ 遊び隊
 - ・ 図書の整理ボランティア
 - ・ よみかせボランティア
 - ・ 傾聴ボランティア
 - ・ アフタヌーンコンサート企画委員
- その他にもボランティア活動があります。

出かける公民館/地域連携事業

（移動公民館・地域出前講座）

1. はじめに

出かける公民館は、地域近隣住民の交流の機会をつくるために、普段公民館が開催している講座や文化事業を、地域の町会（自治会）の協力を得て、町会館などで行う事業である。

「移動公民館・地域出前講座・健康サロン」など呼び名は色々あるが、公民館に来られない人や公民館を知らない人たちに、公民館の学びを届け、公民館を知ってもらうことを目的としている。

また、公民館の掲げる地域連携事業は、移動公民館・地域出前講座等の他に、公民館まつり・ロビー活用・中学校区地域教育協議会や校区福祉委員会との連携がある。

地域に出かけることで、職員は地域の人とのつながりができ、地域課題を知ることになる。時には困りごとの相談を受けることもあり、地域の人たちの声に耳を傾け寄り添う姿がある。地域の絆を深めるため、地域を盛り上げるためにもたくさんのクラブ員や職員が外に出かけ公民館の学びを届けている。

2. 地域へ出かける事業のはじまり

1953年貝塚公民館は、文化活動の拠点として公会堂と併設して建てられた。長年一館体制で、全市域対象に講座事業に取り組んできた。きめ細かな地域課題に取り組むため、1979年「移動公民館」という名称がはじめて使われ、限定された地域ならではの課題をとらえてきた。

1991年には三館体制（中央公・浜手公・山手公）となり、各館ごとに担当エリアをもつことができ、より充実した取り組みができるようになった。

2010年代には、「公民館で学んだことを地域に生かそう」ということを掲げ、公民館クラブが地域に出向いて日々の活動を披露する「ほか

でもがんばっているよ」という事業が始まる。障がい者施設、高齢者施設、町会や保育所、認定こども園、幼稚園など様々なところからの依頼に公民館クラブが応えるというもので、依頼も多く、クラブ員も発表の場が増えたと喜んでいる。

この事業はクラブ員にとって個々の活動の楽しみに留まらない。地域にでかけることで地域や社会に少なからず貢献していることに気づき、また地域の人との出会いを通して相互の学び合いの場ともなっている。

3. 地域の人たちとともに

地域にでかけるためには、何よりも町会（自治会）とのつながりや町会役員の理解が必要不可欠である。公民館から「出前講座にいきますよ」と声をかけても「はい、来てください」とはなかなかならない。多くの地域へ広げようと、貝塚市町会連合会を通じて、移動公民館の目的や活用方法を書いたチラシを配布した時期もあったが、町会長が交代していく中で、引継ぎがうまくいかず、公民館との関係が途絶えてしまう町会もあった。

一方、馴染みとなった町会や長生会からは依頼が多く、年に何度も来てほしいと要望があがる。本来、公民館の出前講座をきっかけに地域の自治を高めてもらいたいとのねらいがあるため、職員は丁寧に説明をし、会を運営する人たちの相談に乗るなどしながら、馴染みのところには年に数回の訪問に限っている。こうして地域の人たちが主体となり取り組めるように地道な働きかけを行っている。

① コロナ下で地域は

コロナで三密を避けるようになってから、町会館での集会もめっきり減った。ある町会では毎月の「広報かいづか」を町役員が集まり、話をしながら仕分け作業をしていたのが、それぞれが鉢合わせしないように自分の担当する部数だけを取り、配布することにしたそう。地

域の中でのつながりが希薄となり、交流する場も全くなかった時期であった。

一旦、町会行事が中止になると、復活に向けた取り組みはなかなか前に進まない。乳幼児をもつ親の交流や老人会の居場所作りを持ち掛けても地域によっては受け入れを断られてしまう。

逆に、コロナ下だからこそなんとか動き出そうとしている町会もあり、ふれあい喫茶など早くから復活させた地域もあった。

② 移動公民館・地域出前講座

・オンライン出前講座

2020 年から公民館はより安全安心な方法として、「オンライン講座」に取り組んだ。自宅からの参加や、講師や演者がオンラインを活用して運動や落語を市民に届けた。ただ、双方がリアルに顔を合わせる事ができないため、落語の演者に至っては、マスクをした視聴者の表情や反応がわからず戸惑うこともあった。不十分な点もあったが Wi-Fi 環境が未整備の中、対面にかわる方法として早急に取り組んだ。

・移動公民館（山手公）



山手公は開館以来、地域との関わりが深く、各町会館での出前寄席や 4 つの小学校区での公演、公園や神社での紙芝居&昔あそび、水間観音敷地内で乳幼児親子の交流の場を開催し、地域コミュニティづくりの一助を担ってきた。

特に高齢化が進む府営三ツ松団地南自治会

（以下、南自治会）とは 2012 年から移動公民館として定期的に訪問をしてきた。

そもそも公民館と南自治会とを結びつけたのは、公民館の高齢者講座の受講者だった。この地域の住人であった受講者は「自分は公民館に来て楽しんでいるが、自治会には公民館を知らない人や、来たくても来られない人がたくさんいる」と、地域の単身高齢世帯の増加にともなう引きこもりの多さや、近隣関係が希薄になることを心配していた。

そこで、公民館が主となり南自治会で誕生会や公演など毎月のように移動公民館として実施してきた。

開催に際しては、1 人住まいの高齢者や引きこもりがちな人に役員が声がけをしたり、町内放送で参加を呼びかけたり、個々に電話をかけるなど、あの手この手で誘い合っていた。しかし、コロナがそういった集まりを中止に追い込んだ。再度、移動公民館の開催を呼び掛けたが、「集まって、ここの自治会からコロナが出るといけないので」と断られてしまうということがおこっている。

コロナが収まりつつある今、地域コミュニティの復活に向けて新たな働きかけが必要となっている。

・地域出前講座（浜手公）

町会から学校へ

2005 年以降、公民館の出前事業として浜手公エリアにおける、はじめての町会を対象に出前寄席を毎年行っていたが、2018 年以降、依頼がある町会の中に「はじめて」の所はほとんどなくなった。

まだ公民館と縁のない町会を開拓することを試みたが、毎年町会長が変わり、なかなか事業開催の前向きな回答が得られず悩む時期が続いた。背後に各町会組織が希薄になっていてうまく伝わっていないことも伺えた。

そこで場所を町会から小学校へ移し、内容を人形劇や科学講座など乳幼児や小・中学生を対

象にした事業や一般向けの文化事業にシフトして子どもを中心に大人まで楽しめる出前事業に変えていった。小さな集いの場も広く地域の人が集う場も両方を大事にしながら今後も進めていきたい。



・健康サロン（中央公）

健康サロン（軽体操と茶話会）はコロナ下において開催する町会が激減した。

コロナ前は年間延べ200人近くの利用者があったが、2019年144人、2020年83人、2021年69人と集まりにくさが見て取れる。

3年に及ぶコロナで「健康サロン」は延期と中止をくりかえした。町役員は計画することに疲れ、また、このような状況下で集まることに否定的な意見も噴出する中、集まることの大切さと命の大切さとの板挟みの数年だった。



公民館も、参加者の不安（コロナ感染）に配慮し、茶話会をとりやめ、軽体操も一人ひとりが前を向いて出来るよう工夫をしたが、この時

期、新規の町会からの申し込みはなかった。

2021年頃になり、コロナワクチン接種の広まりや安全対策の徹底が進むと、フレイル対策や心のケア（鬱など）が社会課題となって浮上していた。健康サロンの出番でもあり、再開に向けて動き出した。

「引きこもりがちだったから、久しぶりにみんなの顔が見られてよかった」や「いつもなら茶話会を楽しみにしているのだけれど、みんなが元気だとわかって良かった。ありがとう」と役員をねぎらう声も多く聞かれた。

4. おわりに

コロナ下で地域との関係が途絶えがちになった。おまけにここ数年間で各団体の役員が交代しており、公民館との関係が希薄になっていた。2021年から少しずつ町会、老人会からの依頼が増えてきたものの、まだまだ地域の受け入れが進まないもどかしさがある。今までの公民館との関係を再構築できるのか不安もつきまとう。

地域の高齢化、引きこもりや近隣関係の薄さなど問題は山積みである。改めて顔と名前が一致する地域を目指し、出前講座でつないできた軌跡を今からでも取り戻したい。

今できることは、老人会の会議や地域で復活し始めたふれあい喫茶に出向き、公民館の存在を知ってもらうことである。そのことに積極的に取り組んでいきたい。

公民館の家庭教育支援

1. はじめに

かつて公民館の駐輪場にはチャイルドシートを積んだ自転車がズラリと並び、公民館の周囲は母親や子どもの声でにぎやかだった。

少子高齢化の進行と人口減少社会の到来により、公民館の利用者は高齢者が多くみられるようになった。さらに少子化は加速し、社会に深刻な影響を与え始めている。

子育てが困難だといわれる時代において、女性の学ぶ権利を保障し、子育て期を豊かなものにと、貝塚公民館が変わらずに貫いてきたものは何なのかを記したい。

2. 保育つき講座のあゆみ

1964 年、「幼児」と名の付く講座が開講されて以来、1975 年には保育つき講座を開講するなど、貝塚公民館は全国に先駆けて家庭教育支援に取り組んできた。

子育て中の親たちが孤立することなく、つながり学び合いながら子どもを育てていく。また、子育ての問題は子育て家庭に留まらず、地域や社会全体の共有課題とし、子どもをどう育て、どう支えていくのかといった観点を持つてはじめられた。

開講後、保育つき講座は爆発的な人気となり 1980 年代から 2000 年代にかけては抽選を行うほどの盛況ぶりだった。講座からは自主サークルが生まれ、公民館保育室の予約が常に取りにくい状況になるほどサークル数も増えた。1988 年に発足した貝塚子育てネットワークの会の活動と並び子育ての活動は活発に展開され、公民館には常に若い母親と子どもたちが集い、にぎわっていた。

その陰りが見え始めたのは 2000 年代後半以降である。2007 年、地域子育て支援拠点事業の 1 つとして設置された子育て支援センター等の登場は、子育て中の親の相談場所、仲間づくりの場所として母親の選択肢を広げた。子育て

支援サービスの向上は母親たちの子育て負担を軽減したが、その一方で自主的自発的な活動は縮小されていった。現在、浜手公、山手公の自主サークルは消滅し、子育てネットワークの会所属の 4 サークルも少人数で活動を進めている。

(1) 保育つき講座の状況・課題

① おや子教室（中央公）

貝塚公民館の歴史の中でも先駆けて取り組んできた“子育て中だからこそ学ぶ”ことを柱にした保育つき講座「おや子教室」（以下おや子教室）は、女性の学ぶ権利保障という人権の視点から開講された。



子育て支援が叫ばれるようになり、子育て世代がお客様として扱われる事業の開設、幼稚園の 3 年保育化などがはじまり、親自身が子どもと向き合う時間が少なくなった。

かつておや子教室は通年で開催され座学だけでなく、季節の行事も多く企画していた。夏はデイキャンプがあり、川遊び、飯盒炊飯でカレー作り、七夕の笹飾り、秋は芋掘り、冬はクリスマス会。他にも鉄板で焼きそばを焼いたり、かき氷をしたりと親子で多くの体験ができ、それらの体験の中から学ぶことが多かった。今思うとこれらはとても貴重な時間だった。

しかし、今は保育する子どもは低年齢化する上、受講者も集まらない状況となり、保育定員 20 人のところ、1 桁しか申し込みがない状況が続いた。そのような状況下で試行錯誤していた

2020 年に新型コロナウイルス感染症というとてもない病が蔓延した。

・コロナ下の講座運営

2020 年度の秋期講座はコロナの狭間をぬって開催できたが、翌 21 年度の春期講座は開催申込受付中に緊急事態宣言が発出され、講座の中止を余儀なくされた。

コロナ下の講座開催については、3 公民館で開催時期をずらす、開催回数を減らすなどを検討し、いつ中止となってもどこかの館で講座が受講できるように対策を講じた。

プログラムについても、開講できないことを考慮して 3 公民館同一のプログラムとし、もし休んだ時でも他館で受講できるなどの工夫を行った。

普段からマスク生活を強いられ、人との交流が難しい中、講座受講者はこういう学べる場、話せる場があることに感謝し、熱心に講座を受講した。

今後は子どもたちが生きていくうえで大切にしたい“あそび”について親子で学べる、体験できることも検討していきたい。

② 浜手公

関西国際空港にほど近く、空港勤務者の住居や合同宿舎などがあり転入居の多い浜手地域。

子どもを持つ世帯が多かった浜手でも 3 年保育が始まったことや仕事復帰する母親が多いこと、子育て支援事業の充実等で公民館を利用する乳幼児親子が減少していった。

・コロナ下での講座

保育つき講座は保育定員を減らしたため、さらに参加者数は減少となった。この時期、保育ボランティアには、保育だけでなく講座にも入ってもらった。

子育ての先輩である保育ボランティアが講座に入ることで、受講者（親）の子育て不安からくる心身面のサポートが行われ、講座の学び

がより豊かになり充実したものとなった。

また、保育ボランティアと受講者の交流の機会が薄れていたため、この時間が貴重な交流の場ともなった。

コロナ初期には子どもの利用制限があり親子で入館ができなかったことがあった。その時期を振り返ると、保育ボランティアの手を借りながら母親が学習する機会や、自分と向き合いホッとできる時間が必要だと感じられた。

③ 山手公

開館以来「子育てファミリー講座」という名称で 12 年間継続し、子どもの発達を学び、親の仲間づくりをすすめてきた。

2008 年に、近隣の東山自治会がまちびらきをした。約 1300 世帯の町は、子どもをもつ若い世帯の移住が多く、保育つき講座の増加に期待を寄せた。しかし、ニュータウンは共働きが多く期待していたほど増加には至らなかった。

2009 年以降も保育つき講座は継続したが、保育が必要な親の参加は減少の一途をたどり、産休中や講座に関心のある人も参加できるような内容とした。

その頃から、子育てという視点より、家族の人間関係や健康、日々の暮らしを自分らしく楽しく過ごすためにと、個々の内面にかかわる学びを取り入れた。自分に向き合う講座へと視点を変えたことで、子育てのしんどさには、さまざまな要因があることに気づいた。

・現在の山手公は

2020 年の「プレワーキング母のススメ」は、コロナ下で受講者同士の交流をどのように図るか苦慮した。子どもがいると体験できない物づくりや座談会を取り入れ、悩みや不安を共有しやすい雰囲気作りに努め仲間づくりに力をいれた。

座談会では人前で話すことが苦手だった人が徐々に打ち解けてくる一方、座談会になると休みがちになる人もあった。



「仲間づくり」について、全員が同じ思いではないということを知り、その人の個性や生活スタイル、または、抱える背景などをどのように拾い、関わっていけばよいかを考える機会となった。

その一方、親子で活動する子育てグループは人気があり、現在「親子でリトミック」クラブは定期的に活動をしている。

（２）居場所づくり 赤ちゃんルーム（中央公）

コロナ前の「赤ちゃんルーム」は、保育室を開放し自由に参加できる形式であった。

2020年以降はコロナにより、事前申込制で人数制限を行い安全に開講できる方法をスタッフ¹と話し合いを重ねた。



・力強いスタッフの存在

月に一度のスタッフミーティングではスタッフと担当職員とで講座の企画をたてている。コロナ下においては受講者が安心して参加す

るための話し合いを何度も持った。講座を中断していた時期もあったが、スタッフ代表から「講座を中止にするのは簡単だけど、孤独な思いをしている人はたくさんいる。今だからこそ、赤ちゃんルームを受講者のために開講したい」という強い後押しがあり再開を決めた。

・受講者（親）の声から

コロナ下で再開した当初は「親子ともに感染も心配だし、出てくることに対して家族や周りの人に反対される」と受講者も2、3組と少なかったが、徐々に「赤ちゃんルームが開講していて良かった」「コロナで行く場所も制限され、家にいるとストレスもたまる」との声が聞かれるようになった。

毎年ほとんどの受講者は入れ替わるが皆、口を揃えて言うのが「ここに来るとスタッフや職員が自分たち親子のことを覚えていて、毎回声を掛けてくれる」「地元でない場所での子育ては不安であったが、スタッフも子育てを経験しているお母さんなので安心して参加できる。」

「みんな自分と同じ悩みを持っていることがわかり、ここでつながりができて励みになった」という言葉である。

さらに自分の子育て経験を活かしながら、受講者の気持ちに寄り添い、講座に熱心に関わってくれるスタッフの存在はとても大きい。今後もスタッフと連携しながら、受講者が安心して参加できる講座を積極的に行っていきたい。

1 赤ちゃんルームの企画運営に携わる子育てネットワークの会のメンバー

子育てサロン☆ほっとスペース（浜手公）

子育てサロンは乳幼児親子が時間内に自由に出入りできる居場所である。

参加者が少ないという弱点がコロナ下の今こそ強みになると信じ、18歳以下の利用制限解除後（2020年6月）すぐに再開した。

再開後の子育てサロンは、参加者1組という日が続いたが、母親はしんどい思いを抱えており、話を聞いてくれる人を求めている。

「小さい子どもを持つ母親の行き場がない」という切実な声が聞かれ、コロナ下だからこそ子育てサロンのような小さな集団での母親の居場所が必要だと確信した。ひとりぼっちにならないよう常に職員が話し相手になり居心地の良い空間を意識した。次第に参加者は3~4組と増え、コロナが落ち着いた2022年9月からは保育ボランティアがスタッフとして関わる日もあり、参加者が7~8組にまで増えている。



・子育てサロンがきっかけで変わる人

コロナ下の3年という月日は、小さな子どもを持つ母親にとって環境が変わるには十分な期間だった。「1人目の育児はしんどかった。この場で話を聞いてもらい楽になった」という母親が2人目を産み、今では新たに参加する母親の相談相手になっている。その姿を見た時は感動するものがあった。

またある人は、子育てサロンを経て公民館のクラブに入り、子育ての悩みを共有できる仲間と出会えた。

その後、皆が敬遠するクラブ委員という役割を担い、人のために考え行動していった。子育てサロンで救われたという経験があったからこそ他者への理解が豊かになったのだろう。

子育てサロンは、ほんの少し自分を後押しするきっかけとなっている。

しんどい時期にふらりと立ち寄れる場所と職員やボランティアスタッフなどの人の存在。丁寧に個々と関われ、親の育ちに寄り添うこと

ができることが、子育てサロンの強みではないだろうか。

パパサロン（浜手公）

乳幼児をもつ父親の育児参加、父親同士の仲間づくりの場として長年行ってきたパパサロンは、3歳以下の子どもの参加が多い時期から、近年は5、6歳の子どもたちが中心となって継続されている。

パパサロンは、2017年から公民館の中庭に畑を作り、さつまいもの苗植えから秋の収穫、そして11月は家族参加の日として、やきいもを行うという一連の流れがありこれが恒例となっている。

公民館の中庭を利用した畑作りや水あそびが多いため、緑道を歩いている市民から、中庭で準備をしている職員や遊んでいる親子に向けて「今日は何をするの?」「畑に何を植えてるの?」など、気軽に声をかけてくることが多い。

公民館を介して小さな地域のつながりが講座中にも見られるのが面白い。

普段は、受講者が集まらず、頭を悩ますこともある講座だが、コロナ下では、親子が居場所を求めてパパサロンにやってきた。特にやきいもの日は、コロナ下であることを考慮しても予想を上回る参加者数で、その反響に驚いた。



近年、子育てサロンや保育付き講座などを利用する親子が増えてきているが、パパサロンの利用者と重なっていないことも特徴である。そ

れぞれの家庭で必要としている公民館の子育て事業に違いがあるのだということが明らかになった。

3. 公民館の育成団体

(1) 貝塚子育てネットワークの会

貝塚子育てネットワークの会（以下、ネット）は、乳幼児、園児、小学生、中高生の4つの部会と冒険あそび場プレーパーク、ネットワークニュースを発行する広報などで構成されている。幅広い年齢層の親が関わっているので縦のつながりが強く、保育つき講座の際には、先輩ママと呼ばれる小学生部会以上の世代の親たちが保育に関わるなど、自分たちの課題を対話や講義、実践で学び合う、いわゆる共同学習の中で親も子も、ともに成長する場となっている。

ネットの概要は団体支援事業で記載しているため、本項では5年間の傾向を記したい。



① 少子化の波にもまれ

少子化の波と自主サークル離れはネットの特に乳幼児部会に大きな影響をもたらしてきた。各サークルの会員数が減り、入会間もない人が代表や役を引き受けることになり、わからない中でサークル運営の責任を負うという事に戸惑いを隠せず、楽しいはずの子育てやサークル活動が苦痛であるとの声をたびたび聞くようになった。

乳幼児部会の先細りは、その他の部会やプレーパークの運営にも影響を及ぼすようになり、

どこの部会も担い手が不足していた。役員たちはネットを運営することの楽しさや活動の醍醐味を伝えきれないという悩みを抱えたまま時が経っていた。

どうにかしなくてはいけないという焦りの中、2020年からコロナに見舞われた。

集まらない、話せない、互いの様子がわからない。外部と遮断され親子で向き合う日々に子どものストレスや心身の成長、友達との関係性や社会性への影響はどうだろう、と懸念や不安が尽きなかった。だからこそ、学び合うことや外で思い切り遊ぶことが大事だと、ネットが今まで活動してきた意味と共同学習の大切さを改めてかみしめ次の行動を模索することになった。

コロナ明けからいち早くプレーパークが再開し、各部会も座談会や学習の場面を設定し始めた。

・仕事と活動の間で

また、仕事を持つ人が増え活動との両立が課題となっていた。専業主婦は少数となり、女性が仕事を持つことは当たり前となる中、30年前と同様の考えで活動を引き継ぐのは到底無理があった。年に一度のネット研修会でも、仕事をもつことをどう捉えるかが焦点となっていた。

反面、プレーパークは2023年に30周年を迎えた。30年間、無償でしかも親が運営しているプレーパークは珍しいことだと、日本冒険遊び場づくり協会などから聞き取り調査が入った。外部から注目され評価されることはネットメンバーにとっては、プレーパークが社会的な活動であることを再確認する場面となり大きな自信につながった。

しかし、上記のようにほとんどが仕事を持つ女性たちが担い手の主となる活動。安全に開催できる人数のスタッフが集まらない、疲労感が残るなど、少数でのやりくりはやりがいや達成感を感じることも薄くなっていた。

30 周年の節目を迎え、子どもの心身の発育と遊びの関係性、遊びの環境を整えることの意義などプレーパークの本質をとらえなおす機会となっている。そして、このプレーパークを未来の子どもたちに残していけるのか、正念場でもある。

② ネットの活動はなんのため

ネットの活動は、子育てを他人任せにするのではなく、自分たちで環境を整えていくことにある。子育ての悩みを分かち合い、学び、難しい子育て期を仲間と共に乗り越えていく。そのための大人のつながりであり学びであり、環境づくりである。

仕事と活動のジレンマの中で正解を求めるのではなく、悩みながらもできる力を出し合ってやっていくという決意のような姿勢がネットのメンバーからは見受けられる。

そのような沈滞した雰囲気を取っ払うかのように、彗星のごとく元気な人が出てくる。その活力が回りを元気にさせ、乳幼児部会の活動や園児部会の活動が再び活発になっている。活動が面白いと思う新たな人たちがネットのバトンを受け、35 年間の歴史が次へと送られていく。

（2）貝塚ファミリー劇場

生の舞台を親子で楽しむことと、子どもの自主性や主体性を育む活動を行う貝塚ファミリー劇場（以降、ファミリー）も会員数の減少に歯止めがかからない状況だ。

年に 4 回の例会のほかに、こども市の取組み、公民館まつりや他課の事業への参画なども含め、市内の子どもの文化に関する分野を広く支えているといっても過言ではない。

子どもの活動にとどまらず、親同士の交流機会や中高青と呼ばれる思春期からの青年層への働きかけも積極的に行っている。

また、市民企画講座などを用いて、文化の側面から子どもの発育を考えるなど、大人への学

習機会を設けた。

コロナ下においては、例会の中止、こども市などの活動が中止に追い込まれたにも関わらず、大人たちは子どもたちと話し合いを重ね、常に子どもを尊重し、活動の実現に向けて動いていた。

当然コロナ下では、会員内でも意見が分かれ、苦しい話し合いとなったが、その中から合意点を見出し、実現に向けては外部との交渉や説得など多くの障壁を乗り越え、1 つ 1 つを丁寧に導いていた。

また、他課との連携事業ではコスモシアター大ホールに 800 人を集客するなどファミリーのメンバーがもつ力は大きい。子どもたちが文化を介して育つ力を信じ、ファミリーの会員だけにとどまらず常に市内の子どもたちにまなざしを向けていることに、ファミリーを運営する大人たちの存在の大きさを感じる。子どもたちの文化という側面から双方（大人も子どもも）の育ちを保障する活動にこれからも期待を寄せている。

4. おわりに

子育てに限らず、全ての講座事業に当てはまることだが、公民館の支援は受講者を単にお客さまにするのではなく、個々の主体性を引き出し、自分自身の課題や困難を乗り越えようとする力を引き出し育むことにある。そのために公民館では学びあう環境を整え、同じ悩みを共有しながら他者とつながる場面を提供している。

最後に、講座から自主サークル活動になったグループを紹介したい。1 つは、主催講座や市民企画講座などから生まれた発達障がいを考える親のグループである。山手地区公民館の「スマイリー」、中央公民館の「そらいろ」がある。個々の悩みを共有しつつ学習している。

2 つ目には、多胎児育児サークル「まめっこルーム」である。まめっこルームも 5 年間の講座期間を経て 2019 年から自主サークルになった。乳幼児だった子どもたちは小学生になり、

サークルの必要性も薄れてきた。しかし、自分たちだけでサークルを閉じるのではなく、多胎児を抱えて困っている親のことを考え、新たなメンバーを迎えサークルの存続に力を注いでいる。

公民館の学びや活動は他人ゴトを自分ゴトに結びつける力になっている。「おたがいさま」「ちょっとしたおせっかい」これらの循環が「貝塚は子育てがしやすいまち」という評判につながっているのではないだろうか。

そして、なりゆきに任せるのではなく、誰かにゆだねるのでもなく、自分の力で自分の人生を切り拓く力を子育てという営みの中で獲得していく。公民館の家庭教育支援とはそういう力の獲得を目指し貫いてきたのではないだろうか。

文化事業

1. はじめに

1953 年、貝塚市制 10 周年を記念し、公会堂 900 席を併設して貝塚公民館が開設した。

日本は戦後の荒廃した国民生活を健全なものとするため、1945 年 12 月文部省社会教育局に初めて芸術課を設置し、芸術文化の振興普及のための政策を展開した。

貝塚市でも 1946 年に貝塚市文化協会が設立され、文化協会を中心に文化祭の開催など芸術振興政策がとられた。こうした気運から貝塚公民館と公会堂の設置は貝塚市民にとって悲願ともいえるものであった。

以降、貝塚市の文化は公民館と公会堂を中心に育まれた。公会堂には多くの第一線で活躍する文化人が招聘され、文化祭は公会堂及び公民館を中心に展開されていた。

(1) 3 館体制になって

その後、1991 年に山手公に 300 席のホールが併設されることになり、1993 年、貝塚公民館はコスモシアターの 2 階部分に移転し中央公民館と改称した。1988 年に開館した浜手公のホールと合わせて、ホールにおける文化事業が展開されている。

山手公ホールの存在を広く市民に認識してもらうため、貝塚公民館 50 周年を機に、3 館連携文化事業に取り組んだ (2004～2012)。3 館の予算を合わせてより質の高い文化を市民に届けるためであった。

(2) 文化団体の育成 (中央公)

1978 年に貝塚市合唱連盟、貝塚少年少女合唱団が結成されたのを機に 1980 年代前半にかけて貝塚市民踊連盟、貝塚市日本民謡連合会、公民館ファミリー劇場 (現貝塚ファミリー劇場)、貝塚市クラシック音楽家協会、貝塚市美術協会、貝塚市軽音楽連盟などの文化団体が結成されていく。これらの団体は、公民館でのクラブ活

動やヤングフェスティバルなどをはじめとした青少年対象事業、文化講座などから発生したものであり、公民館での活動を通して市民文化が広がり根付いた結果である。

2. 中央公民館



中央公では、この 5 年間はクラシック音楽家協会の「クラシックコンサート」、中野ひろしクアルテットの「ジャズライブ」、サザンウインドアンサンブルの「春一番コンサート」の開催が定着している。



(1) だれもが気軽に文化の発信を

近年の特徴として「ピアノリレー」が挙げられる。視聴覚室のグランドピアノを 1 日開放して、様々な人にピアノを弾いてもらう事業が開始された。

いわば、市民が主人公となる文化事業で、誰もが気軽にピアノに触れ、音楽を通じて人と人のつながりを生み出すといったものである。



また、コロナ感染拡大の影響により、多くが中止に追い込まれて閉塞感を募らせるクラブの発表の場として、「元気の出るミニコンサート」の開催を行った。



(2) 停滞から一歩前へ

コロナ下で停滞する文化事業を盛り上げようと、通常視聴覚室で行っている文化事業をコスモシアター中ホールに場所を移し、2020年度は「ジャズライブ」を、2021年度はクラシックコンサートも規模を拡大しコロナの不安を取り除きながら開催した。

一方、視聴覚室でのコンサートについては、コロナ下での開催方法について頭を悩ませた。参加者の人数制限、部屋の外にテレビを設置して入場できなかった人への対応など、細部にわたり職員間で議論を重ねて対応を行った。不満の声ももらったが、それが当時の状況下で最善を尽くした方法であった。

コロナ感染拡大以降、たとえ小規模でも身近

に文化のある生活がいかに人の心を癒し、元気づけ、潤いを与えることができるかということ、この5年間の公民館での文化事業の参加者や出演者の満足そうな顔や幸せそうな顔を見て実感することができた。

とくに「ピアノリレー」や「元気がでるミニコンサート」は観客のみならず出演者も本当に楽しそうに演奏しており、多くの人と文化体験のすばらしさを共有することの喜びにあふれていた。コンサート終了後には公民館に対し、「このような場を与えてくれてありがたい」といった声をかけてくれる出演者もいた。

3. 浜手地区公民館

舞台や音響設備を要する文化事業の開催が難しい浜手公では、講座受講者の学習発表会などの参加型事業や機器や舞台を必要としない事業を積極的に取り入れてきた。

そんな浜手公の文化事業もコロナの影響で、参加型事業はすべて一旦中止となり、長年継続してきた事業にも変化が見られた。

(1) コロナ下の変化に対応する取り組み

人が集まる文化事業はコロナが拡大するたびに中止が重なり、出演者・利用者はもとより企画する職員の士気も下がる中、どうやって文化事業の運営を継続していくか利用者とともに悩む時期が続いた。

コンサートなど直前で中止せざるを得ない状況に何度も頭を悩ます苦しい時期を過ごした。そんなときに広まったのが記録映像の活用であった。出演者の演奏や演目を録画し、ロビーで映像を流す方法である。コロナの感染リスクも少なく、文化を楽しむ方法として当初は観客もあり成果も感じられた。

しかし、それも長くは続かなかった。出演者も参加者も生演奏だからこそ聴きたいし、聴いてほしいという思いは同じである。視聴者の利用がほとんどなくなりロビーでの視聴会は終息していった。

（２）ロビーからホールへ

お昼のひと時を下駄ばきでも聞きに來られる気軽さが売りのロビーコンサート。

月１回（８月を除く）企画委員会議を開き、企画や出演交渉、広報やポスティング、当日の準備等を市民と協働で行い開催していた。

2018年９月に100回を迎えたのち、コロナ期を迎え、感染に対する安全対策として2021年４月から会場をホールに移し、名称を浜手アフタヌーンコンサートに変更した。

実質、ロビーコンサートは閉じられたが、市民と協働で行うことに変わりはなく、ロビーコンサートは浜手アフタヌーンコンサートへ引き継がれ現在に至っている。



浜手アフタヌーンコンサートは、無料で気軽に文化を楽しめることに加え企画委員がコンサート内容の充実に関心に取り組んできたことが参加者の胸を打つ事業として定評を得ている。コロナ下では人数制限を設けたことで「誰でも気軽に」というわけにはいかなかったが、ホール事業になったことで開催時間も１時間に延ばし、より市民のニーズに寄り添った質の高いコンサートが実現した。

（３）クラブと地元保育園のコラボ

浜手公で行っている人形劇は、地域のこども園と人形劇きしゃぽっぽクラブ（以下、クラブ）とのコラボで開催している。

クラブは演出方法などの技術的な面でサポートを、こども園は保育士ならではの子どもた

ちをひきつける演出と生のピアノ伴奏など、互いの持ち味を生かしながら事前の打ち合わせや合同練習、終了後の反省会で人形劇への取り組みに良い影響を与えている。



クラブと地域のこども園が一緒に乳幼児親子を見守り育てる環境は、長年交流を通して築き上げてきた事業である。2020年度からの３年はコロナのまん延によりクラブのみでの開催となったが、2023年度には久しぶりに合同開催が復活できた。コロナでこの灯を消さないよう公民館のさらなる活動支援に努めていきたい。

（４）文化は公民館を知る機会

文化事業をきっかけに公民館を利用するようになった人、近隣に住んでいるが公民館を利用したことがなかった人、退職を機に公民館を利用した人、そんな「はじめての公民館利用者」の入り口にもなっている文化事業。

「コロナになってから公民館を利用するようになったけど、こんなたくさんの行事が行われているって知らなかった。公民館のファンになりました！」「いつも素敵な事業を企画してくれてありがとう。感謝しかない」とねぎらいを受けることも増えた。

浜手公の文化事業は、開館以来大切にしてきた「誰もが気軽に参加できる」文化事業を取り戻し、公民館の強みを生かした文化事業へとつなげていきたい。

4. 山手地区公民館

山手公は 2021 年 4 月で開館 30 周年を迎えた。30 年間文化をより身近に感じてもらえるようなコンサート事業や、多くの若者が集った泉州地区高校対抗フレッシュサウンドコンテストなどが過去には開催された。

また、2012 年の三館連携文化事業を最後に、「公民館での文化事業とは何か」をあらためて三館職員で議論した結果、大掛かりな観る文化から市民とともに創る文化へと方向転換し現在に至っている。

(1) 市民が主役の文化事業



たまねぎ劇場 (2012 年～) は地域の団体の発表の場を出演団体と協働しながら創りあげる事業で今ではすっかり定着をしている。



また、30 周年事業として貝塚みずま「お夏清十郎」の音楽劇を開催した。市民合唱団を広報で募集しオーディションを行い、4 ケ月間の練習を重ねてきた。この音楽劇は今までにない趣向で取り組み、山手地域に伝わるお夏清十郎伝

説を通して地域の良さを再発見する機会となった。

舞台を協働で作りに上げていく過程には、個々の思いを形にしていく苦労もあったが、企画から運営までの過程を皆で共有し、ひとつの事業をともに作り上げていく醍醐味を味わうことができた。

(2) コロナ下に元気を届ける

長年継続している事業として、ロビーコンサート (2004 年～) のほか、この 5 年間の特徴として、音楽を通じて人権を考えるコンサートの開催や、ウクレレクラブから要望があったロビーでのゲリラライブをコロナ下で実現した。ウクレレのライブは、発表の機会がなくなったクラブ員がモチベーションを高めるとともに、自分たちだけでなく来館者にも元気を届けたいというクラブ員の思いが大きく働いて開催された。

コロナ下でも文化にふれることができる場として、乳幼児をもつ世代向けに人形劇やファミリーコンサートの開催、地域の校区福祉委員会と協力して映画会を開催した。「小さい子どもを連れて映画館に行きにくい、こんな身近で映画を楽しめてよかった」という声が寄せられた。

31 年が経ち施設やホール機材の老朽化はあるが、今後も市民文化を支えるような事業を継続していきたい。

5. まとめ

文化は市民の心を癒し、元気づけ、前向きにしてくれるものであり、コロナ下であっても、文化が衰退すれば人々の心も疲弊してしまう。

公民館は、開館から変わらずあらゆる市民が、広く、均等に文化を楽しめる場所としてあり続けてきた。いつもの場所で、かしこまらずに文化に触れることができる場所、これが公民館の役割の一つでもある。

文化事業は、はじめての公民館利用者の入り

口にもなっている。「こんなことをやっているんだ、楽しそう」と、公民館に興味をもってもらう機会にもなっている。

一方、コロナ下では文化事業を担う人材の減少、デジタルを含めた新たな文化の創出など、改めて「文化」とは何かを考え、対応すべき時期にきている。「文化」とは本来もっと大きな対象を包摂するものである。地域に根差した「生活文化」や「娯楽文化」なども含め、多様化する「文化」を捉えなおし、事業として位置付けていく必要がある。

そのような中で、この5年間は、「観る」文化から「創る・体験する」文化へのシフト期でもあり、新たな市民文化活動の創出という側面でも転換期となったといえる。

日常に文化体験があるということは生きるということと切り離すことができない。それは市民文化の振興にも寄与することになる。

文化振興をさらに進め、さらに市民生活や地域の発展につなげていくことが公民館の役割であると再確認をした5年間であった。

シニア世代の学びと公民館

1. はじめに

高齢期のライフスタイルが大きくかわり、趣味や余暇活動に限らず、仕事をもちつつ、地域貢献活動への参加など社会的な役割を担うことが高齢者に期待されるようになった。

人生 100 年時代の到来に向け新しい高齢者像が求められているが、貝塚公民館では高齢者の孤独と孤立を防ぐために半世紀前に講座を開設した。学びや仲間づくりと共に、学びを地域に還元するなどの社会参加を積極的に進めて今日に至る。

しかし、コロナを経験した今、目の前の高齢者と社会が求める高齢者像に違和感を覚え、高齢者講座の学びは転換期を迎えているのではないかと感じる。貝塚公民館は高齢者の学びにどのような視点を持ち進めていけばよいのか、3 館の高齢者講座の実践を元に考えたい。

2. 高齢者講座

(1) つるかめ大学（中央公）

1964 年開講以来、59 年の歴史を重ねる。受講者約 80 人が公民館に集う。受講者には、町会長や老人会の会長など地域で活躍する人も含まれており、10 年以上通うリピーターも多い。平均年齢は年々上昇し 80 歳に近づいている。

・班活動

つるかめ大学は大所帯のため 6 班に分け、班単位で行動をしている。班長を置いて取り組むことで各班の結束力が高まり、主体的に関わることが結果的には全体の出席率をあげることにつながっている。

「〇〇さんは、今日は病院なのでお休み」「旦那さんの具合が悪いらしい」など今では欠席者の事情なども相互に把握し合える仲となっている。

受講者の一部は、講座が終われば引き続き、お決まりの昼食会へと流れる人たちもいる。食

べて語りあうことが、毎週通う楽しみともなっている。中央公が入るコスモスシアターのレストランからは朗らかな笑い声が夕方まで聞こえてくる時もある。

・コロナ下の生活

そのような光景が一変したのは、2020 年からであった。春に開講の予定が突如延期となり、家の中に籠る日々が続いた。集うこと、語り合うこと、笑うことさえできなくなった日々、受講者たちはどうしているのか、電話で個々の暮らしぶりをうかがうしか方法はなかった。

しかし、話から見えてきたことは受講者たちは日々の生活を崩さず淡々と暮らしていたということ。散歩の機会を増やしたり、暗いニュースで気が滅入らないようあまりテレビを見ないようにしていたという人もいた。

・毎日記録カレンダー

2020、21 年の春、公民館は 2 回の休館を経験した。2021 年の休館時には「つるかめ毎日記録カレンダー」という簡単なものを作り全員に配布。受講者に日々の出来事を書き込んでもらい、会えなくてもこうしてつながっているんだということを意識してもらおうと取組んだ。

ある人は 3 度の食事記録を、ある人はウォーキングの歩数、栽培している花や野菜のこと、中には「毎日、何気なく過ごしていたが目的をもって過ごすことにした。今日の社会のトピックは何かをしっかりと掴もうと思う」など、1 枚の記録紙をきっかけに気持ちを切り替える人もいた。

こうした取り組みが功を奏したのか、休館明けには元気な姿で再会することができた。

・ICT 利活用の機会

コロナ下で必然となってきたのが、スマホやオンラインでの通信手段だ。つるかめ大学では Zoom アプリを使い、長野県長寿社会開発センターのシニア大学や岡山市西大寺公民館の高齢

者大学とオンラインで交流をしたり、大阪公立大学の落語研究部の学生に頼んで落語会を試みた。

画面でみる落語や講義は、耳が聞こえにくい高齢者には聞きづらかったりもした。交流会では、こちらの様子を伝えようと小道具を作ってアピールするなど他県とのふれあいを楽しんでいた。

オンライン講座は、戸惑いを見せる受講者もいたが、「つるかめ大学だからこそ、こういっただけのこと。知らないことを学びに来ているのだから、どんどん進めてほしい」という声が多かった。

・病と向き合いながら

最近を受講者の中に認知症を患う人も数人いる。軽度の認知症はさりげない周りのサポートや配慮で通うことができるが、認知症が進むと退会を余儀なくされ、その傾向は年々増加の一途にある。

認知症であることに気づいた周りの人たちは、講座の前日に電話をかけて知らせ、講座後のランチに誘い食事を共にする。

特定の誰かがするのではなく、誰もが気にかけている様子が伺える。



認知症以外にも、何人もの人が病にかかり気落ちする姿を見てきた。高齢者であることを突き付けられ落ち込むのだが、気持ちを立て直すことができるのも、「つるかめ大学に通う」ということが生きる目標となり糧となっているからだ。

老いても病んでも自分らしく生きるための学びとは何だろうか。困難を支え合い励まし合える仲間づくりがこれからのつるかめ大学に求められている。

(2) シルバーライフ（浜手公）

浜手公は創立して 30 周年を超えた。これまで二色浜パークタウンの地域の人々と共に活動を展開してきた背景がある。地域のつながりは強く、受講者同士が隣近所という例も多い。自然に「〇丁目の〇〇さんが～」という会話を職員が耳にする機会も多くなる。

・メンバーの声に耳を傾ける代表

また、長年シルバーライフ代表を務めたある人は、常にメンバーの声に耳を傾け、公民館に様々な意見を届けている。

しばらく休んでいる人の自宅に出向き、その様子を職員に報告してくれたりもする。時には、直接職員に言いにくい苦情を代表が間に入って聞いてくれたりもする。ワンクッション置くことで、職員の耳に届くころには収まっていたり、良いアドバイスが職員の耳に届いたこともある。

代表は、職員と話をする機会を意識して設けメンバー個々の姿や思いを職員に届けてくれる。シルバーライフとメンバーをつなぐ頼もしい存在となっている。

・ハッとする一言

ある時、代表からコロナで外へ出歩いたり人と話したりする機会が減ったことにより、「認知症が進んだ、孤独死したという話をよく聞くようになった」という報告を受けた。その時、代表が発した一言が忘れられない。「わしらもう長くないんや。コロナで自粛してる間に病気で亡くなる人もおる。それやったら、公民館に来て会話を楽しんで人生を楽しんでコロナにかかって亡くなった方がいい。」

自粛という言葉通り何もしないことが良い

ことなのか、不要不急とは何なのかを考えさせられる一言だった。それでもやはり職員としては受講者の安全は確保しなければならないとのジレンマがあった。

・コロナ下のシルバーライフ

2020 年春の休館時には受講者と電話で近況報告はしていたが、休館が明けてからの講座はリアルに人が集うことを意識し、安全で安心な講座を開催する方法に頭を悩ませた。

通常 4 班で活動しているところを 2 班ずつとし、1 つの講座内容を 2 回 (2 日間かけて) 行うことにした。

しかし、1 年間続けた結果のアンケートには、「メンバー全員が出席できるようにしてほしい」と書かれていた。2021 年は、約 30 人のメンバー全員での活動を再開したが、感染リスクの高い食事会や長時間のバス旅行などは控えた。健康維持のための体操や会話は、広いホールで人との距離や換気を十分に取ながら行った。



浜手公でも受講者の高齢化は進み、シルバーライフ以外の受講者やボランティアからも、フレイル予防や認知症予防のための健康体操の要望がよく聞かれた。コロナが少し落ち着いた 2021～2022 年の 2 年間は、1 年を通して身体を動かす体操の講座を多く取り入れた。「カラダすっきり☆ストレッチ」や「シニアのための筋力アップ講座」は常に抽選となるほど人気が高かった。

(3)ことぶきクラブ (山手公)

「山の手寿大学」の名称でスタートし、1991 年の開講当初は約 80 人が在籍していた。しかし、受講者数の減少に伴い 2011 年度に「ことぶきクラブ」へと改称。受講者自らが企画したことをみんなで協力して運営し、支え合う関係づくりを進め、その輪を地域へ広げていくことを目的とした。

地域に出かけるために、6 点セット (南京玉すだれ・花笠音頭・つげさん体操・つげサンバ・よさこい・皿まわし) を相互で練習している。その甲斐あって、町会や老人会に呼ばれて披露することが何度かあった。

・支え合う関係づくり

古いベテラン受講者と新規受講者をつなぎ支え合う関係づくりの方法として、班分けを行い年間講座の一部を班ごとで企画することにした。

企画のひとつに野外活動があった。しかし、歩くことが困難な人は欠席となり、結局参加者は半数に減ってしまうことがわかった。みんなで企画したことなのに、どうしたものかと考え込む姿があった。



職員から「ことぶきクラブ、みんなが参加できる方法を考えましょう!」と投げかけたところ、歩けない人のために車で送迎するなど全員が参加できる方法を考えだした。

・仲良しだけでない関係を

山手地域は、地縁血縁が今なお色濃く残り、地域でのつながりや結束が強いことが特徴である。それゆえ、席が自由の時は地域の仲良しグループで固まって座っていることが多く、他の人との交流をもつことを促すのに苦労している。職員だけではつながりを深めることはできないので、リーダー的な人を見つけ、その人を介して、声をかけてもらうよう伝えることで交流の輪が広がりつつある。

・学びを地域へ

もうひとつのねらいである「その輪を地域へ広げていく」例として、ことぶきクラブには老人会の役員を担っている人も参加しており、公民館での学びを地域で生かしている。逆に、講座や地域の人が老人会や公民館クラブに加入するケースもあり、相互に輪を広げられている。

2023年度のことぶきクラブは、男性が1人となり、参加しづらいと言う声に「一緒に行こうよ、話し相手になるから」という会話が聞こえてきた。男女の関係なく、1人の人として受け止め合える関係性と、その人らしく生きるために誰もが通える高齢者講座。受講者の入れ替わりはあるが、コロナ下にもかかわらず以前と変わらず開講できていることに安堵する。

誕生会で食事を作ったり、社会見学に行ったり楽しい思い出づくりを期待する声が、今また高まっている。交流を通じて公民館の学びが地域の活性につながることを目指したい。

3. おわりに

定年年齢の引き上げに伴い仕事をもつ高齢者の増加、ボランティア活動や地域への参加など、高齢者も積極的に社会に参加することが求められている。

一方で、健康や家族や暮らしに不安を抱え、生きづらさを感じている高齢者も多くいる。人生100年時代といわれ、何か社会の役に立つ高

齢者でなくてはならないのかという疑問がわく。

公民館の高齢者事業は、学習を通じてつながり、それを通して「支え合い、助け合い、励まし合う関係を育む」仲間づくりの場である。認知症が身近になった今、本音が語れ、困りごとに寄り添ってくれる助け合いの関係性を育むことが喫緊の課題となっている。

地域の近隣関係とは別の形で小さな社会をいくつも持つことが持続可能な高齢者の生き方につながるのではないだろうか。

そして、真の仲間づくりとは互いを知り合い認め合うこと。学びと実践の場を通して、一人ひとりが人生の主人公であることを自覚し誇りをもって他者とともに生きていける高齢者講座のあり方が今後も望まれる。

高齢者の背景

・人生100年時代を生きる

2017年に「人生100年時代構想会議」が政府主導で設置され、人生100年を豊かに生きるための取り組みが始められた⁽¹⁾。

中間報告によると、100年という長い期間をより充実したものにするためには、「生涯にわたる学習が必要なこと」、「高齢者から若者まですべての国民に活躍の場があり」、「すべての人が元気に活躍し続けられる社会、安心して暮らすことのできる社会をつくること」が重要な課題となっている。

高齢者の就業率も増加の傾向にあり65歳～69歳では半数がなんらかの形で仕事をしており60歳代後半で働くことも普通といえる社会になってきた。
(1)人生100年時代構想会議 令和4年版高齢社会白書

ICT 活用と現代課題に向き合う学び

1. はじめに

コロナ下の貝塚公民館は2度の休館(2020年、2021年)を経験した。がらんとした公民館で、職員は「学びをとめない」ために何をすればよいのかを考えた。そして、休館になったからこそ見えてきた現代課題と公民館の必須性。

オンラインを活用し学びを前進させ人と人とのつながりを結んできた実践をここに記したい。

2. ICT の活用

・オンラインへの挑戦

突如現れた「オンライン」への対応。今まで公民館は「密接、密着」の中でリアルな関係性と対面での対話を重視してきたため、職員はオンラインに違和感を抱いていた。設備が整わない中で新たな分野への挑戦。私たちにできるのだろうかという不安を抱えながら動画配信やビデオ会議アプリ Zoom (以下、Zoom) を使った講座事業に取り組んだ。

ここでは、記録の意味も含んで公民館のオンライン活用への取り組みを取りあげたい。

・動画配信

まず始めたのが動画配信だった。貝塚の昔話を元に、公民館職員が作成した紙芝居に語りを吹き込んで配信した。

また、「あそび隊」の手作りおもちゃや「おさんぽかばさん」のおやつ作り方などを配信した。休館中でも市民とどこかでつながっていたという職員からの発信であった。

・公民館だよ！Zoom で集合

緊急事態宣言発出に伴う2度目の休館時、人が集えないことに「ただ手をこまねいているだけでよいのか」と、オンライン環境や設備が整わない状況下ではあるが、なにか公民館活動ができないかと3館の職員で考えた。

とにかく失敗しながらでもやってみよう、

ありったけの備品を使って3公民館で「公民館だよ！Zoomで集合」と題し、初めてオンライン事業に取り組んだ。



受講者、職員ともに初心者同士、画面越しに教え合いながらオンラインに慣れていった。この経験は、受講者と職員双方の自信となったことは言うまでもない。後にオンラインと対面のハイブリット講座が多く展開されるが、全てはここから始まったといってもよいだろう。

・はじめての Zoom サロン

「公民館だよ！Zoomで集合」の経験を活かし、実践できる市民のすそ野を広げていくために、Wi-Fi 環境を常設している浜手公・山手公が共催講座として、「はじめての Zoom サロン」を開催した。

講師はあえて設けず、浜手公では職員に加え、市民にボランティアとして協力してもらい、受講者同士わからないところを教え合いながら進めるようにした。

職員と市民が同じスタートラインに立ちコロナと向き合う取り組みがこうして始まった。

講座は、5人の定員で行い、2回/月の講座を6講座開催。1度受講した人にボランティアとして講座のアシスタントに加わってもらった。1度やってみても利用する機会がないと忘れてしまうこともしばしば。他者をアシストすることで復習の機会ともなった。公民館と受講者、そしてボランティアの少人数のなかでも学習

のすそ野が広がった。1 回目の対面学習ののち、2 回目は受講者の自宅と公民館をオンラインでつないだ。

自宅から 1 人でつながられるか心配しながらではあったが、オンラインでつながったときの喜びはひとしおだった。なにより、マスクを外した状態で、互いの顔がわかる喜びは格別のものがあつた。久しぶりの顔が見える体験とともに、コロナ下の生活から一歩踏み出すきっかけとなった。

・Zoom を活用した試験的な取組み

職員のオンライン研修が進むにつれ、浜手公ではシルバーライフなどの高齢者講座や、かしこく夜活で、オンライン講座や Zoom 交流会などを、担当職員が積極的に取り入れるようになった。

山手公では、市民企画講座「はやりの Zoom を体験し、活用してみよう」を開講し、オンラインを身近に感じ実際に活用できるような講座を行った。

中央公では、高齢者を対象にハイブリッド方式で、オンライン落語や健康体操に挑戦した。

これらの取組みは、オンラインの講座がどこまで可能なのか、画面越しの学びはきちんと受講者に届くのか、試験的に取組んでみる必要があつた。

耳が遠くて音声聞こえない、相手の表情がよく見えない、こちらの表情が伝えられない、などの意見はあつたものの、概ね好意的であり取組みは可能であることがわかつた。

しかし、やはり対面で相手の息遣いや間合いが感じられる、双方向にやりとりができるのが 1 番だということは言うまでもない。

・Zoom 交流会

高齢者講座つるかめ大学では、オンラインによる交流を他県と行った。

2021 年には長野県長寿社会開発センターのシニア大学とその職員の方々と交流を図つた。

画面越しに対話をする経験は緊張もしたが、家にいてはできない体験だったと言い、同じように学ぶ人が全国にいるのだとわかつて励みになったという。

2022 年には岡山市西大寺公民館の高齢者大学とオンラインで交流を行った。地元の銘菓を事前に送り合い、互いの地域紹介などを交えたことで、旅の気分を味わえた交流会であつた。

同じように、山手公の「ことぶきクラブ」では、公民館にいながらヤクルト福島工場とオンラインでつながり工場見学を体験した。

・Zoom を用いた公民館大会

2019 年度の貝塚公民館大会がコロナで中止となり、翌 2020 年度からは Zoom を用いた大会を行っている。3 館それぞれを会場にし、自宅からはオンライン参加者も募るというハイブリッド形式で行つた。

当時はまだ施設内に公設の Wi-Fi 設備は整っておらず、情報統計課（現デジタル推進課）や庁内のあちこちから機材を借りて行うしか方法はなかつた。それでも機材が足りない分は、市内のパソコン教室に依頼した。このような不足だらけの環境下で大きな大会を行うことに不安しなかつた。

しかし、小さなトラブルは起こつたものの、オンラインがコロナ下の公民館大会を可能にし、コロナ下においても学びは必要であることを市民とともに共有できたことは、大きな成果であつた。

3. 現代課題に向き合う学び

(1) フレイル予防と健康

コロナ自粛で心配された高齢者の孤立とフレイル化。公民館には、健康系の講座や事業を望む声が多く寄せられ、フレイル予防として運動と、人と人との交流を持つ機会をコロナの猛威にさらされながらも開講した。

ノルディック・吹矢・いすヨガ・ボクシング風エクササイズ・軽体操と多くの市民が気軽に

安心して参加できるよう、曜日や時間帯も工夫して行った。



また、高齢介護課との共催講座では高齢者の健康増進、フレイル予防認知症対策として体力づくりの講座、スマートフォン(以下スマホ)の活用講座を率先して開催した。



スマホでイキイキライフでは、携帯電話からスマホに買い替えた高齢者に人気の講座となった。

高齢者のデジタル難民が課題となる今、必要不可欠な講座だが、学習方法では機種やバージョンの違いに悩まされた。

高齢者に限らず、どの年齢層も運動不足やストレスを抱え込みがちな時期であり、体操講座は大いに喜ばれた。「運動は嫌いだったが、仲間と一緒にするからがんばることができた」という声が寄せられ、なかには講座からグループとして活動続けるものもでてきた。

・講座から自主グループへ

2014 年から始まった講座「健康一番」では、座学から実技まで幅広い内容で行った。また高齢介護課と共催で行った「ノルディック」や、「頑張らない体操講座」では、職員の熱意と受講者の思いが重なり新たなグループが生まれた。



一方で、2022 年度に行った「ボール de ゆる体操」では、継続的に運動がしたい 70 代、80 代の高齢者をターゲットに無理なく続けられる体操として「クラブ化」を目指したが、結成には至らなかった。自主活動（クラブ活動）の役目・役割に難色を示し、「体操はしたいけどクラブとして公民館活動を続けることは難しい」という。どの講座にも、そんな筋書きができつつあり、市民主体の活動まで昇華できず自主化への過渡期を迎えつつある。

・運動が苦手な人にも

「ヨガやストレッチは身体が硬くて苦手」、「ダンスはリズム感がなくて」など、フレイル予防を取り入れた内容でも好みが分かれるところだ。

浜手公では体操や運動が苦手な人でも無理なく楽しく行える内容として、歌体操や歌声サロンを開催した。特に歌声サロンは文化事業に分類されるので、フレイル予防になるのかと問われることもあったが、昔懐かしい懐メロを口ずさむことで肺機能の活性化だとアプローチし人気の講座となった。

自粛生活が続くと、心も塞ぎこみがちで身体
のコンディションが保てず、身体を動かす講座
の需要が増えた。1 年を通じてフレイル予防を
含めた健康運動系の講座を途切れなく続けて
きた。何か講座がないかチラシの配架台やポス
ターを確認して帰る利用者の姿も増えた。



講座前には沈んだ表情をしている受講者も
多くみかけたが、講座終了後には明るい表情が
戻り、身体も軽くなった喜びを講師や受講者同
士語り合い、体操講座が救世主に思えるそんな
時期を過ごした。身体と心の健康はつながって
いると実感できた時期でもあった。

（２）誰もが孤立しないために

・介護について語りあう場（中央公）

介護者の孤立を防ごうと、2 ヶ月に 1 度開講
している。家族の介護で苦しんだ経験を出し合
い、今まさに苦しんでいる人の話を聞く場であ
る。ひととき、自分の話を否定せず、じっと耳
を傾け共感してくれるこの場に救われた人は
多い。

ただ、こうした悩みを抱える人たちは地域に
もたくさんいるはずである。こうした理解と介
護者を支える人の輪をどう広げていくのか。次
の課題として考えていた時、公民館で活動する
傾聴ボランティアの存在が浮かび上がった。

・傾聴ボランティアの協力で

講座から団体となった傾聴ボランティア「そ

よ風」（以下、そよ風）は、高齢者施設を訪問し
傾聴活動を行っていた。コロナで活動のすべて
が中止となった後はスキルアップのために学
習を行った。それも長引く自粛で意欲が薄れた
頃、介護について語り合う場を紹介された。

そこには、配偶者の介護で悩む男性たちがい
た。ひとり奮闘する様子や心の葛藤が赤裸々に
語られる。男性たちの声を根気よく聴き、その
人の立場や背景、怒りや憤る感情に共感し受容
することは、介護する男性たちにとって生きる
希望へと導くものだった。

そよ風にとってもこれまでのスキルが活か
されたことで新しい活路を見出すこととなり、
いつもの施設訪問が復活するまでの見通しが
もてる機会になっていた。

・ヤングケアラー

介護について語り合う場では多様な介護者
の事例を学習し、働きながら介護をするダブル
ケアラーやヤングケアラーなど社会の課題に
着目し始めた。ヤングケアラーについての学び
は、当事者こそ受講者にはいないが、声なき声
を拾い上げる地域の関心度をあげることや、支
援者を支援するしくみの必要性を確認する場
となった。当事者が語り合える居場所やほっと
できるコミュニティを構築していくために他
団体との連携も必要となってきた。

・親同士のつながりで子育てに見通しを

山手公では、2009 年度講座修了後、発達障
がいを考える会「スマイリー」が誕生し現在も自
主的に活動が続けている。

子どもたちの成長と共に、思春期から青少年
に焦点をあてた講座に取り組んできた。

しかし長年の学習から、小学生のうちに周り
の大人ができることがあるのではないかとい
う話がでてきた。

発達障がいの子どものもつ親は、まわりに相
談できる場があっても一歩踏み出せず、孤立し
てしまうことがある。乳幼児期から学童期にか

けて、発達障がい理解を深め、思春期にかけての発達段階を学ぶことで、個性を伸ばす方法や、少し先を見通して子どもの自立を考えることができるということを今、悩んでいる親に学習してもらいたいと活動の輪を広げている。

・敏感すぎる心を知る

HSP (Highly Sensitive Person) 入門講座

HSP という脳の特性は、情報をキャッチする網目が細かく刺激を受けやすい人のことである。HSP は 5 人に 1 人が持っている特性ではあるが、病気や障がいではないため大きく取り上げられる機会が少なく、疎外感を感じるなど孤立する人も多いと聞く。これを機に HSP の概念を知ったり HSP の向き合い方について学習した。

講座は、コロナ感染症拡大時期にもかかわらず幅広い世代が受講し、平日に開催する講座であったが特に若年層の参加があり予想以上の反響に驚いた。

少数派と呼ばれる人たちにとって自分一人が抱えている悩みではないとの気づきが得られた。考え方を変えることで自身の特徴を生かし、生きづらさを軽減できることを学び、同じような他者を知る機会となったことは大きな自信につながった。

この講座後、保育つき子育て講座でも取り上げられることになり、HSP に対する関心の深さが伺えた。

・地域におしゃべりができる場を

町会など地域への出前講座「健康サロン」もコロナで依頼がなくなったが、高齢者が孤立することを危惧した町会から短い時間での依頼があった。

本来なら町会館へ集まり体操をし、そこから茶話会を開き、おしゃべりを楽しむ時間を持っていたが、体操の後は即解散。それでも体操の始まる前のわずかな時間に交わされる会話が「元気だった?」「会えなくて、寂しかったね」といった内容で、開催した町会からは「たとえ

短い時間でも顔を見て、安心できる人たちが多かった。やって良かった」との声を聞くことが出来た。おしゃべりは、人とのつながりが確認でき、生きる喜びにつながる。地域の小さな単位での場づくりが今後もさらに必要とされるだろう。

(3) SDGs 達成を目指す学びの機会

SDGs の理念である「だれひとり取り残さない」つながりを地域においてつくることと、全ての講座事業に人権の視点を持つことは公民館が開館以来取り組んできたことである。

とりわけ SDGs17 の目標の達成に向け、わたしたちに何ができるのかという問いかけを意識し、SDGs 理解と個々の目標を深めていくことへの試みを行っている。

・知ることから始める

つるかめ大学では、2019 年に SDGs を理解するための講座をいち早く取り入れた。

「SDGs とはなにか」を身近な問題として理解できるように 3 度にわたり学習をした。それに続くようにシルバーライフ、ことぶきクラブでも SDGs の学習を始めた。シルバーライフでは、プラスチックごみ問題を取り上げ、映画会を開催した。

2020 年頃からメディアでも盛んに報じられるようになり社会においても認知度が高まる時期とも重なって、高齢者が関心を持つ良い機会になった。その後は SDGs というワードが定着をして、地球温暖化、フードロス問題など個々が関心ある事柄に着目し身近にできることは実践するという人が増えてきた。

・市民企画講座での取り組み

「SDGs～私たちのちょっとした選択が未来をかえる～」は、貝塚子育てネットワークの会の親たちを中心になって企画された。

未来を生きる子どもたちになにができるのだろうか、SDGs 理解と実践の 2 つの側面から

の学習内容だった。

17の目標を学ぶ中で、親たちが関心を示したのは、開発による森林伐採であり植樹運動であった。遊びの中で生きる知恵や力を育む実践を積んできた人たちらしい意見である。持続可能な里山を子どもたちに残したい、遊ぶことを大事にしたいと、その後もせんごくの杜の保全活動やプレーパークなどの活動に力をいれるなど、実践に結びつく学習会であった。

・楽しみながら SDGs

興味や関心から SDGs を知ってもらおうという企画である。

「Handmade factory in 公民館～身近なところから SDGs～」は、手作りの小物などを作りながら SDGs について関心を持ってもらうことが目的の講座で、受講者は作業しながら自分たちの生活と SDGs がこんな関わりがあるのかと驚くと同時に、それらの取組みが難しいことばかりでないことを知った。機会があればもっと学習をしたいという声も聞かれた。

関連の講座は上記以外にも「切らずにできる帯づくり」など数多く開講され市民意識を高めた。

・啓発の学びから変革を求めて

SDGs は 2015 年の国連総会で採択された文書であり、正式な名称は「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」

『Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development』となっている。頭の部分に Transforming＝変革という力強い言葉が用いられるように、根本的に変革の意識をもって取り組まなければならないということである。啓発だけにとどまらず、この学びを実践により、個々の意識や行動の変革につながるような学びへと高めていくことが求められる。

4. より多くの人に学びの場を

公民館に足を運んだことがない人や働く世代へのアプローチとして、話題となっている事柄や関心度の高いものに着目し、実際に来てほしい層に「あなたに来てほしい」というメッセージが届くような講座を展開している。

・男性にアプローチ

俺の公民館（中央公）は、タイトルどおり働く男性をターゲットに夜に開講した。うどん打ち、コーヒーの焙煎、ソロキャンプ、料理など男性がチャレンジしたいことをプログラムに盛り込み公民館と出会う機会を毎年行っている。特に料理系が人気で来年もと期待の声があがった。自主サークルには道半ばだが受講者が定着し公民館活動へ移行できるような工夫を試みていきたい。



・流行を取り入れた趣味的講座

山手公では「大人の趣味探し」手作り雑貨一日体験を日曜日に開催。11 コーナーを設けた。利用者は手ぶらで参加でき、気に入ったコーナーの雑貨を作るという趣向だ。ひとり 2～5 点と挑戦する人もあり、各コーナーでは何種類もの素材から好きなものを選び、迷いながら選んでいる受講者の姿が楽しそうだった。

中央公で開催している「ピアノリレー」は年に 4 回、こどもの日や七夕、クリスマス、ひな祭りなど季節行事を意識しつつ、丸一日誰でも

自由にグランドピアノが演奏できる場として開放している。この日のために練習に励む人や、新たにピアノを始めたシニアなど、子どもを含む家族連れから高齢者までが思い思いの曲を演奏し、時には互いに鑑賞しあったりする場が定着しつつある。初めて公民館を訪れる人には気軽に参加できる事業である。

ヨガの講座は高齢者対象に「いすヨガ」を、働く世代には「ゆるふわヨガ」として夜に開講した。ヨガはどの層にも人気が高く、夜の講座は自主グループとなり活動を続けている。

人気といえば、「ボクシング風エクササイズ」は評判がよく、それぞれの館で夜に開講した。ボクシングのポージングを取り入れたエクササイズは、若年層にも好評であった。閑散といていた夜の公民館が受講者の熱気に包まれた。



・夜に特化（浜手公）

浜手公では働く世代が関心のある学習や体験内容を取り入れた「かしこく夜活」や、エクササイズ講座を定期的に行っている。

特に夜のエクササイズ講座は3公民館で時期をずらして開催し、他館の講座案内もアナウンスするなど夜の講座への関心が途切れない工夫をした。その案内が功を奏し、夜の講座への参加が定着しつつある。

夜の講座は二色地域の住人の参加が中心となるが、平日の昼間には見かけない新しい受講

者の獲得にもつながった。「こんな近くに長らく住んでいたのに、公民館でこんな多種多彩で面白そうな講座が行われていることを知らなかった。」「夜に参加できる講座ならまた参加したい」などの声も聞かれ、60歳未満の受講者や男性の参加・親子参加などもあり利用の少ない層の獲得につながった。

・若者世代の利用を促進

若年層の利用を増やすべく、夜や土日開催の講座も積極的に行ってきた。時には年齢制限を設け若者の利用を促した。

浜手公では、味覚や臭覚で楽しむ「茶歌舞伎」や「楽酒もう」講座を行った。公民館にしては珍しい企画に、チラシを握って問い合わせに来る姿が見られた。



受講者は、お茶やお酒に対して関心をもって参加しているので、初対面の受講者同士でも自然と会話がはずむ。次の講座への期待も高まり継続的な利用の足掛かりとなっている。

5. おわりに

・学びを地域に

公民館は人が育つところである。公民館につどい、学び、人とつながる。その過程でいろいろなことに気づき、さらに学びを深め、身近な人たちへの気遣いが生まれ、やがて地域の課題や社会のことに目を向けていく。

「公民館の学びを地域に広げる」この言葉の通り、70年の歴史の中で幾多もの事例があり多

くの人が地域で活躍をしている。そのため職員は常に公民館に来た人をお客様にするのではなく、主体となっていくような関わりを意識している。

・学びを一步先へ

とはいえ、公民館の間口は広く、楽しくなくてはならない。忙しい人々の心の癒し・リラックスや健康づくりの場として生きる活力を生み出す多くの学びは、面白そう、やってみたい、と興味や関心でわくわくする事が必要である。

また、公民館に来たくても来れない人の存在や、悩みや困難を抱えた人がいる事を忘れてはいけない。

誰もが安心して、つどい、学べる場を公民館や地域にもつukれないだろうか。今後も時代に沿って積極的に ICT を取り入れ、試行錯誤していくことが必須である。

そして、わくわくしながら学び始めた人たちが、学びの面白さを知り、その先へと進める活動の場や学びを共に作る機会が必要であり、今後も大切にしていきたい。

青少年と公民館

1. はじめに

貝塚公民館の青少年事業の目的は 2 つある。1 つ目は「さまざまな体験を通して子どもたちが物事への興味関心・好奇心を持ち、主体的に取り組み、子ども自身の生きる力をつける」こと、2 つ目は「地域の大人をはじめ異世代・異年齢との交流の機会をつくる」ことである。

ICT の推進や急激な社会の変化により、家庭、地域、学校の連携がより求められる今、3 者のつながりを深める公民館の役割はますます重要となる。青少年育成の歴史と現在を記し、今後の青少年への取組みを模索したい。

2. 若者と公民館

・青年が集まる時代(1950 年代～)

貝塚市は、繊維とワイヤーロープを中心とした工業都市を目指して戦後発展を期した。そのため、他府県から若い女子青年が多数入ってきた。こうしたなかで、1953 年に誕生した公会堂（公民館）は、企業体にも積極的に活動の参加を呼びかけるなどして他府県出身の青年従業員を含んでの活動が展開された。

この頃、成人教室の約 3 割が 15～19 才、約 6 割が 20 代で貝塚の公民館は青年中心の活動だったことがわかる。青少年講座としては、1956 年以降「青年女子教室」や、「青年教室」、「貝塚女子高等学院」などで多くの青年が公民館に集まり学習をした。まさに青春時代を公民館で過ごし、友と出会い、語り合う姿がそこにあった。

・講座から団体育成へ(1970 年代～)

ところが 70 年代に入ると青年の姿が減少する。「貝塚女子高等学院」が 1975 年に閉講するなど、公民館は新たな青年の活動を求めて模索を続けなければならなくなった。

1978 年、青年教室が「ヤングサロン」と名を変え開催されると、そこに集まってきたのはロックバンドのグループなどの高校生であった。

講座内容も形式にとらわれない、自分たちのやりたいことを形にするものとなり、1982 年～1990 年の「ヤングフェスティバル」や「ふれあい DECEMBER」から見てとれるように、次第に講座形式から青年の自由な発想によって進められる活動となっていた。

コンサートや映画会、学習会や宿泊…とさまざまな活動が繰り広げられるなか、「ロックバンド連絡会」が結成され、現在もクラブ協議会（中央公）に所属し活動が続けている。

また、この時代に活躍した青年がきっかけでフレッシュサウンドコンテスト（山手公）の開催へとつながった。

・フレッシュサウンドコンテスト(1990 年代～)

かつて公民館主催事業として、堺市以南の高校を対象に「泉州地区高校対抗フレッシュサウンドコンテスト」（1997 年～2018 年）が行われていた。

高校生が主体となり、企画から当日の運営まですべてを担う。当日はホールが満員になるほど盛況で、学校からも高い評価を受け、毎年恒例の事業となっていた。

高校生は、少しのアドバイスと大人の関わりで、これだけのことができる力があるということに改めて感じる機会となった。

2018 年以降は、若者で組織する「バンド連絡会」に引継ぎ、第 24 回（2020 年）まで続けた。

3. 現在の講座・事業

青年が活躍した時代を経て、現在は小中学生を対象とした講座や事業を多く開催している。その一例として以下の講座事業がある。

（1）夏の子ども講座（3 館共通）

公民館で活動しているクラブや団体が主体で企画、運営されており、職員はアドバイスの役割に徹している。講座は世代間交流を軸に、子どもたちの関心を引くような方法や時間の

使い方が工夫されている。

毎年のアンケートには、夏の子ども講座を継続してほしいと子どもからの希望の声が多い。

・コロナ下の夏の子ども講座

2020 年夏期にはコロナのため中止せざるを得なかったが、感染者数が落ち着いた冬期に、中央公で「2020 子ども講座」、山手公で「親子で作る世界で一つのクリスマス」等、青少年事業を開催した。

翌年からは感染対策を講じながら元の「夏の子ども講座」へ戻した。元に戻す過程では、講座に関わる人たちの葛藤や再開に向けて職員との話し合いが度々なされた。「子どもが過ごす1年は、大人の1年とは違う」このような言葉が行き交う話し合いには、地域の人たちの子どもたちに対する思いがこもっていた。

① キッズキッチン・つげさん手話教室（中央公）

夏休み期間中に健康推進課が公民館の料理室を使用して取り組んでいた「キッズキッチン」に公民館から声をかけて 2002 年頃から共催講座として開催している。その後、青少年教育課も共催として連携したが、2022 年の講座終了後、共催から抜けることになった。



2018 年からは、障害福祉課から申し入れがあり、子ども対象の「つげさん手話講座」を共催で取り組むことになった。

② おばけやしき（浜手公）

夏休みに山手公と浜手公でそれぞれ行われていた夏の事業「おばけやしき」は、子どもたちを主体とした「作戦会議」が開かれ、子どもたちの手で1からおばけやしきを作り上げるという内容の事業だ。

コロナにより 2020 年に通常開催ができなくなった。おばけやしきという特質上、換気が十分とれない室内で叫び声が上がり感染リスクが高まるという理由からであった。

・明るいおばけやしきの登場

そんな状況下、職員が頭を悩ませ、開催したのがおばけの展示会「明るいおばけやしき」である。子どもたちの作戦会議はできなくなったものの、個人や少人数グループで作られたおばけが公民館に運び込まれ、大人ボランティアの作品と共に室内に並べられた。

展示会の2日間は照明をつけた状態でこれまでの様子とは一味違うおばけやしきとなった。参加者からはこの時期に子どもたちの楽しめるものを作って良かったと感謝された。4年ぶりに作戦会議を含めた「おばけやしき」を再開した2023年は、「池に沈んだ廃病院」というテーマで開催し、子どもたちのワクワク感が伝わる事業となった。企画から準備や片付けを、大人ボランティアと関わりながら行う子どもたちの姿は、まさに貝塚の青少年事業の目的そのものであった。



(2) その他の講座事業

・フアフアクラブ（山手公）

不登校や発達障がいがある小学生親子を対象に、工作やクッキングなどを通して他者とつながりホッとする場がフアフアクラブである。

講師と高校生を含むボランティアスタッフが運営を担っている。

はじめての部屋や人に不安を感じ、部屋の中へ入れない子もあったが、そんな時に高校生スタッフが子どもに寄り添いサポートをしていた。参加は無理強いせず、親や友達が楽しそうにしているから、自分もちょっとやってみようかなと思えるようになることを目標にしている。



スタッフの中には、発達障がいをもつ高校生や社会人もいる。自分たちが経験したことをこの講座で生かしている。例えば空き缶積みめのゲームで高く積みめない子がいると、3個ぐらい積むとまた次の段を積んでいくようにアドバイスしてくれたり、輪の中に入っていけない子の遊び相手になってくれた。小学生の子どもたちにとっては頼りになる存在になっている。

・百人一首（山手公）

中学生と保護者からの要望で講座を開催し、自主グループを経て、現在は公民館の青少年事業として取り組んでいる。今は小学生を中心に大人の参加もあり、世代間交流の場となっている。

普段は指導者がいないので、手作りの出席カードや「がんばった記録カード」をみんなで作

成し目標をもてるようにしている。

「講師がいないとマンネリ化する」という状況下ではあるが百人一首だけでなくことわざカルタ・四字熟語カルタ・ナンプレを持ち寄り、工夫を凝らしながら継続し、新春百人一首大会を毎年開催することを目標にして励んでいる。



・レッツトライ事業（3館共通）

3館が取り組んでいる青少年対象事業「レッツトライ」は、青少年が気軽に公民館を利用できる事業である。

コロナ前の中央公では、高校生バンドが公民館まつりで発表するなど公民館活動へとつなぎ、高校生が活躍する場となっていた。浜手公では、ダンスグループなどの利用もあった。山手公では、防音設備のある音楽室を無料で利用できるということで、高校生たちが文化祭シーンやライブ発表のためよく利用している。

公民館を利用できるということが先輩から後輩へと口コミで引き継がれていたが、コロナ禍で途絶えていった。今は、レッツトライ事業が知られていないということが課題である。今後は、SNSなどを活用し、周知する方法を考えていく必要がある。

・貝塚青少年少女合唱団(中央公)

1978年に結成し、現在に至るまで活動を継続させている。

結成から長年職員主導で活動してきたが、そ

の職員が退職後団長となり、運営をしてきた。しかし、その団長たちも相次ぎ亡くなり、今は指導者と育成会が中心となり運営している。

ここ数年は少子化がすすみ、合唱団に入団する人数も少なくなる中、対象年齢の見直しやPRのために発表の場を広げるなど試行錯誤しながら活動を継続させている。



コロナ下では行動制限により十分な練習ができない日々が続いた。毎年開催していた定期演奏会も形を変えざるを得ず、多くの演奏会も中止となった。このことは子ども達の心に影を落とした。発表の場を失った子どもたちのため、第10回公民館大会では、オープニングで合唱団に歌ってもらい、会場は感動の渦につつまれた。Zoom配信など裏方で動く公民館職員の姿を見て、合唱団の子どもたちから公民館に感謝の手紙が送られた。青少年と公民館、相互がつながりあえば子どもたちの笑顔を育むことができる。そのことを実感した出来事であった。

4. たまり場としての公民館

(1) 夜間の学習やたまり場に（中央公）

ロビー空間は自由なたまり場である。夕方からは受験勉強や中間期末テストに向けて学習をする中高生がやってきて本やノートを開く姿が見られた。コロナで図書館など公共施設の自習室が使えなかった時期は例年より多く訪れていた。

また、高校生がゲームを片手にやってきて、ソファでくつろいでいる姿も見られる。飲み干したジュース缶を放って帰るなど行儀の悪

さを職員に叱られたりもするが、時々やってきてはボソッと挨拶をするなど、職員とも言葉を交わす機会が増え、学生たちとの距離は縮まっている。

(2) 放課後のたまり場（浜手公）

浜手公は、1989年二色パークタウンのまちびらきと同時に開館。「子どもからお年寄りまで」を絵に描いたような地域に密着した社会教育施設だ。

公民館ロビーは子どもたちが放課後を安全に過ごせる場として開放し、自由なたまり場として利用されている。開館から30年を超えた今は、以前に比べると小学生の姿は少なくなったと言えるが、時々地域の高校生や大学生の姿も見られる。「ちょっとそこの若い子、これ手伝って」と地域の大人が彼らに声をかけ、断れずに手を貸す青年たちの姿が微笑ましい。

・ロビーは地域のまんなか

浜手公のロビーには図書館の分館である図書コーナーがあり、その傍らではいつでも卓球やゲームができ、子どもが来やすい雰囲気づくりがされている。子どもが公民館に来ること、講座に参加することは、大人にも来やすい雰囲気を作り、大人たちの結びつきを強める等、大人にも影響を及ぼしてきた。講座事業を展開する中で、浜手公は地域児童館に匹敵する役割やふるさと作りの役割を果たしていると考えられる。

(3) ヤマチクと親しまれ（山手公）

近隣の小学校の子どもたちがロビーに遊びに来る。中学校の通学路の途中にあるので、学校帰りに立ち寄る。山手公は「ヤマチク」の愛称で親しまれている。

公民館が子どもたちにとって気軽に利用できる場であることを知ってほしい、子どもたちにも公民館を利用してほしいという思いから、ロビーでは、卓球台やゲーム、けん玉などあそ

び道具が揃えられて貸し出されている。

そんな中、令和5年の夏休み、山手公には毎日約20人以上の小中学生の来館があった。

日々、ロビー利用者が増える理由には、子どもたち同士のロコミが最も大きかった。ロビーで遊んだり、夏休みの宿題をしたり、目的は様々だったが、涼しく、大人たちの目がある公民館は、子どもたちにとって安心して過ごせる場所だったのである。

また、子どもたちが職員や公民館を利用する大人たちと話す場面も多くある。マナーの悪さに叱れることも少なくないが、子どもたちにとって、地域の大人たちと話すことは、家庭や学校以外の地域との関わりができる場所になっている。さらに、公民館利用者からは、「子どもがいたら私も元気になる」「子どもがたくさん来る施設になってとても良い」という声があり、地域の大人にとっても今の子どもを知る場となり、相互に良い影響を与えているといえるだろう。

今後も公民館が子どもたちにとって気軽に来れる場所であり、異世代・異学年と交流できる場としていきたい。

5. おわりに

公民館は目的がなくても来られる場である。講座や活動に通う青少年もいれば、ロビーで遊んだりくつろいだりしている青少年もいる。公民館は安心して自分らしく居られる場であるということだろう。

公民館は多様な人々が出入りする場である。公民館での出会いが、その後の人生に大きく関わることもある。そのことを鑑みれば、多感な青少年期をどう見守り育てていくのか。ひとりの大人として決して無関心ではいけないはずだ。

かつては学校へ出向き総合学習などにも協力した経緯が公民館にはある。今一度、学校と連携を強め地域の青少年の顔が見える関係づくりを考えていきたい。

市民とともに作り出す協働の場

1. はじめに

市民と職員が企画運営を行う代表的な事業に、公民館大会、公民館まつり、しゃべり場★公民館がある。どの事業も対話や議論が大事とされている。これらの事業に関わったことを起点に、その後の活動や行動に変化がみられる人も多く見受けられる。

これらの事業を成し遂げることも大きな目標だが、本番までの過程に成長となる様々な気づきの要素がある。市民と職員がともに育ちあう場としてどのような協働の場を実現してきたかを記したい。

2. 公民館大会

貝塚公民館大会は年に1度、公民館の役割や歴史を学び、自分たちの課題や今後の公民館について語り考える場である。

毎年、実行委員会を起ち上げ半年以上の時間をかけ市民と職員で作り上げる大会となっている。

「公民館ってどんなところだろう」そんな疑問をもつことから始まる公民館大会実行委員会。プロセスの中で「わたしの公民館」から「わたしたちの公民館」への意識の変化がある。様々な気づきを仲間に伝え、公民館活動の大切さを次の担い手へとつなぐキーパーソンとなっている。

公民館の役割を知るだけでなく自身の活動を振り返り、次の一步を生み出す公民館大会。「あってよかった」だけに留まらない公民館の存在を、広く市民に向けて発信する場である。

・第8回貝塚公民館大会(2020/3/14)-中止- 「本当に知ってる？公民館のこと」

講師：佐藤一子（東京大学名誉教授）・村田和子（和歌山大学教授）・志鎌克巳（守口市職員）

公民館の存在をもっと広く伝えたい。強い思いを持ち、5月という早い段階に実行委員会を

起ち上げスタートを切った第8回貝塚公民館大会（以下、大会）。コスモスシアター中ホールの400席を参加者で埋めようと広報に力を注ぎ、より多くの利用者に大会に関わってもらおうと動画づくりに着手した。「私にとっての公民館」をフリップボードに書き多くの利用者の画像を撮り、動画としてまとめた。

また、大会までに2回の事前学習会を行い、公民館がおかれる状況や課題を考え合った。

しかし、本番直前の2月末にコロナのため事業自粛という市の方針が決定し中止となった。

どこにもぶつけようのない憤りや悔しさに実行委員は涙した。ただ、この過程こそが大会の成果でありこの経験を次に活かそうと拍手でたたえあい大会を閉じた。

・第9回貝塚公民館大会(2021/2/7)

メイン会場浜手/サブ会場中央公、山手公ハイブリッド形式

「やっぱり好きやねん♡公民館

～コロナで知った公民館の大切さ」

講師：村田和子（和歌山大学教授）

昨年の経験から、学びを止めないことを心に決め、緊急事態宣言下ではあったがオンラインを活用して開催。オンラインの環境が不十分な中で3館をつなぐハイブリッド形式に初挑戦した。



大会は、各館のパネラーがコロナ下での活動を報告しグループトークを経て、講師からアドバイスをもらった。

コロナで活動ができない、仲間と集えない苦しさが語られ、日常の公民館活動が、当たり前

ではなかったことに気づいたこの大会。文化や活動が「生きる」ということに直結していることを知ったことは大きかった。講師の「公民館は命綱でしたね」との言葉に公民館が不要不急ではなかったことが確認でき、学習や活動再開への後押しとなる大事な大会となった。

・第10回貝塚公民館大会事前学習会

(2022/1/18) ハイブリッド形式

「持続可能な未来に向けての学びと公民館」

講師：佐藤一子（東京大学名誉教授）・村田和子（和歌山大学教授）

市民から必要とされる公民館であるために、公民館が抱える課題をどのような学びの中で、どう切り拓けばよいのかを、佐藤一子先生を迎えて公民館大会の事前学習会を行った。佐藤先生は第8回公民館大会が中止になり、お招きできなかった講師である。当初対面の予定だったが、感染症の急拡大を受け、佐藤先生は自宅からオンラインでの講義となった。

参加者からは「学歴社会と異なる新しい価値観を社会教育が生みだしていかなくてはならない」「こうしてみんなで学ぶことはやっぱり必要だな」という声が聞かれ、コロナで自粛し続けた生活に光が見えた学習会となった。

・第10回貝塚公民館大会(2022/2/6)

MIX会場中央/サグ 会場浜手、山手ハイブリッド形式

「夢をつなぐ公民館 行き場から生き場へ」

講師：牧野篤（東京大学大学院教育学研究科教授）



事前学習会から約2週間後、感染症がさらに拡大する中ではあったが牧野先生は会場に足を運んでくれた。人生100年時代が提唱される中、この社会を次の世代につないでいく、そういう人間関係をつくる場に公民館がなっていることや、「社会教育を基盤とした人づくり、つながりづくり、地域づくり¹⁾」が、教育の分野だけでなく各省庁からも求められていることを知り、公民館の学習（活動）は社会から求められ、さらに応えていかなくてはならないと再認識した大会であった。

1・文部科学省 人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について答申 平成30年12月21日

・第11回貝塚公民館大会(2023/2/26)

MIX会場山手/ハイブリッド

「共に学ぶ だれもが主役の公民館」

講師：堀内秀雄（和歌山大学名誉教授）

パネラー：日本語会話よみかき教室ボランティア・NPO法人わとわ理事・ワークサポートらばん職員・浜手地区公民館クラブ「リトミック1・2・3」クラブ員・貝塚ファミリー劇場会員

子育て中の親や障がいがある人たち、高齢者など多様な人たちが公民館で学び、交流し、そこで得たことを地域や個々の人生に活かしているという実践報告が、堀内先生のコーディネートで進行された。学びが届き難い層や社会的に弱い立場におかれている人たちに対して、様々な手段で学習の機会が公民館で展開され、その学習成果が個々の成長に寄与していることが5人の報告者から語られた。

公民館は「つどい、まなび、まじわり、むすぶ」の4原則に「支え合い、助け合い、励まし合う」ことが求められている。SDGs理念である「最も遠くにいる人から、手を差しのべることが必要だ」と堀内先生がまとめられた。それを達成するために公民館の学習機能があるのだと、その役割を確かめる大会であった。

・第12回貝塚公民館大会(2024/2/4) 対面

会場 コスモシアター中ホール

貝塚市市制施行 80 周年・貝塚公民館 70 周年記念事業

「公民館ができるまちづくり

～つながる、関わる、育つ、そして地域へ～」

講師：山崎亮（コミュニティデザイナー）

牧野篤（東京大学大学院教育学研究科教授）

貝塚公民館 70 周年の節目を迎えた第 12 回貝塚公民館大会実行委員会は 6 月に立ち上げられた。

公民館の歴史を尊重しつつ、未来に向けての公民館像を描きたい、新しい風を吹かせたいとの思いをもつ職員と、公民館活動や団体の実践をもっと広く多くの人に伝えたい、知ってもらいたいとの思いをもつ実行委員が議論を重ねテーマが決まった。公民館を利用している人も、そうでない人にも届くメッセージを、と公民館大会ニュースの発行やカウントダウンボードの作成など次々と提案され実行された。

コスモシアター中ホールの 400 席を埋めたいとの意気込みもあり、プログラムは午前の部、午後の部を設け、子育て中の親にも参加してもらいたいと保育をつけ、昼ご飯には豚汁とおにぎりのまかないも設定された。



また、午前午後ともオープニングの時間を設け、貝塚子育てネットワークの会の親子ダンスや、ウクレレ演奏（山手公 オルオルウクレクラブ）、ストレッチ体操（浜手公 ストレッチ体操浜風クラブ）など盛りだくさんな内容になった。

約半年の準備期間を経て、いよいよ本番を迎えた。当日は 450 人の参加があり、中ホールは満席となった。公民館利用者以外の参加者も多く、庁内職員、市議会議員やまちづくりに関わる人たちなど市内外から多様な人々が詰めかけた。



講演会では、山崎亮先生、牧野篤先生のお話に感銘を受け何かしたいというワクワク感に駆られた人も多かった。講演を聞くだけではなく、最後は会場の人から意見をもらう会場トークの時間も設けた。長時間ではあったが、この学びを公民館の新しい風に変えていくという機運に満ちた大会となった。

☆公民館大会協力団体☆

公民館保育ボランティア・ふれあい料理ボランティア（中央公）・コスモ写真クラブ（中央公）・貝塚子育てネットワークの会（中央公）・オルオルウクレクラブ（山手公）・ストレッチ体操浜風クラブ（浜手公）



3. 公民館まつり



公民館を拠点に活動するクラブや団体が日頃の成果を発表する場である。中央公では毎年5月に開催。浜手公（10月の第4週）、山手公（10月の第3週）と各館によって開催時期は異なる。

2019年の来場者は中央公では延べ1万人を超え、浜手公では延べ1,800人、山手公では延べ1,300人（各2日間）と会場に多くの市民が足を運ぶ。

クラブや団体が主となり実行委員会を起ち上げて運営される公民館まつり（以降、まつり）は、多くの人の知恵と力の結晶である。

・公民館まつりの中止と再開

2020年のまつりに向け、中央公はすでに2019年12月に実行委員会を組み「ワンチーム！つながろう公民館まつり」というテーマまで決めていた。しかし2月になるとイベントや集会の自粛が要請され、やむなく中止とした。秋に開催予定の山手公、浜手公の2館も通常開催中止の決定をした。

2022年は3館ともに公民館まつりを復活させた。

・各館のまつり再開

2022年中央公では、従来の規模を縮小し屋内で開催。広報活動は控え目ではあったが、事業を成功させることで公民館の活気を取り戻そ

うということに重きを置いた。約2,600人の来館があり、翌2023年は通常開催に踏みきり、約5,100人の来場者があった。2年のブランクに実行委員からは「体力面で負担を感じるが多かった」とこぼしていたが、コロナ前と同じまつりの光景を目にして喜びに溢れた。

浜手公では2020、2021年は利用者連絡会所属クラブの有志で小規模開催。2022年は屋内のみで開催した。

誰も正解が判らない中、人が集中しないまつりを考え、舞台やクラブ活動の映像発表を試み開催したことは、自粛していた活動を取り戻すきっかけにもなった。コロナ以前の賑わいはなくても、中止せずに「やってよかった」そんな声があちらこちらで聞かれた。



ただ毎年「去年はどうしたか、どう運営したか」を回顧しながら協議を重ね築いてきたものが、コロナで途切れてしまったことが悔やまれた。

しかし、市民と協働で行ったコロナ下の3年にわたる経験の中で新しい取組みにチャレン

ジできたことの収穫は大きい。出来ないことに嘆くのではなく、コロナ下でもできることを考える。利用者とともに考え築き上げた経験と実績は今後のまつりにバトンを繋いでいくことになるだろう。

山手公では毎年、まつり前には実行委員全員で、敷地内の草刈りを行うのが恒例になっている。委員の中には「業者に頼んだらいいのに」という声もあるが、気持ちよく来場者を迎えようという思いの元、実行委員のつながりを深め合う場になっている。

2021 年は、「クラブ活動発表会」と名称を替え、開館 30 周年と活動協議会 30 周年事業として取り組んだ。職員が“クラブ訪問インタビュー”をし、30 周年へのお祝いメッセージやクラブ自慢を聞き取り、まとめたものを写真と組み合わせ、ロビーで展示した。この取り組みは職員にとってもクラブの実情を知る機会となった。またクラブ員の中には開館当初から活動している人もあり、古い写真を持ち出して、当時の思いを語ってくれた。



2022 年は、3 年ぶりに通常のまつり開催となったが、検温と消毒を済ませた来場者全員にリストバンドを配布し感染対策を行った。

・まつりの醍醐味

この数年の経験を経て、まつりに参画し自らが出演、出展、出店することが日々の公民館活動のエネルギーになることが再認識できたことは利用者、職員にとって意味のあることだっ

た。

なんのために公民館まつりをするのかを考えることから、自らの活動を広めることに楽しさや自己満足だけではない充足感を見出した。人と関わることが生きていく上で欠かせないことをまつりや日々の活動で確認した。実際に関わることは、わずらわしいことも多いが、それ以上の達成感を感じると口をそろえて言う。

まつり終了後は、市民からクラブ見学の問い合わせが多く、公民館活動を多くの市民に広める機会となっていることも大きな特徴である。

4. しゃべり場★公民館

2011 年の 3 館公民館連続講座をきっかけに、市民と職員がともに公民館の必要性や役割を考えていこうと 2012 年 6 月に「しゃべり場★公民館」（以下、しゃべり場）は誕生した。

2020 年からの 4 年間は「コロナ」に振り回されたが、2022 年にはしゃべり場が 10 年の節目をむかえ、次の 10 年に向けて進みだした。



公民館休館の影響もあったが、利用者との対話を大切にしている「しゃべり場★カフェ」や各クラブを訪問して話を聞く「クラブ訪問」は、対面に加えオンラインを活用しつつ形を変えて活動を続けてきた。

・しゃべり場 10 周年

10 年という節目を意識し、2022 年度は 4 回の講座を企画した（内 1 回は講師の都合で中止）。

連続講座を運営する過程で、人と人がつなが

ること、学び合うことが生きる上で必要なことを感じ取り、公民館を大切に思う気持ちを新たにした。

また、これらの事業でしゃべり場メンバーとクラブ員や利用者の間に、公民館が必要だという意識にあまり差がないことに気づかされた。

このことは、しゃべり場メンバーにとって、多くの人が活動の後押しをしてくれているようで大きな自信となっている。

・冊子づくり

これまでの 10 年を振り返り、活動を仕切り直すためにも冊子の作成に取り組むことにした。

講座の企画・運営では経験豊富なメンバーも、冊子として書き残すことは初めての体験で苦戦した。過去にさかのぼって思い出しつつ作業をすることは、筆がすすまないことも多かった。

しかし、それぞれの思いやしゃべり場に参加するきっかけについて話し合うことで徐々に軌道に乗り、冊子づくりもスピードアップしていった。

・動画作成

「しゃべり場のための動画を作成したら」との講座講師の助言に、即座に計画を立てたメンバーたち。そして、動画出演を快く引き受けてくれる利用者の協力で、講座のテーマにそった動画ができあがった。動画を見た参加者からは、「しゃべり場って、何をしているのかわからなかったが、動画を見てよくわかった」「どんな人たちが活動しているのかよくわかった」などと感想を聞き、メンバーにとって作った手ごたえを感じることができる機会であった。

・対話の場をつなぐ

「公民館の必須性」と佐藤一子先生が公民館大会事前学習会でおっしゃった。

公民館の中だけの活動にとどまらず、公民館で学びを得た人たちがどれだけ地域で活躍の

輪を広げていくかを利用者とともに考えていく場がしゃべり場だ。複雑化する社会の進行で、公民館の学びの必要性が真に問われている。

市民と職員がともに語り合う場は、全国でも珍しく貴重である。現代の課題に向き合い、10 年先を見据えながら、誰もが気軽に参加できるしゃべり場という対話の場を大切にしていきたい。

5. おわりに

事業は目的ではなく、自らの手で課題を切り拓く力を得るための過程である。多様な社会を知る機会でもあれば、社会で必要とされる知恵や工夫を学びと実践の中で獲得する機会でもある。

様々な事業を通して力量のある市民に多く接してきた。公民館での学びや活動が活発であるからこそ、自分で考え、判断し、行動できる人が公民館には多く存在すると考える。

この学びや活動で力をつけた市民が、今は地域への課題に目を向け、学びの場を作るリーダーであることも少なくない。これからもそのような人が育つ場である協働の場を後押ししていきたい。

公民館職員の専門性と職員研修

1. はじめに

公民館の歴史は市民と職員が共に創り上げてきたものである。市民の活動を支え育んできた職員の営みがある。かつて「職員」というより「職人」と言ったほうがよいくらい生き方そのものが社会教育であるという職員が貝塚公民館には存在した。

1985年には社会教育部門における専門職制度が確立し、その専門性にもこだわってきた。

そして今も講座事業に留まらず、団体の活動支援や地域に出かけるなど奮闘する職員の姿がある。一体、公民館職員の専門性や力量とはどういったものだろうか。ここでは、現場職員の視点を主として貝塚公民館としての職員の専門性を追っていきたい。

2. 職員体制

2023年8月現在、職員数は18人。正規職員10人、会計年度任用職員は8人となっている。

育休中の正規職員が1人おり、アルバイト対応となっている。ほかに子育て中で短時間勤務中の正規職員が1人となっている。

・社会教育主事有資格者

18人中、社会教育主事有資格者（社会教育士を含む）は8人となっている。近年、社会教育主事講習への予算が2年に一度となり、また主事資格取得後の職員が異動するなどで半数以下にとどまっている。

・正規職員

正規職員は平均2年～4年で異動をしている。社会教育分野の経験がなく異動し、公民館がわからない、と戸惑う職員も多かった。

しかし、正規職員は様々な職場（部署）を経験し人脈の広さを強みとして、本庁の職員を通じて公民館活動を他課とつなぐことができるという一面がある。他課との連携は公民館活動

を地域に還元したり、地域と公民館とのネットワークづくりが広がるなど新たな展開へと導びかれている。市民と接する中で公民館への理解が深まり、やりがいを感じることも多く、「職員もまた市民に育てられる。」という言い伝えを実感する職員もいる。

・会計年度任用職員

2020年4月、公民館嘱託職員は会計年度任用職員（以下、会年）へと移行された。

貝塚公民館の会年で20年以上の職員は3人、10年以上も数名おり最長の職員で30年を超えている。

社会教育主事資格も8人中5人が取得しており、他に健康運動指導士の資格を有する職員や市民活動を長く経験した職員など、豊かな経験を持つ者が多い。

正規職員が短いスパンで異動していくことに対して、長期間公民館と共に歩む職員の存在がある。新人職員や他部署から異動した職員の育成という部分も担う。

また、会年は公民館の歴史を語れるだけでなく、市民と喜怒哀楽を共にした活動の伴走者でもある。その経験は公民館活動を豊かに展開する知恵へと結びついている。

3. 貝塚公民館の職員の専門性とは

公民館職員は、人と関わることを大事にしている。まずは顔と名前を覚えることが早い。活動歴の浅い人が、職員から名前を呼ばれ「え！私の名前を覚えているのですか」と驚く光景をよく目にする。私という個人を受け入れてくれているという実感は、公民館や活動に早く馴染み、活動に積極的に関わることにつながっている。

また、職員は人をよく観察している。その人が活動や事業に関わる中でどのように変化していったのか、些細な変化をキャッチする観察力と感性がある。

・キャッチしたことを共有する

個々がキャッチした変化を職員間で共有している。「おとなしかった方が積極的に会議で発言するようになった」「〇〇さんの表情が最近明るくなった」など、担当者でないと見えない事柄を全体で共有する。

担当者レベルを超え、どの職員もその講座や事業に関わる人たちが見える状態にある。人が育つ喜びや、その人が抱える苦悩、怒りの感情などを職員間で共有しつつ、さらによりよい方向に導くための方策を考えたり、その人を見守ったりしている。

・廊下やロビーでの立ち話から

「職員は事務所でパソコンとにらめっこばかりしている」10年以上前に、市民から叱られたことがあった。今もパソコンから目が離せないことも多く、それだけの仕事量があることも確かだ。

しかし、多忙な中でも職員は廊下やロビーでの利用者との話を大切にしている。クラブ活動の前後や、講座や事業では帰り際の時間帯の立ち話である。何気ない会話の中に、暮らしの課題や悩みが潜んでいる。皆の前では語れなかったことや、ひとりで抱え込んでいることなど個々の本音が垣間見える。そこに寄り添い共感する職員は、そこで拾い上げた課題を次の事業へつなげることもある。

廊下で利用者と長々話しているなど、一見無駄なように思われがちだがそうではない。さりげなく会話をもちかける職員の力量もさることながら、この場を職員間で理解しあえていることが貝塚公民館の特徴であるといえる。

・人が育ち合う場であるために

公民館は箱ではなく人である。公民館によっては、単なる貸館であったり、人が集まるだけの事業で終わってしまったりする。

貝塚公民館は、人が育つ学びの場を保証することを大事にしてきた。正規、会年、と立場の

ちがいはあるが、互いの特徴を生かしその姿勢を貫いてきた。そのためには職員としての力量形成の場が必要である。

・職員集団としての力量形成

公民館の職員は現在 18 人である。個々が多く講座や事業を受け持ち、育成団体を担当し、さらに一般市民や日々様々な出来事に対応している。

業務の量は、動けば動くほど増し、担当者だけではなく他の職員の力も借りながら乗り越える時も多い。

その中で課題になることは「職員集団としての力量をどう高めていくか」ということだ。

特に市民との対話や関係性を重視していることもあり、「共感」「共有」「感心」「関心」という4つのキーワードが大切となっている。

ひとりの職員が見聞きしたことを他の職員が「共有」し、そこに「共感」したり「感心」したりする中で、他の事に「関心」をもつ芽が生まれる。この循環が職員としての気づきにつながっていく。

また、他の職員の言動や考えが相互の力量形成にも大きく影響する。市民との対話を重視する職員は、職員間の対話（コミュニケーション）もまた大切にしているといえる。

4. 研修の場

・職員研修（K 部会）

2004 年から始まった研修部会（通称 K 部会）は、月に一度の 3 館合同会議の中で約 2 時間、職員研修の時間として位置づいている。

公民館の歴史や「〇〇テーゼ」などを学ぶ堅苦しい回もあり、全員が乗り気ではないが、貴重な職員の研修の場であるためこの機会を大事にしている。

3 館に K 部会担当者がおり、4 月から 12 月までの研修内容を決めて進行をする。内容を決めるのに毎年苦慮しているが、それも研修の一環としている。

新人職員研修を兼ねて先輩職員が語ったり、現代課題を語り合ったり、講座や事業で使えるようなレクリエーションやアクティビティを盛り込むなど、幅広く学べるように考えている。

研修の中ではその職員の新たな一面を見つけだす機会にもなりコミュニケーションの一助にもなっている。

K 部会 5 年のプログラム

・2019 年度(令和元年度)

	テ ー マ
4月	自己紹介（「実はわたし・・・」を含めて）
5月	実施せず
6月	新任職員の「教えて」「知りたい」に先輩職員がこたえる
7月	広報手段とその内容について（広報紙・HP・FB・ちらし・ポスター等）
8月	「障害者差別解消法」について 講師：篠川 一樹さん（大阪府立光陽支援学校教頭）
9月	府下公民館の状況について 講師：西尾 征樹さん（府公連事務局長）
10月	社会教育主事講習を報告 報告：川上 恵里（浜手公職員）
11月	災害時の対応・避難所運営について公民館職員で考える
12月	ファシリテーションについて 講師：小松 茂美さん（大阪狭山市公民館）

・2020 年度(令和 2 年度)

4月	自己紹介（4 つの窓～すきなもののバージョン～）
5月	実施せず ※休館中のため
6月	社会教育 DVD『こんばんは』視聴（92 分）
7月	コロナ対策をふまえた上での公民館避難所運営の仕方について
8月	『コロナと公民館』他府県・他市公民館の取り組み事例をもとに話し合う
9月	Zoom 講習会 講師：花村 奈々さん（浜手・踊るママ御殿）
10月	新任職員の「教えて」「知りたい」をみんなで考えよう
11月	SDGs についての学習 講師：中川 知子（中央公職員）

12月	相互理解・交流 講師：室谷 雅美さん（公民館利用促進アドバイザー・豊岡短期大学准教授）
-----	--

・2021 年度(令和 3 年度)

4月	自己紹介
5月	令和 3 年度公民館職員研修（K 部会）年間計画を考える ユネスコ学習権宣言を読み解く
6月	クラブ協議会（中央）・利用者連絡会（浜手）・活動協議会（山手）各館の活動状況など情報共有 ホワイトボードミーティング形式
7月	社会教育法令を読み理解を深める（4 つのテーマ他）
8月	子育て講座について3館公民館で情報交換
9月	社会教育主事講習報告 報告：池田 浩子（中央公民館職員）
10月	「著作権」についての再確認
11月	Zoom ミーティング 講師：室谷 雅美さん
12月	「ポッチャ」「コーンホール」のルールを学び実践する

・2022 年度(令和 4 年度)

4月	自己紹介（「私は誰でしょうかゲーム」を含めて）と交流
5月	貝塚市役所新庁舎見学
6月	公民館関係団体・委員会等一覧表、三館連携事業より現状・課題の共有
7月	月刊公民館ちゃんねる視聴会（オンライン公民館「直営はつらいよ？」）
8月	貝塚公民館が今、考えなければならないこと 講師：室谷 雅美さん
9月	社会教育主事講習を受けての報告 報告：小山 智子（浜手公職員）
10月	今後の公民館の動向～全国の公民館の調査から～ 講師：萩原 雅也さん（大阪樟蔭女子大学教授）
11月	レクリエーション研修（室内オリンピックの内容と進め方について） 講師：西本 仁志（山手公職員）
12月	3 館会議 Zoom 開催により K 部会なし

・2023 年度(令和 5 年度)

4 月	実施せず
5 月	自己紹介と交流 (4 つの窓、高さ比べゲーム、ジェスチャーゲーム)
6 月	「つどい・まなび・むすぶ」を、多くの市民が「知る・広げる・使う」ために職員と利用者ができること 講師：室谷 雅美さん
7 月	映画『知らない二人』から多様性を考える
8 月	教えて先輩！「講座の企画～立案から実施まで～」 発表者：大野 幸子・奥埜 由起子(中央公職員)
9 月	Zoom 開催 (Zoom でできるゲーム)
10 月	“えんたくん”を使ったワークショップ。「公民館職員としての思い」
11 月	「市民の力を生かし、活かすために」 講師：堀内 秀雄さん(和歌山大学名誉教授)
12 月	Zoom 開催



・貝塚主事会

1985 年、社会教育専門職制度の確立により発足した貝塚主事会¹は、当初中心となっていた職員の異動や退職の後、活動が滞りはじめた。

2018 年、取り組みの共通意義が見出せないと主事会の歴史と意義を確認するために先輩職員（現和歌山大学教授）を招いて学習会を行うものの、その後も会議の回数が減っていき翌年には一度も開催されなかった。

公民館ではそういった状態を危惧し主事会の必要性などを考えようと持ち掛け話し合いの場を設けた。また、社会教育主事講習の報告

会などを提案し主事会復活の機会にしようとしたがそれも実現に至らなかった。2020 年からは、コロナの流行もあり現在では貝塚主事会の存在も薄れてしまっているようだ。

さまざまな社会教育分野の職員が集まり、現在の貝塚の社会教育やそのあり方を考えていく場をどう再生していくのか、公民館からの今後の働きかけがカギとなっている。

1 貝塚主事会は 1985 年社会教育専門職制度の確立により社会教育課を事務局として発足。社会教育課関係課長会と緊密な連携をもちながら活動をしてきた。＊社会教育課・郷土資料室・図書館・青少年課・青少年人権交流館・スポーツ振興課・公民館（中央・浜手・山手）の職員で構成されている。

5. 書いて表す大事さ

貝塚公民館では、開館当初から「あゆみ」や「紀要」として書いて残すことを引き継いでいる。「書く」という面倒な作業は、時には「こんなもの、誰が読むのだ」「誰のために、何のために書くのだ」と否定されてきた。

しかし、この記録誌があるからこそ、活動や講座事業が市民にとって意味のあるものだという根っここの部分が共有できる。また、公民館の学びが発端となり、この地に根差した活動を地域に広げたという市民の姿を追いかけることができる。

書くことで職員は公民館の学びが何を目指し、そこで何を見聞きしたのか自己と向き合い確かめる時間になる。これからの職員としてのあり方も含めて考え成長する機会でもある。

・紀要

開館当初から 5 年に一度、公民館の歩んできた道を記している。40、45 周年は利用者と共に書き、50 周年は 17 人の職員が 2 年近くかけてレポート形式で執筆を行った。

書くにあたり、自分が生まれてもない時代の紀要を読み返したり、古くから活動をしている利用者から何度も聞き取りをするなど、日常の業務に追われながら、紀要執筆はとてつもの

い労力を要するものであった。

紀要は、あゆみとは違い5年という歳月の中での公民館のふりかえりである。貝塚公民館の蓄積された歴史を知ること、何を大事に学びの場を創造してきたのか、利用者や市民に与えた影響はなどを明らかにするのに役立つ冊子である。職員は何を見聞きしたのか、人はどう変わっていかうとしているのか。この紀要の執筆で表には見えないことに気づく機会であることにはちがいない。

・あゆみ

1年間の講座事業をまとめて年度末に発行。各担当者が執筆する。執筆したものは、各館で読み合わせが行われ、その事業に対しての質疑や課題などを話し合い、ある程度の評価を受け、次期の事業継続の判断が行われる。

各館での評価が終われば、3館で回覧がありすべての職員があゆみの原稿に目を通すことになる。ここでの校正がかつては厳しく、真っ赤に校正されて返ってくる原稿に半泣きになる職員もいるほどだ。

たいへんな作業ではあるが、あゆみを介して職員間で議論することは、自己評価だけに留まらず、成果や課題を見出し、次のステップに結びつける作業となっている。議論での気づきは意欲や励みとなり、職員間での共有・共感に講座事業の質を押し上げることになる。

この総括に1月～3月の期間を費やし、館長は職員の原稿を元に事業評価や総括、次年度の目標などの作成にかかる。

・1年の取り組み

3館それぞれに、その年度に行われた特色のある講座や事業を取り上げ、紙面作りをする。

1年の取り組みは主に地域に出かける時や視察などで利用し、公民館のことを身近に感じてもらえるよう配布用として作成。

それぞれの見出しに館のカラー（中央＝赤、浜手＝青、山手＝緑）を用いている。

6. おわりに

「公民館には磨くとダイヤモンドのように輝く原石が埋もれている」とあるベテラン職員はこのように話す。その人が輝きだすと、自分事のように喜ぶ職員の姿がある。

社会教育は人の人生を照らし幸せにする仕事である。そこに喜びを見出せる職員がいてこそ生き生きと人が集い活発な公民館になるのではないだろうか。

今、職員が目指すのは風通しのよい公民館である。たっぷりの経験を積んだ職員と新しい発想を抱えた職員たちの切磋琢磨がこれからの公民館を切り拓くことになる。

大阪の公民館・阪南地域の公民館

1. はじめに

大阪府は現在 43 市町村あり、かつては各市町村の公民館を大阪府公民館振興協議会（以下、府公振）でつなげてきた。

しかし、時代が「昭和」から「平成」へと移るとともに社会状況が大きく変化し、公民館のあり方も多様化していく中で、2013 年に府公振は解散し、新たに大阪府公民館・関連施設連絡会（以下、府公連）を組織した。

府公連は、現在、大阪教育大学が主催していた「社会教育施設職員の学び合い講座」¹（以下、「学び合い講座」）を継承して主要事業とし、社会教育施設職員の交流と資質向上に向けた活動を行っている。

時代の変化に多様化する府下公民館の状況の中、府公連、そして南河内社会教育審議会公民館部会とともに府公振のブロック活動を引き継いでいる阪南公民館運営研究協議会²（以下、阪公運）ではどのような取り組みが行われているのか、また府下全体の公民館との連携などを取り上げる。

1 「学び合い講座」は 2016 年度まで大阪教育大学の主催により開催されていたが、2017 年度から府公連が継承し、以降、大阪教育大学と大阪府教育庁の協力を得て開催している。

2 阪公運は高石以南の各市町が加入していたが、現在では高石、岸和田、貝塚、阪南、忠岡、田尻の 4 市 2 町となっている。

2. 大阪府の公民館

・大阪府公民館振興協議会（府公振）

府公振は大阪府の公民館間の情報交換の場であり研修の場であった。取り組みとして「公民館大会」を主催し、「大阪府下公民館職員交流研修会」の企画、他府県の公民館を訪問し研修を行う「国内研修」など公民館職員にとっては他の職員と知り合い、学び合える貴重な場であった。

1955 年に発足した府公振は、最盛期には 39

市町村が加盟し、6 ブロック（三島・豊能・北河内・中河内・南河内・阪南）に分かれて活発に活動をしていた。

理事役員会と主事・女性部会（旧女子部会）の 2 つの組織があり、各ブロックから選出された代表で運営を行っていた。

しかし、自治体の機構改革、行財政改革、社会教育法の改正や地方自治法の改正（2003）に伴い指定管理者制度の導入が行われ、民営化や形を変えるなど公民館の多様化が進み、加えて、各市町村の公民館では、正規職員の引き上げに伴い職員の嘱託化が進み、社会教育主事や公民館主事の専門職制度が形骸化し始めるなど、公民館の根幹にかかわる課題が徐々に浮かび上がってきた。

また、府公振や各ブロックを担う役員は輪番制などのために、役割や意義を理解できないままに目の前の事業をこなすだけとなり、負担感だけが増していった。さらに、折からの財政難により負担金の予算化が難しくなってきたこともあり脱退する市町村が相次ぎ、2011 年度には加盟市町が最盛期の約半数である 19 市町まで減少した。

そのような状況にあっても組織を存続させようと活性化策の模索が続けられたが、2012 年度に 9 市町が一度に脱退したことが決定打となり、解散の方向へと流れは変わった。

こうした環境の変化に対応すべく、負担金を求めず、公民館だけではなく関連施設も幅広く網羅した府公振に代わる新たな組織（府公連）の結成が検討されはじめ、最終的に 2013 年 5 月に貝塚市立中央公民館で開催された総会をもって府公振は解散した。

・大阪府公民館・関連施設連絡会（府公連）

府公連は、府公振の解散と近畿公民館大会の大阪開催を翌年に控えるという差し迫った事態に対応するために、府内市町村の有志により結成されたが、貝塚公民館はその中心となった。

2014 年近畿公民館大会大阪大会は、厳しい体

制の中、府公連関係者、大阪府教育委員会及び貝塚公民館の協力により何とか貝塚市での開催にこぎつけ、成功裏に終えることができた。

府公連は当初、この大会の終了とともに解散する予定であったが、なお資金が残ったため、その後も近畿公民館大会の運営に携わる組織として運営が続けられた。

各公民館・関連施設から負担金などを求めず、府公連から引き継いだ残余金と公民館総合補償制度の広告費収入を新たな活動資金とし、会議も極力抑えて負担軽減を図りつつ、大阪教育大学や大阪府教育庁と連携しながらの「学び合い講座」開催や「府公連だより」を発行し広報にも努めてきた。

しかし、2017 年度に活動を支えてきた幹事の多くが退職を迎える事態となり、次年度以降の人材確保の目処が立たず運営が厳しくなること、また、その状況で 2020 年に近畿公民館大会開催の輪番が大阪府に回ってくることから、早急に開催の可否を決定する必要に迫られ、2017 年 8 月に臨時総会を開催した。

総会では、近畿公民館大会の開催については「辞退止むなし」との結論に至り、事実上、近畿公民館連絡協議会からの脱退へと向かうことになったが、職員研修の場としての「学び合い講座」については存続を望む声が多く聞かれたため、運営のあり方を見直すことを前提に府公連の活動は継続されることとなった。

以後、近畿公民館大会については、分科会の担当も含め大会運営からは完全に撤退したものの、現在に至るまで、大阪府教育庁とともに府下市町村担当課及び各公民館等に働きかけ、大会への参加は続けている。

一方、「学び合い講座」は、2018 年度より新たに企画委員を募ることとなり、これからの社会教育を担う意欲ある若手職員を中心に 6 名が委員となり講座の企画・運営を担うようになった。

講座は年 3 回程度開催されているが、社会教

育施設が多様化し、職員の非正規化も進む中、施設の運営形態や職員の雇用形態にかかわらず参加できる場であることから、府内の公民館や社会教育関連施設の正規職員のみならず、他施設の職員と交流しながら社会教育を学び合える場を求める多くの非正規職員もこうした機会をチャンスと捉えて参加し、切磋琢磨する姿が見られた。

府公連としてこのような活動を続けていくためには、やはり役員の担い手が必要であることにはちがいない。講座の参加には、積極的な職員が見受けられる一方、有志職員で運営するが故の限界もある。

できるだけ多くの職員に関わってもらいたいが、組織を担う役員など中心的な役割になると引き受けられる条件が職場では整わず二の足を踏まれる。職員体制や交通費などが予算化されていないなどの理由により、担い手の確保に苦勞するのは時代を映すようで歯がゆいばかりだ。

貝塚の公民館は府下の社会教育・公民館活動をリードする存在として、府公連の結成時から常に役員を派遣し、時には会長の職も引受けて会のイニシアティブをとり、各市町村に「学び合い講座」に参画することへの理解を求めている。

3. 阪南公民館運営研究協議会

・阪公運のいま

府公連の時代、阪南地区のブロック組織であった阪公運は 7 市 4 町の公民館で構成されていたが、折からの財政難や職員の非正規化などの理由により泉大津市、泉佐野市、泉南市、熊取町、岬町が脱退し、現在では 4 市 2 町にある 11 公民館での構成となっている。貝塚からは 3 館ともに館長と実務担当者の計 6 人が参画している。

かつて阪公運には館長会、主事会、女性部会と 3 つの部会があり、それぞれ月に一度の定例会が開かれていた。また、毎年、各市町の公民

館職員、公民館運営審議会委員、公民館利用者が一堂に会し、持ち回りで「阪南ブロック大会」を開催するなど、府公振の各ブロック組織の中でも活発に活動していた。

しかし、前述の市町が脱退し、阪公運に残った市町の各館も職員体制が厳しくなる中、各部に担当者を出席させることが困難になったため、2013年に主事会と女性部会を統合して実務担当者会（以降、実担会）とし、以後、2つの部会で活動が行われている。

また、「阪南ブロック大会」は、公民館運営審議会が形骸化により廃止、あるいは社会教育委員会に統合される市町が出てきたこと、また、各市町の公民館利用者団体を組織した阪南地区公民館利用者連絡協議会（略称「阪公連」2022年解散）も高齢化やクラブ員の減少により役員の担い手が少なくなり、脱退が相次ぐなどの事情も重なり、2013年の大会が最後となった。

現在では、年数回の協議会、館長会、実担会が開催されており、会の運営協議や各館の情報交換が行われ、研修会や視察など職員の資質向上に向けた取り組みも行われている。しかし、2020年度、2021年度は、新型コロナウイルス感染症の流行により「緊急事態宣言」が発出され、加盟各市町公民館が一時的に休館や開館時間短縮の措置を取る中、阪公運もコロナ対策として会議の開催回数を減らし、総会の書面による開催や視察研修を中止にするなど、協議会のメンバーが顔を合わせる機会が少なくなり、組織力の低下に拍車をかけている。

そのような状況にあっても、特に実担会は公民館職員の資質向上を図るべく、毎回テーマを決め資料を持ち寄り情報交換、意見交換を行っている。また2020年から公民館職員交流会を実施し、阪公運未加入の市町館に対しても、担当を決め直接足を運び阪公運の存在をまず伝え、参加を促している。その結果、交流会への参加をきっかけに、実担会定例会へも参加するようになった館もある。各館の正職員の入れ替

わりはあるが、会計年度任用職員や指定管理の職員は固定化し、顔の見える関係づくりができつつあり、定例会への出席率も良い。



顔を見える関係ができたことにより、担当者を通じて他市の講座・事業の見学などを行ったり、自館の事業運営にどういさせるか情報を入手したり、互いに良い刺激となっている。また、実担会非加盟館である市町から、研修参加後に問い合わせの機会も増えた。

また、館長会も館長同士顔を合わせて情報交換する機会を増やそうと模索しており、阪公運のネットワークの復活に力を注いでいる。



阪公運加盟公民館の最近の動向としては、2021年に阪南市が既存の3公民館を「地区公民館」と位置付けて指定管理者制度を導入し、市

の直営による「中央公民館」を尾崎公民館内に置いて3つの地区公民館を統括する運営形態となった。指定管理者制度の導入により、独自の発想や視点で運営できる面がある一方、市とのつながりが希薄になり地域の情報が入りにくいといったメリット・デメリットを感じているようだ。

また、「管理者が代われれば職員も代わり事業の持続性、継続性がなくなるのでは」「採算が合わず、管理者の受け手がなければ閉館になるのでは」と懸念する声も聞かれる。

田尻町は、「総合文化センター」の建設に伴い既存の町立公民館が2026年に廃止される予定であることから、2024年度末をもって阪公運を脱退する意向を示している。

4. おわりに

府下では、府公振が存在していた頃は公民館職員の研修の場は多く、他市町との横のつながりも大切にしていた。現在では、府公連が開催する「学び合い講座」だけが存続しており、顔の見える関係がなくなっている。職員が入れ替わると組織が弱体化しその存在すら忘れ去られていく。近隣市町では、指定管理者制度の動きもあるが、運営形態は変われども、同じ公民館職員として地道に取り組みを進めている館と連携し、支え合いながら組織の存続をめざしていく。

公民館の広報

1. はじめに

公民館の講座事業やクラブ案内などの広報手段は市広報や、ちらしなど紙媒体によるもの、ホームページなどインターネットを活用したもの、利用者の口コミ等がある。多くの市民に届けるために、職員は常に努力をしてきた。それでも貝塚公民館は広報が下手だといわれることがあった。ここ数年で広報の手法は多様になり、インターネットの活用（SNS 発信）にも力をいれるようになった。

また、あゆみや紀要などの事業報告集、公民館案内などの冊子類も定期的に発行や見直しが行われている。

公民館や講座事業の魅力が多くの方の目に留まるような広報へと知恵を絞りつつ発信している。

2. 公民館の情報発信

（1）公民館の広報誌

・公民館タイムズ

公民館の情報誌「公民館タイムズ」は春・秋の年 2 回発行していた。3 公民館の講座事業の募集内容やクラブ案内など、公民館の情報が得られるという冊子であった。かつては「広報かいつか」に挟み込みをして全戸配布していた。

・広報かいつかへ移行

公民館タイムズは、2018 年 5 月から広報交流課（現：魅力づくり推進課）が毎月発行している市報「広報かいつか」の紙面に組み込まれることになった。

広報かいつかに、多方面からちらしなどの挟み込み依頼が増え、それをさばく各町会の負担が年々大きくなり、配布物の見直しがなされたことによる。

3 館の広報担当者が当初この変化に戸惑いながら新しい紙面作りに頭を悩ませていたことは記憶に新しい。引き続き、市民にとって見やすくなりやすい広報の紙面作りを目指して

いる。

・夏公民館タイムズ（夏の子ども講座）

「公民館タイムズ」とは別に、夏休み中に開催される青少年事業を掲載した「夏公民館タイムズ（夏の子ども講座）」は従来どおり市内の小中学校を通じて配布している。

子どもたちの夏の体験活動とあって、保護者も発行を待ちわび、多くの親子が手にとっている発行物である。

・公民館サテライト（浜手公、山手公）

浜手公、山手公で年数回発行していた公民館報である。

近隣地域に向けた公民館報は、毎回職員が手配りでポスティングしていたがその後、各町の町会長宅を訪問し市報への挟み込みをお願いしてきた。2 館では近隣地域とのつながりを大事にし、公民館報を通じて地道に信頼関係を築いてきた。やがて、広報物の統合により公民館サテライトは姿を消すのだが、同時に町会長と関わる接点や地域との交流の機会が減ることになった。

（2）ちらし、ポスター

講座事業のちらしといえば、完成に何日もかけることがあった。募集のかなめともなるだけに、かつては、ちらし作りの研修や講座を行い、効果的に見せる技術を学びながら腕を磨いてきた。

ところが、ウェブ用に適したアプリ（Canva）が 2023 年頃から登場し、簡単にプロのような仕上がりにできるようになった。SNS に載せるとデザインが目を引き、閲覧数が増えるのがわかる。特に若い人を対象にした講座では効果がてき面であった。

数年前からちらしに二次元コードを載せ、メールで申込みを始めたことも功を奏しチラシ効果を発揮している。

（３）ホームページ・SNS の活用

SNS の活用が盛んになり、夏タイムズの子ども講座も往復はがきの申込みからメールでの申込みに移行された。公民館も若手職員が力を発揮し SNS 発信に積極的に取り組んでいる。

一方、市の公式ホームページ内に公民館のページがある。2020 年にリニューアルし、より一層検索しやすく、市民が探しやすくなった。講座事業の告知から報告まで幅広く活用しているが、昨今、フェイスブックやインスタグラム、ためまっぷかいづか（後述）などの登場により、ホームページの閲覧対象が中高齢者層にややシフトしている傾向を感じる。告知と合わせて報告を載せることで、じっくりと見てもらうという役割へと変化しつつある。

フェイスブックは告知と報告を積極的に掲載している。ただ、市全体で活用をしているので目まぐるしく内容が更新され、他の情報にすぐに埋もれてしまうという面がある。

インスタグラムやラインは講座事業の告知に積極的に活用している。特に若者や中年世代向けに発信すると即、申込みにつながることもある。

2023 年 4 月から子育て支援課の「貝塚市めぐりつながりあい事業」の委託を受けた団体（NPO 法人えーる）が、子育て世代向け情報発信ウェブアプリ「ためまっぷかいづか」事業を開始した。子育て世代がその日に行ける場所を検索できる便利なアプリが好発進し、公民館の子育て講座事業の申込みにも反映されつつある。

また、市職員が共有する「C-net」の掲示板にも公民館の講座事業の情報を載せはじめた。本庁から異動してきた若手職員が「公民館はこんなに良いことをしているのに知らなかった」とつぶやいたことがきっかけである。市の職員であっても公民館が何をしているのか知らない人が多いことから、掲示板の活用をはじめた。仕事帰りに立ち寄れる夜の講座などに受講申込みがあるなど早速、効果が表われた。

（４）人が繋がる広報を

講座や事業の募集は、ただ周知するだけでは効果が薄く、広報のタイミングをいかに図るかがポイントとなる。

単発や短期間の講座を行う場合、その講座限りで関係が途絶えないような工夫がいる。

例えば、1 つの講座が終わる前に次の講座の告知をして申込みを促してみる。結果、学びが継続されることになり、繋がりが生まれる。昨今、長期や年間を通じての講座よりも短期間の講座が若い人を中心に好まれる。短期間の講座をうまくつなげることで、人がつながるサイクルが生まれ、中長期に公民館の学びに関われることになる。そういった循環を念頭に置きながら効果的な広報を打ち出していくようにしている。

3. おわりに

SNS の活用で、公民館に関心のなかった世代や、届けたかった世代に伝えられるようになった。一方、高齢者はデジタル活用に消極的な人たちも多く、講座事業のアンケート結果からも紙ベースでの告知もまだまだ必要だということがわかった。選択肢を増やすことでいつでも、だれにでも情報が届くような手段を考えていきたい。

団体支援

1. はじめに

公民館にはクラブを始めとして日々多くの団体が訪れ、それぞれの目的をもって活動を行っている。公民館の予定表には、朝から夜まで様々な団体の名前で埋まり活発である。

活動する人と人、また団体どうしが「顔の見える」関係を築け、さらに持続的に活動が行われるように支援をしている。

2. 各団体のなりたち

社会教育法第 22 条 第 1 項 第 5 号には、公民館は「各種の団体、機関等の連絡を図ること」と記され、貝塚市においても、公民館の使命として利用団体を支え、さらに発展するために活動者に寄り添いつつ支援することを開館当初から行っている。

開館して間もなく、公民館を利用するクラブ連絡会が発足、1956 年には公民館クラブ協議会が発足している。1989 年に浜手地区公民館、1991 年に山手地区公民館が開館すると早々に各々のクラブが集まり、利用者連絡会(1992)、活動協議会(1991)が立ち上がった。

また、1965 年に貝塚市美術協会が発足したことを機に、貝塚市合唱連盟や貝塚少女合唱団など、文化団体が次々と設立されていった。

同時に子育て世代の女性たちを中心に、公民館の学びをもとに公民館ファミリー劇場（現在の貝塚ファミリー劇場）や貝塚子育てネットワークの会が設立、公民館で学んだ学習グループが集まり学習グループ連絡会も立ち上がった。

こうした団体や連絡会の設立には、公民館職員の働きかけがあった。団体設立後も公民館では各々にきめ細やかな関わりと支援を行い、今日まで市民や地域の学びをけん引し続けている。

3. 各館のクラブ協議会

公民館では開館当初から、講座から発展させ

自主的な活動としてクラブ活動へ移行させるということが一つの方向性として示されていた。

公民館が開館した 1953 年にはクラブ連絡会が発足し、1956 年に公民館で活動するクラブの連絡組織として発展し、公民館クラブ協議会が設立された。

高度経済成長期における学歴社会の中での活動の停滞、2015 年の公民館の一部有料化による影響もあったが、現在も多数のクラブが公民館を利用し、クラブ協議会を構成している。

また、公民館クラブが地域に出かけて活動を行う「ほかでもがんばっているよ」という取り組みがある。各地域の町会、老人会をはじめ、学校園、施設など依頼のある場所に出向き文化を届けると同時に、公民館活動を発信する役割を担っている。

・中央公民館クラブ協議会

中央公民館クラブ協議会（以降、協議会）は、現在 43 団体が協議会に所属している。



協議会の役員は輪番制を敷いてやっとな回りした。もちろん、役員に当たった当初は誰もが何もわからず会議に出席している状態だった。しかし、協議会の任務を果たしながら、公民館大会や公民館まつりなど大きな事業の実行委員会にも関わる中で、他団体の人とのつながりができ、自分たちの役割を見出せるようになっていく。クラブ員の高齢化やクラブ数の減少はあるが運営を担ってくれる人たちは着実

に育っているという手応えを感じる。

中央公民館まつりでは、クラブ協議会が中心となって組織されており、まつり実行委員会の委員長など役員を担うなど、各団体のまとめ役として存在感を発揮している。

ここ近年は、広報部会、地域担当研修部会、レクリエーション部会に分かれて、協議会としての活動を行っている。

広報部会は活動情報誌「泉のほとり」の編集・発行を年数回、会報誌「どらせな」の編集・発行を年1回行っている。「どらせな」は1962年度に発刊し、現在までに60号を数える。

地域担当研修部会は障がい者施設の美術作品を展示する「にっこり展」の開催と、クラブ協議会研修会の開催を担当している。

レクリエーション部会は年に1度クラブ協議会員が交流するためのイベントの企画・運営を担当し、バスツアーやバーベキュー大会を開催している。コロナ下にあった2022年にはボウリング大会を開催し、大いに盛り上がった。



コロナ時に、夜の活動が出来なくなったクラブ（公共施設の時短措置のため）や、部員の減ったクラブについては、時間帯を変更する等の工夫が見られ、困難な時こそクラブ員の結束と工夫が見られクラブの活性化にもつながった。

・浜手地区公民館利用者連絡会

浜手地区公民館では、1989年開館当時15クラブが発足し、浜手地区公民館利用者連絡会

（以降、利連）が1992年に発足した。現在は25クラブが利連に所属している。

主にふれあいまつりと年に一度レクリエーションの開催、8月と12月に大掃除を行っている。＊8月は料理室のみ

ふれあいまつりは、利連役員の負担を軽減するため、2014年からふれあいまつり実行員会を立ち上げて開催するようになった。

クラブ数の減少で12人の運営体制から8人体制となったが、さらに減らすという案が浮上し、これで運営が保てるのかを全体で話し合う必要がある。

また、2015年のクラブ使用料の一部有料化に伴い、午後の区分時間の変更が行われた。この時間帯に該当するクラブ活動は、活動時間が短縮され、個々のつながりが希薄になるという変化が見られた。

また、利連役員には活動経験の浅い利用者が担うというクラブが多くなってきている。

高齢化、有料化、コロナの壁は、2014年に41あったクラブが25クラブに減少した。

講座からクラブ化へ

クラブ減少に歯止めがかからない浜手公では、そんな状況を打破しようと講座からクラブ化への支援を積極的に行ってきた。「おとなのガッコウ、りらくすヨガ、カントリーダンス、げんきup体操、ノルディックウォーキング、ボールdeゆる体操、かしこく夜活」など、講座終了後、自主活動への希望が多い講座については積極的に支援してきた。新たなクラブが利連の役員の担い手になれるよう周りの支援が求められている。

新たな利用者連絡会のありかた

利用者とともに新たな時代に即した運営を皆で共有し考えていく大切な時期を迎えている。「利連の運営が負担」である理由で、負担だと思われるもの（会議回数、役員数など）をすべてそぎ落とした形が、逆に負担を助長してき

たといえる。

ある日、クラブ員の減少で活動に危機感を抱いているクラブが茶話会を行っていた。みな、普段の活動では見られない柔らかい表情をして楽しそうに話しをしていた。「こんな時間が大事だよ。無駄な時間じゃないよね」とクラブの人が言う。

高齢化やコロナでほどけた横のつながりが何気ないおしゃべりや、会話の中で編みなおされていく。新たなつながりづくりには、柔らかい対話の時間が必要なかもしれないとその光景を見てヒントを得た。

・山手地区公民館活動協議会

1991年に開館し6クラブが発足。10月に第1回公民館まつりを開催し、山手地区公民館活動協議会（以降、協議会）が発足した。現在は36クラブで運営されている。

山手地区公民館まつりを開催するとともに、社会見学、年度末のさよならパーティ、交流の3つの部会に分かれて、企画運営を行っている。各クラブが必ずどこかの部会に加入しているので、クラブ委員の声かけで参加率も高まってきた。

協議会結成当時から役員選出は、現役員が「次の役員をお願いする」という形式で代々引き継がれてきたが、役員のなり手不足で、2023年度から輪番制を取り入れた。また、部会運営も広報研修部会とレクリエーション部会の2つとなった。

今後は、役員が2年交代となるので、負担が少なく、誰でもできるような協議会運営をめざしていく。

・3館クラブ協議会の連携

3館の各団体相互の交流と親睦を深めるため、三館利用者連絡会を組織し、3館の交流を深める事業を行っているほか、公民館大会にもクラブ協議会等の代表者が実行委員会に参画している。

・コロナ下で浮彫になったこと

コロナ下ではクラブの活動を停滞せざるを得なかった。臨時休館や開館時間の短縮措置により活動が制限され、一部夜間のクラブは活動できない時期が長く続いた。緊急事態宣言が明けた後、多くのクラブが少しずつ活動を再開しクラブ員に徐々に笑顔が戻ってきた。

しかし、クラブ員の減少や高齢化も深刻になりつつあり、さらにコロナを潮時として廃部するクラブも現れた。

役員の担い手がおらず、役員の順番が回ってくると協議会を抜けサークルに組織替えを行うクラブも出てきている。

このような相談を受け、公民館ではクラブの活性化のため体験講座を募集したり、存続が厳しいクラブには、講座を開催してクラブへの新たな参加者を募ったりするなど支援をした。

コロナが収束し種々のイベントが復活し始めると、ようやくクラブも活気を取り戻した。特に各公民館まつりが復活したことは、クラブ員にとっても大きな転機となり、改めて公民館の活動を通して人とのつながりや交流を深めることの意義を再発見し、個々の活動意欲につながっている。

4. 貝塚子育てネットワークの会



貝塚子育てネットワークの会（以降、子育てネット）は「うちの子よその子 みんなの子」を合言葉に「地域ぐるみの子育て」や「将来を見通せる子育て」を目指し活動している。

1988 年、公民館 35 周年記念事業として、記録映画『アリサ』の上映が企画され、その前段で子育てに関するグループの交流会が開催された。その後、公民館職員の働きかけをきっかけに定期的に集まるようになり、子育てネットとして正式に発足した。以降、現在まで子育てに対する学習や活動、メンバーの情報交流を行っている。



・世代がつながる組織と運営

4 つの子育てサークルで組織する乳幼児部会のほか、園児部会（旧幼稚園部会）、小学生部会、中高生部会の 4 つの部会で活動している。

1993 年には、冒険遊び場プレイパーク（現プレーパーク）を始めた。子ども時代に遊ぶことの大事さを学んだ母親たちが自らの手で起こ上げた。現在もプレーパーク実行委員会を組織し、年 4 回プレーパークを開催している。

「学びと実践のキャッチボール」と言われるように、子どもの成長に応じた学びの場を求め、実践へと結んでいる。4 つの部会があることで、世代間交流が自然と成され、タテのつながりが子育ての見通しや、自らの人生の見通しを立てられる。また、部会どうして助け合いや協力し合うことが互いの活動の励みにもなっている。こうしたことが子育てネットが 35 年以上続く秘訣となっているのではないだろうか。

・公民館と共にあゆむ

子育てネットでは、定期的にネットワークニ

ュースを刊行し、合同研修会の開催や中央公民館の赤ちゃんルームや公民館まつりや公民館大会にも参画協力している。

公民館では各部会及び実行委員会のミーティングに担当者を配置し、講座の開催については、公民館の共催事業に位置づけている。近年は各部会において前期・後期各 2～4 回の講座を企画開催するとともに、年に 1～2 度各部会合同研修会を開催することが定着している。

・人がつながるプラットフォーム

コロナを前後として仕事を始めるメンバーも現れ、講座やプレーパーク運営の人数確保が難しくなりつつある。乳幼児サークルの会員減少や体制確保に悩んでいたが、コロナで活動が停滞し、さらなる打撃を受けた。

しかし、メンバーから「コロナでは悩むことも多かったが、皆の顔を見ると、こうして仲間が集える喜びを改めて感じた」、「やはりこうして集まって学んだり悩みを共有したりすることは大切」という声が多く聞かれた。乳幼児サークルも役員が奮起し合同体験会を開催するなど再び活発化している。

活動や役割を通して社会の一員として存在していることを実感しているメンバーも多く、つながりが親の学びの場になっていると語っている。

・お客様から主体者へ

子育てネットは当事者の会である。企画や運営を行う上では時々、メンバー同士がぶつかることもある。楽しさからほど遠くなり、何のためにやっているのかと立ち止まる時もある。そんな時は涙して話し合い、負担を減らす方法や、みんなが主体性をもち活動に関わる方策などを出し合う。若いメンバーに「役割が人を育てるんやで」と、経験豊富な先輩メンバーがエールを送る。

子育てネットは、対話の場面を多く持ち、自分たちの活動を振り返り、その中で自身の成長

を感じ取る。繰り返し行われる中で、いつしか自分自身が時代を切り拓く主体になっていることに気づいている。

5. 貝塚ファミリー劇場

貝塚ファミリー劇場は、1982年に設立した公民館ファミリー劇場を前身とする。その後、おやこ劇場準備会を経て、貝塚ファミリー劇場として新たに発足した。

「子どもたちに豊かな文化を」をスローガンに子どもたちが本物の舞台鑑賞やさまざまな行事を通して創造力・想像力・コミュニケーション力・生きる力を身につけることを目標に活動をしている。

・公民館のかかわり

もともと公民館から生まれた組織であり、公民館では貝塚ファミリー劇場の行う例会や事業に対し、様々な支援を続けている。

特に年に一度、公民館との共催事業としてコスモシアターや山手公などで行われる舞台公演に対し、会場費や講師謝礼、参加者受付などの側面から支援を行っている。

また、子どもが自分で企画した店舗を1日だけ出店する「こども市」では、会場設置場所の提供などで協力を行っている。また、子どもだけでなく中高生や青年層も参加できるよう中高青部（中高生と青年を組み合わせた部会）をつくり、自分たちで事業を企画するなど、子どもや若者たちの自主活動を通じた成長を見守っている。

・貝塚ファミリー劇場の活動

発足時と比較して、少子化、共働き、子どもの教育成果主義への流れなどから会員数の減少に悩みながらも、毎回楽しく、人気のある舞台公演を企画、上演している。演者と子どもたちが交流する機会も設定し、毎回子どもたちの楽しい笑い声に会場が包まれている。

また「貝ファミ すばこ図書館」をオープンさ

せるなど、工夫のある事業を行っている。

近年は文化庁の文化振興基金を活用した事業や子育て支援課との共催事業も展開している。

コロナ下でも、貝塚ファミリー劇場ではイベントや交流はなるべく続けてきた。感染拡大を恐れてなかなか事業が行えない中でも、席を半数にしてソーシャルディスタンスを保つよう工夫を重ねながら開催した。一方不特定多数の人が集まるこども市は2年続けて中止となり、3年目によりやく屋内開催として行った。当日は久しぶりの開催で会場は喜びにあふれていた。



こうした早い段階で開催した例会の会場設営などのありかたは、公民館まつりや他のイベント開催の手本となり、文化事業やその他事業にも採用されることとなった。

6. 貝塚学習グループ連絡会

貝塚学習グループ連絡会（以降、学連）は、1989年『私たちの公民館白書』の刊行を機に、公民館職員の働きかけにより「それいゆ」を結成したことにはじまる。

その後、文章講座受講者有志で構成する「色えんぴつ」や「公民館保育を考える会（現 あこ～る♪）」をはじめ、約10団体が集まり1992年4月「貝塚学習グループ連絡会」が誕生。情報交換や機関紙「あしあと」を発行し活発な活動を続けた。やがてその中から「安心して老いる会」など地域福祉に貢献するグループなども

出てくるなど活気があった。

・現在の活動と運営

しかし、様々な理由から構成団体が学連を辞めていき、2017年には活動の低迷を課題として話し合い、外に発信していこうと各グループが講座を開催するなど努力を重ねたが、2014年からは4団体、2018年には3団体となり、2019年には2団体のみとなった。

残った2団体「あこーる」と「第3土曜の会」は現在も定期的な活動を続けている。

第3土曜の会は毎回、福祉、介護などの課題について学びを続けている。あこーるも介護などの現代課題に取り組み、公民館まつりでも模擬店を出店するなど公民館活動に積極的に関わっている。

・話し合いを重ねて

コロナ下は集まる状態ではなかったため、どんどんとメンバーの士気が下がっていった。

コロナがようやく落ち着き始めた頃、学連の今後について、存続の是非を問うための話し合いが持たれた。

話し合いの中では、否定的な意見もあったが、「コロナ下で何も発信してこれなかった。活動を発信していく努力を続け、新しい仲間を増やすことを考えたい」「2団体がそれぞれ活動はしているものの連携が取れていない。社会見学もなくなったが、今後は協力して何かできたら」といった前向きな声が聞かれた。

その結果、年に数回合同で会議を行うとともに、共同で勉強会を開催することになった。

そもそも、企画運営を行う力のあるメンバーが揃っているゆえ、2022年以降は再び活動の機会を広げている。

7. 文化団体

貝塚の公民館では、開館当初から様々な文化事業が行われ、その中から文化団体が組織されたことは、「文化事業」の項の中でも述べた。

貝塚市では1965年に市内中学校の美術教師とその教え子数名の会員で貝塚市美術協会が設立されたことを機に、1977年貝塚市合唱連盟、1978年には貝塚少年少女合唱団、1983年に貝塚市日本民謡連合会、貝塚市軽音楽連盟、1984年に貝塚市民踊連盟、貝塚市クラシック音楽家協会などの文化団体が設立された。

多くの団体の組織化にあたっては公民館の職員の働きかけもあった。市内でともに活動する団体が各々で活動するのではなく、連携しあってその分野の文化を地域に広く広めることが地域文化の発展につながると考えてのことだった。

・各団体の活動



現在、各々の文化団体では年に1～2度会員が集まって広く市民に向けた自主事業を行っている。貝塚市美術協会は「美術協会展」「小作品展」、貝塚市合唱連盟は「貝塚市合唱フェスティバル」、貝塚市日本民謡連合会は「民謡フェスティバル」、貝塚市軽音楽連盟は「ライトミュージックコンサート」、貝塚市民踊連盟は「市民民

踊まつり」、貝塚市クラシック音楽家協会は「クラシックコンサート」などの文化事業を開催し、公民館ではこうした活動の会場費や宣伝等に支援を行っている。

また、貝塚少年少女合唱団については、公民館の青少年育成事業に位置付けられ、定期演奏会をはじめとしたあらゆる活動に対し、全面的な支援を行っている。



・アプローチする活動へ

コロナ下では、活動の成果を披露するための機会を奪われ、各文化団体では長く活動できないことで会員のモチベーションの低下から活動を辞める人も多く急速な会の弱体化を招いた。

コロナ後、危機感を抱いた団体の中には、年に1回だけでなくあらゆる機会を捉えて活動を市民にみてもらい、新たな人材を見出したいと積極的に活動を行う団体も出てきている。

会員自らあらゆる人にPRを行ったことで会員の増加につながった団体も出てきている。

コロナという逆境に立たされたことで、各団体が積極的に外へ文化を発信していくことの重要性を認識し、「ケガの功名」ともいえる状況が生まれた。

8. コロナとその後

コロナ下での5年間はこうした団体活動にも大きな影響を与えた。多くの活動機会を奪われた団体は、閉塞感とともに活動に意欲をもてず人に離れていく団体もあった。どうすれば

各々の団体の魅力を伝えられ、新しい人材の確保につながるのか、試行錯誤する日々が続いている。

しかし、これにはコロナ後の団体の変化にヒントがありそうだ。公民館活動が復活し始めると、各々の団体も活動を再開したが、一様に「各々の活動がいかに自分の生活にとって重要であったかに気づき、公民館活動を通して人とつながり、交流することの必要性を再確認した」と口にした。以前にも増して活動を活発化させている団体がほとんどである。

9. まとめ

公民館は歴史的にみて多くの団体を育成し、支援し続けてきた。上記の団体だけでなく、まめっこ ROOM、そらいろ、ハーモニー、そよ風¹⁾といった学習団体も公民館での講座をきっかけに自主グループとなり活動を続けている。

団体支援は公民館が担う大きな役割のひとつである。団体が自主的に活動を広げこのまちに文化や学びが広がっていくことを期待してのことである。人はひとりでは生きていけない。人と人がつながり、共に成長し歩んでいくことで、温かな気持ちや多幸感を得ることができる。そこに気づいた人たちの輪を広げることが公民館の役割のひとつであり、団体を支援する理由であると考えている。

1) まめっこ ROOM：多胎児サークル、そらいろ・ハーモニー：発達障がいをもつ親の会、そよ風：傾聴ボランティア

付 録

- ・ 公民館職員体制
- ・ 公民館運営審議会委員一覧
- ・ 講座（10 年分）
- ・ 公民館予算変遷（10 年分）
- ・ 新型コロナウイルス感染症への対応と公民館の動き

貝塚市立公民館・中央公民館 職員体制

★常勤嘱託 ☆非常勤嘱託 ▲社会教育指導員 △アルバイト (再)再任用 □当直 ○会計年度任用職員

西暦	年号	館 長	補 佐	主 査								備 考
1953	S 28	竹田 庄慎										
1954	29	宮下 富一										
1955	30	宮下 富一										
1956	31	宮下 富一										
1957	32	宮下 富一										
1958	33	岸本 留雄	荒木 正三		中司 健辞	藤田 邦三郎	櫛本 松江	中田 フキヨ				
1959	34	岸本 留雄										
1960	35	岸本 留雄										
1961	36	岸本 留雄	荒木 正三		櫛本 松江	山中 昇	岸本 紀子	西村 好光				
1962	37	荒木 正三			櫛本 松江	山中 昇	森田 恵美子	西村 好光				
1963	38	荒木 正三			櫛本 松江	山中 昇	森田 恵美子	西村 好光				
1964	39	荒木 正三			櫛本 松江	山中 昇	森田 恵美子	西村 好光				
1965	40	荒木 正三			櫛本 松江	山中 昇	武本 恵美子	西村 好光				
1966	41	荒木 正三			櫛本 松江	山中 昇	辻野 猛	藤田 明彦	中野 成子			
1967	42	荒木 正三		櫛本松江・山中 昇	辻野 猛	藤田 明彦	中野 成子	森下 鷹雄	山内 貴義			
1968	43	荒木 正三		櫛本松江・山中 昇	辻野 猛	藤田 明彦	中野 成子		山内 貴義			
1969	44	荒木 正三		西田春子・山中 昇	辻野 猛	藤田 明彦	中野 成子	★豊田五十鈴	山内 貴義			
1970	45	荒木 正三	滝 昭夫	山中 昇	松岡 伸也	浅野 成子	豊田 五十鈴	賀好 俊文	山内 貴義	町田 豊治		
1971	46	荒木 正三	松波 孝	山中 昇/田口徳一	松岡 伸也	浅野 成子	豊田 五十鈴	賀好 俊文	山内 貴義			
1972	47	藤田 邦三郎			松岡 伸也	浅野 成子	岸本 隆弘	豊田 五十鈴	賀好 俊文	仙石 隆子	山内 貴義	
1973	48	明石 信雄		松岡 伸也	浅野 成子	龍神 和夫				仙石 隆子	山内 貴義	
1974	49	明石 信雄		松岡 伸也	浅野 成子					仙石 隆子	山内 貴義	
1975	50	山中 昇		松岡 伸也	浅野 成子					仙石 隆子	山内 貴義	
1976	51	山中 昇		松岡 伸也	浅野 成子					仙石 隆子	山内 貴義	
1977	52	山中 昇		松岡 伸也	浅野成子/浅野孝治	松室 隆道	仙石 隆子	山内 貴義				
1978	53	山中 昇		松岡 伸也	浅野 孝治	松室 隆道	伊藤隆子(旧姓仙石)	山内 貴義				
1979	54	池田 正志		松岡 伸也	浅野 孝治	松室 隆道	伊藤 隆子	山内 貴義	★斉喜 瑞穂	□林		
1980	55	池田 正志	松岡 伸也	浅野 孝治		松室 隆道	伊藤 隆子	山内 貴義				

貝塚市立公民館・中央公民館 職員体制

★常勤嘱託 ☆非常勤嘱託 ▲社会教育指導員 △アルバイト (再)再任用 □当直 ○会計年度任用職員

西暦	年号	館 長	補 佐	主 査								備 考
1981	56	池田 正志	松岡 伸也	浅野 孝治	松下 明弘	桜井 明子	松室 隆道	山内 貴義	□多田 和美			
1982	57	池田 正志	松岡 伸也	浅野 孝治	松下 明弘	山内 貴義	★村田 和子	★北村 恵子	□福井 久一	□川端 美夫	□川崎 芳松	
1983	58	西村 幹三	松岡 伸也	浅野 孝治	松下 明弘	山内 貴義	★村田 和子	★北村 恵子	□福井 久一	□川端 美夫	□川崎 芳松	
1984	59	西村 幹三	松岡 伸也	浅野 孝治	松下 明弘	山内 貴義	★村田 和子	薦田 美由紀	□川端 美夫	□川端 美夫	□浜崎 全弘	
1985	60	西村 幹三	松岡伸也/櫛本松江	浅野 孝治	松下 明弘	山内 貴義	★村田 和子	□川端 美夫	□川崎 芳松	□浜崎 全弘		
1986	61	西村 幹三	櫛本 松江	浅野 孝治	松下明弘/榊永信幸	山内 貴義	稲田 智子	★村田 和子	□川端 美夫	□有村 國雄	□浜崎 全弘	
1987	62	西村 幹三	浅野 孝治		榊永 信幸	岡野 智子	三味 良一	藪内 廣幸	★村田 和子	□川端 美夫	□浜崎 全弘	
1988	63	西村 幹三	浅野 孝治	植田 年明		岡野 智子	村田 和子	北野 貴彦	▲城野 美姫子	□川端 美夫	□浜崎全弘/濱出実	専門職採用(3名)
1989	H 1	★山中 昇	浅野 孝治	植田 年明	村田 和子	水本 学	北野 貴彦	▲大矢 香代子	△南 百合美	□浜崎 全弘	□濱出 実	浜手地区公民館開館
1990	2	★山中 昇	浅野 孝治	植田 年明	村田 和子	水本 学	★大矢 香代子	★南 百合美	▲岸本 由紀子	□浜崎 全弘	□濱出 実	
1991	3	松岡 伸也	浅野 孝治	植田 年明	村田 和子		★大矢 香代子		▲岸本 由紀子	□浜崎 全弘	□濱出 実	山手地区公民館開館
1992	4	松岡 伸也	浅野 孝治	植田 年明	村田 和子		★大矢 香代子		▲岸本 由紀子	□浜崎 全弘	□濱出 実	
1993	5	浅野 孝治	吉道 博章	植田 年明	村田 和子		★大矢 香代子	▲大野 幸子	□森下 鷹雄	□浜崎 全弘	□濱出 実	文化会館へ移転
1994	6	浅野 孝治	吉道 博章	植田 年明	村田 和子		★大矢 香代子	▲大野 幸子	□森下 鷹雄			
1995	7	浅野 孝治	吉道 博章		村田 和子		★大矢 香代子	▲大野 幸子	□森下 鷹雄	△東 明美		
1996	8	浅野 成子	吉道 博章	碓井 義一	村田 和子		★大矢 香代子	☆大野 幸子			□林 寛明	
1997	9	浅野 成子	吉道 博章	碓井 義一	村田 和子		★大矢 香代子	☆大野 幸子			□林 寛明	
1998	10	浅野 成子	宇野 義郎	碓井 義一	村田 和子		★大矢 香代子	☆大野 幸子			□林 寛明	
1999	11	浅野 成子	宇野 義郎	碓井 義一	村田 和子		★大矢 香代子	☆大野 幸子			□林 寛明	
2000	12	浅野 成子	宇野 義郎	碓井 義一			★大矢 香代子	★大野 幸子	△大川 めぐみ		□林 寛明	
2001	13	浅野 成子	宇野 義郎	碓井 義一	柳瀬 暁子		★大矢 香代子	★大野 幸子			□林 寛明	
2002	14	植田 年明	碓井 義一		柳瀬 暁子		★大矢 香代子	★大野 幸子	★森口 美佳	△山本 浩美		日直業務ははシルバーに委託
2003	15	植田 年明	碓井 義一	西村 和男	柳瀬 暁子		★大矢 香代子	★大野 幸子	★森口 美佳			
2004	16	吉田五十鈴	碓井 義一	西村 和男	柳瀬 暁子		★南 百合美	★大野 幸子	★森口 美佳			
2005	17	榊谷七津夫	碓井 義一	西村 和男	折出 健二郎		★南 百合美	★大野 幸子	★川端 亮子			
2006	18	榊谷七津夫	碓井 義一	鍋島 貞雄	折出 健二郎		★南 百合美	★大野 幸子	★川端 亮子			
2007	19	出村谷公一	岡野 智子	鍋島 貞雄	折出 健二郎		★南 百合美		★川端 亮子	★岸本 由紀子		
2008	20	岡野 智子	稲田 智子	鍋島 貞雄	谷川 誠幸		★南 百合美		★川端 亮子	★岸本 由紀子		

貝塚市立公民館・中央公民館 職員体制

★常勤嘱託 ☆非常勤嘱託 ▲社会教育指導員 △アルバイト (再)再任用 □当直 ○会計年度任用職員

西暦	年号	館 長	補 佐	主 査							備 考
2009	21	岡野 智子	稲田 智子	北野 貴彦	谷川 誠幸		★南 百合美		★川端 亮子	★奥埜 由起子	
2010	22	岡野智子/西野清孝	稲田 智子	北野 貴彦	谷川 誠幸			★大野 幸子	★川端 亮子	★奥埜 由起子	
2011	23	西野 清孝	稲田 智子		谷川 誠幸	植田 年明		★大野 幸子	★中川 知子	★奥埜 由起子	
2012	24	西野 清孝	稲田 智子		小川 雄平	植田 年明		★大野 幸子	★中川 知子	★奥埜 由起子	
2013	25	西野 清孝	稲田 智子		小川 雄平	藤田 唯		★大野 幸子	★中川 知子	★奥埜 由起子	
2014	26	藪内 廣幸	稲田 智子		小川 雄平	藤田 唯		★大野 幸子	★中川 知子	★辻本 美登里	
2015	27	藪内 廣幸	稲田 智子		北川 和弥	鈴木 唯		★大野 幸子	★中川 知子	★永橋 愛	
2016	28	藪内 廣幸	西出 隆行		北川 和弥	鈴木 唯		★大野 幸子	★中川 知子	★津上 愛	
2017	29	浅野淳一/西本仁志	西出隆行/欠 員	小西由美/井川 剛	北川 和弥			★大野 幸子	★中川 知子	★津上愛/△花村奈々	△水取 千弥子
2018	30	寺戸 俊二	高森 紀明	井川 剛	北川 和弥			★大野 幸子	★中川 知子		△水取 千弥子
2019	R 1	寺戸 俊二	高森 紀明	井川 剛	池田 浩子			★大野 幸子	★中川 知子	★三森 すみ代	
2020	R 2	寺戸 俊二	井川 剛	上野 裕子	池田 浩子			○大野 幸子	○中川 知子	○奥埜 由起子	
2021	R 3	甲斐 裕二	井川 剛	上野 裕子	池田 浩子			○大野 幸子	○中川 知子	○奥埜 由起子	
2022	R 4	甲斐 裕二	井川 剛	上野 裕子	江戸 浩子			○大野 幸子	○中川 知子	○奥埜 由起子	
2023	R 5	甲斐 裕二	上野 裕子	山田 知子	江戸 浩子			○大野 幸子	○中川 知子	○奥埜 由起子	△藪 雅美

貝塚市立浜手地区公民館 職員体制

★常勤嘱託 ☆非常勤嘱託 ▲社会教育指導員 △アルバイト (再)再任用 □当直 ○会計年度任用職員

西暦	年号	館 長	補 佐	主 査							備 考
1989	H 1	★山中 昇			岡野 智子		★城野 美姫子				
1990	2	★斯波 昭宣			岡野 智子	北野 貴彦	★城野 美姫子			□河合 経雄	
1991	3	★斯波 昭宣	出村谷 公一		岡野 智子		★城野 美姫子			□河合 経雄	
1992	4	★斯波 昭宣	出村谷 公一		岡野 智子		★城野 美姫子				
1993	5	★斯波 昭宣	出村谷 公一		西出 百合子		★城野 美姫子	☆岸本 由紀子		□大西 恵伸	
1994	6	★山本 純平	松下 明弘		西出 百合子		★城野 美姫子	☆岸本 由紀子		□大西 恵伸	
1995	7	★佐藤 光一	松下 明弘		西出 百合子		★城野 美姫子	☆岸本 由紀子		□大西 恵伸	
1996	8	★佐藤 光一	松下 明弘		西出 百合子		★城野 美姫子	☆岸本 由紀子		□大西 恵伸	
1997	9	★佐藤 光一	松下 明弘		西出 百合子		★城野 美姫子	★岸本 由紀子	△安枝 和子		日直業務はシルバーに委託

貝塚市立浜手地区公民館 職員体制

★常勤嘱託 ☆非常勤嘱託 ▲社会教育指導員 △アルバイト (再)再任用 □当直 ○会計年度任用職員

西暦	年号	館 長	補 佐	主 査							備 考
1998	10	★佐藤 光一	松下 明弘				★城野 美姫子	★岸本 由紀子	△安枝 和子		
1999	11	★松岡 伸也	松下 明弘		野中 妙子		★城野 美姫子	★岸本 由紀子			
2000	12	★松岡 伸也	松下 明弘		野中 妙子		★城野 美姫子	★岸本 由紀子			
2001	13	★松岡 伸也	松下 明弘		野中 妙子		★城野 美姫子	★岸本 由紀子			
2002	14	岡野 智子			野中 妙子		★城野 美姫子	★岸本 由紀子	★中川 知子	△大江 絵美子	△水取 千弥子
2003	15	岡野 智子		西野 清孝			★城野 美姫子	★岸本 由紀子	★中川 知子		
2004	16	岡野 智子		西野 清孝			★大矢 香代子	★岸本 由紀子	★中川 知子		
2005	17	岡野 智子		西野 清孝			★大矢 香代子	★岸本 由紀子	★中川 知子		
2006	18	岡野 智子		西野 清孝			★大矢 香代子	★岸本 由紀子	★中川 知子		
2007	19	碓井 義一		西野 清孝			★大矢 香代子	★大野 幸子	★中川 知子		
2008	20	碓井 義一		橋口 真一郎			★大矢 香代子	★大野 幸子	★中川 知子		
2009	21	大脇 和子		橋口 真一郎			★大矢 香代子	★大野 幸子	★中川 知子		
2010	22	大脇 和子			桑原 知子		★大矢 香代子	★森口 美佳	★中川 知子	△下中 理絵子	
2011	23	大脇 和子			桑原 知子		★大矢 香代子	★川端 亮子	10月～ ★辻本 美登里	～9月 △水取 千弥子	
2012	24	大脇 和子			桑原 知子		★大矢 香代子	★川端 亮子	★辻本 美登里		
2013	25	大脇 和子			桑原 知子		★大矢 香代子	★川端 亮子	★辻本 美登里		
2014	26	大脇 和子			桑原 知子		★大矢 香代子	★川端 亮子	★奥埜 由起子		
2015	27	大脇 和子			川崎 衣里子		★川端 亮子	★奥埜 由起子	★川上 恵里		
2016	28	橋口真一郎/西川伸一			川崎 衣里子		★川端 亮子	★奥埜 由起子	★川上 恵里		
2017	29	西川 伸一			川崎 衣里子		★川端 亮子	★奥埜 由起子	★川上 恵里		
2018	30	小山 加奈子			(再)大脇 和子		★奥埜 由起子	★川上 恵里	★三森 すみ代		
2019	R 1	小山 加奈子			(再)大脇 和子		★奥埜 由起子	★川上 恵里	★大前 慶幸		
2020	R 2	小山 加奈子			(再)大脇 和子		○川上 恵里	○木藤 順子	○小山 智子		
2021	R 3	小西 克治			(再)坂本 修二		○川上 恵里	○木藤 順子	○小山 智子		
2022	R 4	小西 克治			(再)坂本 修二		○川上 恵里	○木藤 順子	○小山 智子		
2023	R 5	小西 克治		古家和彦(8月～)	古谷 菜緒		○川上 恵里	○木藤 順子	○小山 智子		

貝塚市立山手地区公民館 職員体制

★常勤嘱託 ☆非常勤嘱託 ▲社会教育指導員 △アルバイト (再)再任用 □当直 ○会計年度任用職員

西暦	年号	館 長	補 佐	主 査							備 考
1991	3	★山中 昇	喜多 廉		山本 佐恵子	北野 貴彦	★南 百合美		□堂野 清一		
1992	4	★山中 昇	喜多 廉		山本 佐恵子	北野 貴彦	★南 百合美		□堂野 清一		
1993	5	★山中 昇	中野 敏彦		山本 佐恵子	北野 貴彦	★南 百合美		□堂野 清一		
1994	6	★山中 昇	中野 敏彦		山本 佐恵子	寺戸 俊二	★南 百合美		□堂野 清一		
1995	7	★山中 昇	中野 敏彦	岡野 智子		寺戸 俊二	★南 百合美	△松室 豊	□堂野 清一		
1996	8	★廣本 勲	中野 敏彦	岡野 智子		寺戸 俊二	★南 百合美		□堂野 清一		
1997	9	★西口 敏夫	中野 敏彦	吉田 五十鈴	岡野智子(主査)		★南 百合美		□堂野 清一		
1998	10	★西口 敏夫	吉田 五十鈴	岡野 智子			★南 百合美		□川端 美次		
1999	11	★西口 敏夫	吉田 五十鈴	岡野 智子	折出 健二郎		★南 百合美		□川端 美次		
2000	12	★西口 敏夫	吉田 五十鈴	大脇 和子	折出 健二郎		★南 百合美		□川端 美次		
2001	13	★西口 敏夫	上野 正	大脇 和子	折出 健二郎		★南 百合美		□川端 美次		
2002	14	上野 正		大脇 和子	折出 健二郎		★南 百合美	★松下 直子	□川端 美次		
2003	15	上野 正		大脇 和子	折出 健二郎		★南 百合美	★松下 直子			日直業務はシルバーに委託
2004	16	森田 富美代		大脇 和子	折出 健二郎		★城野 美姫子	★松下 直子			
2005	17	森田 富美代		大脇 和子	田中 秀樹		★城野 美姫子	★森口 美佳			
2006	18	森田 富美代		大脇 和子	田中 秀樹		★城野 美姫子	★森口 美佳			
2007	19	森田 富美代		大脇 和子			★城野 美姫子	★森口 美佳	△宵 睦美		
2008	20	西野 清孝		大脇 和子			★城野 美姫子	★森口 美佳	△宵 睦美		
2009	21	西野 清孝		高森 紀明	眞砂 悦実		★城野 美姫子	★森口 美佳			
2010	22	西野 清孝		高森 紀明	眞砂 悦実		★城野 美姫子	★南 百合美			
2011	23	北野 貴彦		高森 紀明	眞砂 悦実		★城野 美姫子	★南 百合美			
2012	24	北野 貴彦		高森 紀明	眞砂 悦実		★城野 美姫子	★南 百合美			
2013	25	北野 貴彦		高森 紀明	古家 弥須子		★城野 美姫子	★南 百合美			
2014	26	北野 貴彦		西本 仁志	古家 弥須子		★城野 美姫子	★森口 美佳			
2015	27	北野 貴彦		西本 仁志	古家 弥須子		★城野 美姫子	★南 百合美			
2016	28	西本 仁志		古家 弥須子	大脇 和子		★南 百合美	★木藤 順子			
2017	29	西本仁志/西出隆行		古家 弥須子	大脇 和子		★南 百合美	★木藤 順子			
2018	30	西出 隆行		松浪 京子	(再)西本 仁志		★南 百合美	★木藤 順子			

貝塚市立山手地区公民館 職員体制

★常勤嘱託 ☆非常勤嘱託 ▲社会教育指導員 △アルバイト (再)再任用 □当直 ○会計年度任用職員

西暦	年号	館 長	補 佐	主 査							備 考
2019	R 1	小西 克治		松浪 京子	(再)西本 仁志		★南 百合美	★木藤 順子			
2020	R 2	小西 克治		松浪 京子	(再)西本 仁志		○南 百合美	○熊本 雅代			
2021	R 3	西野 京太郎		松浪 京子	(再)西本 仁志		○南 百合美	○熊本 雅代			
2022	R 4	高森 紀明		要 光志朗	(再)西本 仁志		○南 百合美	○半澤 睦子	△三森すみ代	△船木 智子	
2023	R 5	井川 剛		要 光志朗	市政 希		○南 百合美	○半澤 睦子			

公民館運営審議会委員

【◎委員長、○副委員長】

分野	第27期	第28期	第29期	第30期	第31期
	平成17・18年度	平成19・20年度	平成21・22年度	平成23・24年度	平成25・26年度
学校教育	高橋 恵美代	塩田 巧	佐久真 雄次郎	明石 一朗	川崎 裕子
	濱崎 美重子	浅井 敦子	大倉 務		
社会教育	沼野 伸子	○沼野 伸子	○沼野 伸子	南 正夫	生長 善宏
	南村 明男	南村 明男	南村 明男	○沼野 伸子	○沼野 伸子
	彗賀 信正	彗賀 信正	彗賀 信正	南村 明男	南村 明男
	南 收	森山 正夫	石井 弘子	武本 正	武本 正
	伴 友明	伴 友明	伴 友明	米田 歳春	秋田 秀実
	魚本 恭子	畠山 智子	溝口 恒生	馬場 義弘	中野 伸和
	○八尾眞須美	松下 庸子	松下 庸子	中村 広子	関根 節子
	◎山中 昇	馬場 則彦	浅井 敦子	松下 庸子	藤谷 ゆき子
	和田 哲男	幸田 幸代	窪田 勝代	井上 誠一	加嶋 さおり
	井上 誠一	山中 昇	井上 誠一	大西 隆子	井上 誠一
	上野 千賀子	井上 誠一	大西 隆子		大西 隆子
	林 正巳	大西 隆子			
	前平 太美子				
	南 藤一郎				
学識経験	山本 健慈	山本 健慈	◎浮穴 正博	◎浮穴 正博	◎浮穴 正博
			竹内 正巳	竹内 正巳	竹内 正巳

分野	第32期	第33期	第34期	第35期	第36期
	平成27・28年度	平成29・30年度	令和元・2年度	令和3・4年度	令和5・6年度
学校教育	深井 利恵子	吉成 文男 (H29)	北野 久美子	中村 彰男	中村 彰男
		井出 博 (H30)	中野 俊彦	中川 政文	葛山 由実
		永井 肇			
社会教育	加嶋 さおり	○加嶋 さおり	○麻生川 美紀	○井谷 麻衣子	○井谷 麻衣子
	○沼野 伸子	西田 陽	西田 陽	西田 陽	西田 陽
	西田 陽	小松 好美	小松 好美 (R元)	黒井 政信	黒井 政信
	井上 菊信	喜多 久興	黒井 政信 (R2)	木村 恵美子	大畠 陽介
	阪口 良晴	中野 伸和	木村 恵美子	中野 伸和	高山 行雄
	中野 伸和	梅原 直子	中野 伸和	谷口 和紀	井上 誠一
	吉道 治善	井上 誠一	谷口 和紀	井上 誠一	
	近藤 和枝		井上 誠一		
	秋田 秀実				
	井上 誠一				
	大西 隆子				
学識経験	◎萩原 雅也	◎萩原 雅也	◎萩原 雅也	◎萩原 雅也	◎萩原 雅也

貝塚公民館(中央) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2013	・Newつるかめ大学 ・天然eco生活 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・聞く力を高める！傾聴講座 ・『わかるとできる』公民館パソコン講座 ・ICT活用推進事業Excelと仲良くなれる入門 講座 ・やっぱり健康一番 ・くらしを撮る（映像表現講座） ・はじめての生け花	・レッツTRY ・夏休み何でも挑戦！ ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座「おや子教室」 ・シンガ ルママのほほえみタイム	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート	・健康サロン ・出前寄席（津田北町） ・おでかけよちよちサロン（ロコモ自治会）	・ふれあい料理＊ランチイ7 ・日本語会話よみかき教室ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民踊連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・クラブ協議会 ・子育てネットワークの会	・第57回中央公民館まつり ・第5回貝つ子フェスタ ・第2回貝塚公民館大会（中央/コスモスシアター） ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもががんばっているよ
2014	・Newつるかめ大学 ・天然eco生活 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・傾聴講座「聴くことのできるボランティア！」 ・もっと憲法を知ろう ・おやじの何でも挑戦 ・やっぱり健康一番 ・市民企画講座「精神障がいを受け入れる町づくり」	・レッツTRY ・夏休みなんでも挑戦！ ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座おや子教室 ・シンガ ルママのほほえみタイム ・まめっこroom	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート	・円満未来図・家族への伝言（ロコモ自治会）	・ふれあい料理＊ランチイ7 ・日本語会話よみかき教室ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民踊連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・クラブ協議会 ・子育てネットワークの会 ・貝塚学習グループ連絡会 ・プレーパーク20周年記念フォーラム	・第58回中央公民館まつり ・第6回貝つ子フェスタ ・第3回貝塚公民館大会（山手） ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもががんばっているよ
2015	・Newつるかめ大学 ・天然eco生活 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・傾聴講座 ・もっと憲法を知ろう ・おやじの何でも挑戦 ・ズンバでリフレッシュ ・オトナの星空交流会 ・公民館de餅つきfestival!!! ・チャレンジ！うどううち ・一眼レフカメラを使いこなす ・市民企画講座「憲法カフェ」	・レッツTRY ・夏休みなんでも挑戦！ ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座おや子教室 ・シンガ ルママのほほえみタイム ・まめっこroom	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート	・つるかめ大学地域出前講座（馬場長生会・堀住宅・津田北長生会・南長生会）	・ふれあい料理＊ランチイ7 ・日本語会話よみかき教室ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民踊連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・クラブ協議会 ・貝塚子育てネットワークの会 ・貝塚学習グループ連絡会	・第59回中央公民館まつり ・第4回貝塚公民館大会（山手） ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもががんばっているよ

貝塚公民館(中央) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2016	・Newつるかめ大学 ・天然eco生活 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・介護について語り合う場 ・ふれあい料理 ・憲法カフェ ・おやじの何でも挑戦 ・傾聴ボランティア養成講座 ・オトナの近木川探検 ・公民館de餅つきfestival2 ・写真を撮ろう ・女子力up「浴衣着つけ講座」 ・可愛いお正月飾り ・初心者向けウクレレ体験講座 ・遊び隊養成講座 ・市民企画講座 「せんごくの杜の魅力を知ろう」	・レッツTRY ・夏休みなんでも挑戦！ ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座「おや子教室」 ・シンガ'ルマのほほえみタイム ・まめっこroom	・日本語会話よみかき教室 ・市民企画講座 「子どもの気持ちを理解しよう」	・ファミリーコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート ・人形劇あひるのたのしいにんぎょうげき	・出前講談寄席（清児町会） ・つるかめ大学出前講座（ロコモ二色浜） ・出前寄席 （窪田シャルマンフジ長生会） ・円満未来図家族への伝言 わかりやすい遺言～ （清名台福寿会）	・ふれあい料理ボランティア ・日本語会話よみかき教室 ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民踊連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・クラブ協議会 ・子育てネットワークの会 ・貝塚学習グループ連絡会	・第60回中央公民館まつり ・第5回貝塚公民館大会（山手） ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもががんばっているよ
2017	・Newつるかめ大学 ・天然eco生活 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・傾聴ボランティア養成講座 ・ｱﾀﾞもからだもシャキッと元気体操 ・ベトナム料理を作って食べて交流しよう	・レッツTRY ・夏休みなんでも挑戦！ ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座おや子教室 ・シンガ'ルマのほほえみタイム ・まめっこroom ・マタニティ♡ヨガ	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート	・出前講座（落語） （堀住宅百の会、東山長生会） ・出前講座（マジック） （窪田シャルマンフジ長生会） ・出前講座（落語、講談） （堀之町長生会）	・ふれあい料理ボランティア ・日本語会話よみかき教室 ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民踊連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・クラブ協議会 ・子育てネットワークの会 ・貝塚学習グループ連絡会	・第61回中央公民館まつり ・第6回貝塚公民館大会（浜手） ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもががんばっているよ
2018	・Newつるかめ大学 ・天然eco生活 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・ｱﾀﾞもからだもシャキッと元気体操 ・ﾉﾙﾃﾞｨｯｸ・ｳｵｰｷﾝｸﾞを楽しもう ・コーヒー講座	・レッツTRY ・夏休みなんでも挑戦！ ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座「おや子教室」 ・シンガ'ルマのほほえみタイム ・まめっこroom	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート	・出前講座 （窪田シャルマンフジ長生会） ・おでかけよちよちサロン	・ふれあい料理ボランティア ・日本語会話よみかき教室 ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民踊連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・クラブ協議会 ・貝塚学習グループ連絡会 ・子育てネットワークの会 ・子育てネットワークの会 30周年記念子育てフォーラム	・第62回中央公民館まつり ・第7回貝塚公民館大会（山手） ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもががんばっているよ

貝塚公民館(中央) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2019	・Newつるかめ大学 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・7才もからだもシキと元気体操 ・ルディック・ウォーキングを楽しもう ・アロマ講座 ・傾聴ボランティア養成講座 ・気軽に書道	・レッツTRY ・夏の子ども講座 ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座おや子教室	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート ・X'masピアノリレー	・地域出前講座 (窪田シャルマンフジ長生会) 旭ヶ丘住宅長生会)	・ふれあい料理ボランティア ・日本語会話よみかき教室 ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民謡連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・貝塚子育てネットワークの会 ・貝塚学習グループ連絡会	・第63回中央公民館まつり ・第8回貝塚公民館大会(中止) ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもがらばっているよ
2020	・Newつるかめ大学 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・7才もからだもシキと元気体操 ・ルディック・ウォーキングを体験しよう ・アロマ講座 ・気軽に書道 ・StayHome ・家にいながらつながろう ・市民企画講座 「りょうちゃんのおもしろ子育てトーク&ライブ～子どもの生きる力を育むために～」	・レッツTRY ・2020子ども講座 ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム ・保育つき講座おや子教室	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート ・七夕ピアノリレー ・X'masピアノリレー	・移動公民館「健康サロン」	・ふれあい料理ボランティア ・日本語会話よみかき教室 ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民謡連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・貝塚子育てネットワークの会 ・貝塚学習グループ連絡会	・第64回中央公民館まつり(中止) ・第9回貝塚公民館大会(オンライン ハイブリッド) ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもがらばっているよ
2021	・Newつるかめ大学 ・夢にチャレンジ ・ホッとワーク ・ふれあい料理 ・介護について語り合う場 ・介護と仕事・子育て・学業の両立 悩みを話して心を軽くしよう ～ダブルケアに悩まないで！みんなで話そう～ ・いすヨガ ・みんなでルディック・ウォーキングをつくろう ・スポーツ吹矢を楽しもう ・ゆるふわヨガ ・ボクシング風エクササイズ ・気軽に書道 ・Handmade factory in 公民館(エコファクトリー)を作ろう・ボディスクラブ ダーニング) ・楽しくフィットネス～いっしょに動きましょ ・楽しくフィットネス2 ・俺の公民館～趣味を見つけて楽しく生き生き、リア充生活～ ・市民企画講座「SDGs～私たちのちよとした選択が未来を変える～」	・レッツTRY ・夏の子ども講座 ・少年少女合唱団・定期演奏会	・赤ちゃんルーム	・日本語会話よみかき教室	・クラシックコンサート ・ジャズライブ ・春一番コンサート ・七夕ピアノリレー ・X'masピアノリレー	・移動公民館「健康サロン」 ・地域出前講座 小瀬長生会・堤町老人会 ・オンラインを活用した健康づくり教室 ・オンラインを活用した落語体験	・ふれあい料理ボランティア ・日本語会話よみかき教室 ボランティア ・遊び隊 ・保育ボランティア ・貝塚ファミリー劇場 ・貝塚市軽音楽連盟 ・貝塚市民謡連盟 ・貝塚市日本民謡連合会 ・貝塚市クラシック音楽家協会 ・貝塚市合唱連盟 ・貝塚市美術協会 ・貝塚子育てネットワークの会 ・貝塚学習グループ連絡会	・第65回中央公民館まつり(中止) ・第10回貝塚公民館大会事前学習会 ・第10回貝塚公民館大会(中央・オンラインハイブリッド) ・しゃべり場★公民館 ・ロビー活用 ・ほかでもがらばっているよ

貝塚公民館(中央) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2022	・ New つるかめ大学 ・ 夢にチャレンジ ・ ホットワーク ・ 介護について語り合う場 ・ いすヨガ ・ ルディックワークで外に出かけよう ・ 認知症予防にもなるスマイル体験 ・ イージーステップ～音楽にのってリズムを体験しよう～ ・ ボクササイズ風エクササイズ ・ 気軽に書道	・ レッツTRY ・ 夏の子ども事業 ・ 少年少女合唱団・定期演奏会	・ 赤ちゃんルーム ・ 保育つき講座「おや子教室」	・ 日本語会話よみかき教室 ・ ふれあい料理	・ クラシックコンサート ・ ジャズライブ ・ 春一番コンサート ・ ピアノリレー (GW, 七夕, クリスマス) ・ 元気がでるミニコンサート 沖縄三線 ・ 元気がでるミニコンサート かたつむり (合唱) ・ 元気がでるミニコンサート ウクレレ	・ 移動公民館「健康サロン」 ・ 地域出前講座	・ ふれあい料理ボランティア ・ 日本語会話よみかき教室 ボランティア ・ 遊び隊 ・ 保育ボランティア ・ 貝塚ファミリー劇場 ・ 貝塚市軽音楽連盟 ・ 貝塚市民踊連盟 ・ 貝塚市日本民謡連合会 ・ 貝塚市クラシック音楽家協会 ・ 貝塚市合唱連盟 ・ 貝塚市美術協会 ・ クラブ協議会 ・ 貝塚子育てネットワークの会 ・ 貝塚学習グループ連絡会	・ 第66回中央公民館まつり ・ 第11回貝塚公民館大会 (山手・オンラインハイブリッド) ・ しゃべり場★公民館 ・ ロビー活用 ・ ほかでもががんばっているよ
2023	・ New つるかめ大学 ・ 夢にチャレンジ ・ ホットワーク ・ 介護について語り合う場 ・ いすヨガ ・ カラサイズ ・ おひとりさま料理 ・ スマホ講座 ・ このゆびとーまれ童謡 ・ ケアラー講座	・ レッツTRY ・ 夏の子ども事業 ・ 少年少女合唱団・定期演奏会	・ 赤ちゃんルーム ・ 保育つき講座「おや子教室」	・ 日本語会話よみかき教室 ・ ふれあい料理	・ クラシックコンサート ・ ジャズライブ ・ 春一番コンサート ・ ピアノリレー (GW, 七夕, Christmas, ひなまつり)	・ 移動公民館「健康サロン」 ・ 地域出前講座	・ ふれあい料理ボランティア ・ 日本語会話よみかき教室 ボランティア ・ 遊び隊 ・ 保育ボランティア ・ 貝塚ファミリー劇場 ・ 貝塚市軽音楽連盟 ・ 貝塚市民踊連盟 ・ 貝塚市日本民謡連合会 ・ 貝塚市クラシック音楽家協会 ・ 貝塚市合唱連盟 ・ 貝塚市美術協会 ・ クラブ協議会 ・ 貝塚子育てネットワークの会 ・ 貝塚学習グループ連絡会 ・ プレーパーク30周年フォーラム	・ 第67回中央公民館まつり ・ 第12回貝塚公民館大会 (中央/コスモシアター) ・ しゃべり場★公民館 ・ ロビー活用 ・ ほかでもががんばっているよ

貝塚公民館(浜手) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2013	・シルバーライフ ・オトナの科学、オトナの芸術 ・空気の汚れと健康（保育付） ・ふれあい料理 ・川柳を楽しもう ・作ってみよう孫のおもちゃ ・はじめての公民館 ・インターネットの楽しさ・怖さ ・iPadで楽しく～グループ活動で活かすには～ ・古武術を活用した身体に負担の少ない介助法	・チャレンジクック ・子ども居場所事業（はまて子どもパーク、レッツTRY） ・子ども夏の講座 ・公民館の仕事ハカシメイドキ中学生が企画する60歳以上の方のための講座 ・新春あそびたい会	・すくすくサロン ・子どもと楽しむために（保育付） ・子どものからだ～機能の発達と遊びについて～（保育付） ・子育てワザ☆ほっとスペース ・ババサロン ・パパとたからばこをつくってあそぼう&パパとかたろう ・親子で作ろう！竹といとはし ・ババシェフがつくるかんたん★お昼ごはん！ ・孫育て講座～祖父母だからできること～	・ヨーロッパの楽器と手づくり楽器で共演しちゃお ・自分らしく輝いて生きる	・ロビーコンサート ・人形劇 ・文楽ってどんなもんなん！～「文楽」楽しみ方講座～ ・講演会「言葉でつながるの思いをつたえる」	・出かける防災・使える防災 ・出前寄席（大北町会）	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・レレコンサート企画委員会 ・図書整理・読み聞かせボランティア ・チャレンジクックサポーター ・はまて子どもパークボランティア ・利用者連絡会 ・利用者団体代表者会議 ・子育てグループ交流会	・ふれあいまつり ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・第5中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会、盆踊り実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・クルススポット公民館（保育室 開放・ミニ映画会） ・ほかでもががんばっているよ
2014	・シルバーライフ ・オトナのニッポンシリーズ ・オトナのサバイバル～ローブワーク編～ ・健康一番「腰痛・膝の痛みがあってもできる運動」「禁煙のススメ」 ・連続講座「禁煙のススメPart2」 ・消費税を乗り切る！家計管理 ・ふれあい料理 ・日本のイトコ見直そう（市民企画講座） ・毎日の生活に役立つアウトドア流防災講座～子育てから介護まで～	・コドモ防災塾 ・子ども夏の講座 ・おばけやしき ・外遊びの学校Part2 ・子ども居場所事業（はまて子どもパーク、レッツTRY） ・新春あそびたい会	・すくすくサロン ・楽しむ♥子育て（保育付） ・楽しむ♥子育て後期（保育付） ・ババサロン ・笑って学ぶ子育てのコツ ・子育てワザ☆ほっとスペース	25周年事業 ・親子で太鼓をつくろう ・牛皮を使った和太鼓作り&ミニ講演会「いのちの話」 ・バリアフリーの楽器「ヘルマンハープ」の演奏とお話	・ロビーコンサート ・人形劇 25周年事業 ・親子で楽しむ夏のレレコンサート	25周年事業 ・ハワイアン&フラで常夏の世界へ！ ・でかける防災・使える防災 ・健康サロン	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・レレコンサート企画委員会 ・図書整理・読み聞かせボランティア ・はまて子どもパークボランティア ・子育てグループ交流会 ・利用者連絡会 ・利用者連絡会クラブ 共催講座（太極拳・複音ハーモニカ） ・利用者団体代表者会議	・ふれあいまつり ・クルススポット公民館（保育室 開放・ミニ映画会） ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・第5中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会、盆踊り実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・ほかでもががんばっているよ 25周年の集い ・（ハ）レレアイカッショ、クラブ発表&交流）と写真展
2015	・シルバーライフ ・オトナの社会科Part2 ・オトナの家庭科 ・やっぱり健康一番「ちょっとした工夫で快適にすごす」「もっと知りたい新・介護保険」 ・ふれあい料理 ・エコと健康 自転車活用のススメ！ ・みんな笑顔！車いすDEレクリエーション	・コドモ防災塾 ・子ども夏の講座 ・おばけやしき作戦会議 ・子ども居場所事業（はまて子どもパーク、レッツTRY） ・新春あそびたい会 ・絵本で楽しくEnglish!!	・子育てワザ☆ほっとスペース ・すくすくサロン ・楽しむ♥子育て前期（保育付） ・楽しむ♥子育て後期（保育付） ・ババサロン	・社会的ひきこもりからの回復・自立のために ・みんなで楽しむ和太鼓の響き	・ロビーコンサート ・人形劇 ・おばけやしき ・手作り和太鼓を演奏してみませんか?!	・でかける防災・使える防災 ・出前寄席（西町） ・健康サロン	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・レレコンサート企画委員会 ・図書整理・読み聞かせボランティア ・はまて子どもパークボランティア ・はじめようボランティア ・子育てグループ交流会 ・利用者連絡会 ・利用者団体代表者会議	・ふれあいまつり ・クルススポット公民館（保育室開放） ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・第5中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会、盆踊り実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・ほかでもががんばっているよ
2016	・オトナのこくご ・地域や家庭で役立つコミュニケーション ・シルバーライフ ・やっぱり健康一番「自分のゆがみは自分でリセット」「ヘルシイク・ワークをはじめよう」「寒さなんてふっとばせ！ヘルシイク・ワークで外へ飛び出そう」 ・オトナのりらくすタイム ・メディカルハーブを楽しもう ・ふれあい料理 ・おとなのガッコウ共催講座	・コドモ防災塾 ・子ども夏の講座 ・おばけやしき作戦会議 ・みんなで楽しもう Summer English ・新春あそびたい会 ・子ども居場所事業（はまて子どもパーク、レッツTRY）	・子育てワザ☆ほっとスペース ・ババサロン ・すくすくサロン ・子育てほっとひととき（保育付） ・楽しむ♥子育て春（保育付） ・楽しむ♥子育て秋（保育付） ・親子で歌おう	・社会的ひきこもりからの回復・自立のために ・落語で楽しく学ぼう～見える世界 見えない世界～ ・ダンスで心のバリアフリーを！	・ロビーコンサート ・おばけやしき ・浜手歌声サロン ・人形劇	・でかける防災・使える防災 ・出前寄席（加神町会） ・健康サロン	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・レレコンサート企画委員 ・図書整理・読み聞かせボランティア ・利用者連絡会 ・子育てグループ交流会 ・利用者団体代表者会議	・ふれあいまつり ・クルススポット公民館（プレイルーム開放） ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・第5中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会、盆踊り実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・ほかでもががんばっているよ

貝塚公民館(浜手) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青少年	子育て支援	人権 共生社会づくり	文化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい その他
2017	・シルバーライフ ・ふれあい料理 ・りらくすヨガ ・オトナのカントリーダンス ・カントリーダンスを楽しもう ・ノルディック・ウォーキングを楽しもう 春・秋 ・市民の森でノルディック・ウォーキングを楽しもう ・おとなのガッコウ共催講座 ・市民企画講座「体験学習“プログラミングって何”」	・コドモ防災塾 ・子ども夏の講座 ・おばけやしき ・新春あそびたい会 ・子ども居場所事業 ・はまて子どもパーク・レッツTRY	・子育てサロン☆ほっとスペース ・パパサロン ・楽しむ♥子育て春（保育付） ・楽しむ♥子育て秋（保育付） ・すくすくサロン	・大阪のおばちゃんにとことん学ぶがっちり人権掌握術 ・社会的ひきこもりからの回復・自立のために ・輝こう！ゴスペルで自分らしく	・ロビーコンサート ・人形劇 ・京極流民謡と津軽三味線	・でかける防災・使える防災 ・出前寄席（南上町町会） ・移動公民館 健康サロン	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・レクコンサート企画委員 ・図書整理・読み聞かせボランティア ・利用者連絡会 ・親子でうんどう遊び（サークル「Eビ」共催） ・利用者団体代表者会議	・ふれあいまつり ・クールスポット公民館（ブレイルーム開放） ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・第五中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会・盆踊り実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・ほかでもがんばっているよ
2018	・シルバーライフ ・ふれあい料理 ・とにかく面白い！カラコミュニケーション ・ゴスペルに挑戦 ・楽しく踊ろうカントリーダンス ・健康一番～4つのテーマを押さえて健康寿命を延ばそう～ ・タオル筆で描こう ・しくみシリーズ連続講座	・コドモ防災塾 ・子ども夏の講座 ・夏休みチアダンスチャレンジ ・おばけやしき ・浜手 子ども卓球 ・新春あそびたい会 ・子ども居場所事業 ・はまて子どもパーク・レッツTRY	・すくすくサロン ・子育てサロン☆ほっとスペース ・パパサロン ・楽しむ♥子育て春（保育付） ・楽しむ♥子育て秋（保育付） ・親子でふれあい体操	・つげさん手話教室in浜手 ・元気にたのしく生きるためのパートナーシップのすすめ	・ロビーコンサート ・前期講座合同発表会 ・浜手歌声サロン【秋・春】 ・京極流民謡と津軽三味線 ・人形劇	・人形劇（津田北町） ・でかける防災・使える防災 ・健康サロン	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・レクコンサート企画委員 ・図書整理・読み聞かせボランティア ・利用者連絡会 ・利用者団体代表者会議	・ふれあいまつり ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・ブレイルーム開放 ・第五中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会・盆踊り実行委員会・街びらき30周年・まつり実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・ほかでもがんばっているよ
2019	・ふれあい料理 ・シルバーライフ ・健康一番～がんばらない運動～ ・季節の花を楽しむ ・市民企画講座「切らずにできる作り帯」 ・古武術を活用した 身体にやさしい動きを学ぼう！（実技）	・コドモ防災塾 ・夏の子ども講座 ・おばけやしき ・はまて子ども卓球 ・新春あそびたい会 ・子ども居場所事業 ・はまて子どもパーク・レッツTRY	・子育てサロン☆ほっとスペース ・すくすくサロン ・パパサロン ・げんきに子育て春（保育付） ・げんきに子育て秋（保育付） ・親子ふれあい体操	・知っているようで知らない性について大切にしたいこと	・ロビーコンサート ・劇団「すずしろ」貝塚公演『みら・くる』 ・人形劇 ・浜手歌声サロン	・風の不思議を体験しよう！（西小学校） ・出かける防災・使える防災 ・健康サロン	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・図書整理・読み聞かせボランティア ・レクコンサート企画委員 ・利用者連絡会 ・利用者団体代表者会議 ・えいごDeあそび！	・ふれあいまつり ・祝30周年浜手地区公民館作品展 ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・ブレイルーム開放 ・第五中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会・防災専門委員会・盆踊り実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・ほかでもがんばっているよ
2020	・ふれあい料理 ・シルバーライフ ・いきいき歌体操 ・ボクシング風エクササイズ	・明るいおばけやしき ・新春あそびたい会 ・子ども居場所事業 ・はまて子どもパーク・レッツTRY ・コドモ防災塾	・パパサロン ・げんきに子育て秋（保育付） ・子育てサロン☆ほっとスペース	・気づけば高まる人権意識	・ロビーコンサート ・人形劇 ・浜手歌声サロン ・7月浜手アタリコンサート	・和太鼓を楽しむ（北小学校）	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・図書整理・読み聞かせボランティア ・レクコンサート企画委員 ・利用者連絡会 ・利用者団体代表者会議	・ふれあいまつり ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・ブレイルーム開放 ・第五中学校区地域教育協議会 ・パークタウン（連絡協議会・防災専門委員会・盆踊り実行委員会）／二色校区福祉委員会 ・ほかでもがんばっているよ

貝塚公民館(浜手) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青少年	子育て支援	人権 共生社会づくり	文化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい その他
2021	・ふれあい料理 ・シルバーライフ ・シニア世代の筋力アップ講座 ・認知症予防にもなるスマホでイキイキライフ ・カラダすっきり☆ストレッチ ・映画会「プラスチックの海」 ・かしこく夜活（前期・後期） ・茶歌舞伎 ・楽酒もう～日本酒編～ ・笑って！認知症と介護予防 ・文化サロン ・～万葉集を学んでみよう～ ・はじめてのZoomサロン（山手・浜手連携事業）	・夏の子ども講座 ・コドモ防災塾 ・明るなおばけやしき（展示会） ・子ども居場所事業（はまて子どもパーク・レッツTRY・+KOMINKAN） ・新春あそびたい会	・子育てサ☆ほっとスペース ・パパサロン ・げんきに子育て（保育付）	・気が付きすぎて疲れる 気質HSP入門講座	・人形劇 ・浜手歌声サロン ・浜手アフタヌーンコンサート	・Autumn Jazz Concert（二色小→浜手公に変更）	・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・図書整理・読み聞かせボランティア ・利用者連絡会	・浜手ふれあいウィーク2021（ふれあいまつり） ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・プレイルーム開放 ・第五中学校区地域教育協議会 ・パークウォ（連絡協議会・防災専門委員会・盆踊り実行委員会）/二色校区福祉委員会 ・ほかでもがんばっているよ
2022	・シルバーライフ ・シニア世代の筋力アップ講座 ・認知症予防にもなるスマホでイキイキライフ ・カラダすっきり☆ストレッチ ・かしこく夜活（前期・後期） ・茶歌舞伎 ・楽酒もう～ワイン編～ ・ボールdeゆる体操 ・布ぞうりを作ろう ・上映会「めぐみへの誓い」 ・ボクシング風エクササイズ	・夏の子ども講座 ・コドモ防災塾 ・鉄道模型 H0ゲージ走行展示会 ・子ども居場所事業（はまて子どもパーク・レッツTRY・+KOMINKAN） ・新春あそびたい会	・子育てサ☆ほっとスペース ・パパサロン ・げんきに子育て（保育付）	・ふれあい料理	・人形劇 ・浜手アフタヌーンコンサート ・シャンソでこころのイデ ・Autumn Jazz Concert		・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・図書整理ボランティア ・浜手アフタヌーンコンサート企画委員 ・利用者連絡会	・ふれあいまつり（第34回） ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・プレイルーム開放 ・第五中学校区地域教育協議会 ・パークウォ（連絡協議会・防災専門委員会・盆踊り実行委員会）/二色校区福祉委員会 ・ほかでもがんばっているよ
2023	・シルバーライフ ・代謝アップ☆エクササイズ ・シニア世代の筋力アップ講座 ・認知症予防にもなるスマホでイキイキライフ ・ととのう！現代人応援講座（前期・後期） ・カラダすっきり☆ストレッチ ・かしこく夜活（前期・後期） ・楽酒もう～洋酒編～ ・カラサイズ ・終活へいらいっしょ～いっ	・夏の子ども講座 ・鉄道模型 H0ゲージ走行展示会 ・子ども居場所事業（はまて子どもパーク・レッツTRY・+KOMINKAN） ・新春あそびたい会 ・おばけやしき ・プロに学ぼう！パティシエ講座	・子育てサ☆ほっとスペース ・パパサロン ・げんきに子育て（保育付）	・ふれあい料理	・人形劇 ・浜手アフタヌーンコンサート ・唄と津軽三味線 ・Autumn Jazz Concert		・保育ボランティア ・ふれあい料理ボランティア ・図書整理ボランティア ・浜手アフタヌーンコンサート企画委員 ・利用者連絡会 ・将棋を楽しむ場 ・続ける！/ルディックウォーキング	・ふれあいまつり（第35回） ・ロビー活用（展示・図書・コヒコナー） ・プレイルーム開放 ・第五中学校区地域教育協議会 ・パークウォ（連絡協議会・防災専門委員会・盆踊り実行委員会）/二色校区福祉委員会 ・ほかでもがんばっているよ

貝塚公民館(山手) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2013	・ふれあい料理 ・ことぶきクラブ ・男料理塾 ・貝塚まちなか7-ミュージアムワークショップ ・古典落語を楽しもう	・あそびクラブ（春・秋編） ・第17回泉州地区高校対抗フレスコサウンドコンテスト ・夏の子ども事業 ・放課後子ども教室（山手げんき広場） ・レッツTRY ・夏休みあそびスペシャル	・子育て楽しく（保育つき） ・モンセンペーアレンティンクを学ぼう（木島小学校区/保育つき） ・かばさんルーム ・おさんぽかばさんのかんたんおやつ作り（保育つき）	・発達障がいの子どもの理解するために ・発達障がいの子どもと親の自立をめざして（子ども対象） ・発達障がいの子どもや親の自立をめざす（子ども対象） ・映画会「DXな日々美んちやんの場合&トラッキング」 ・講演会「発達障がいの子どもと親の自立をめざして」 ・コミュニケーションを豊かにするために私は私らしく	・未来へつなげよう夢と絆～鉄道の世界へ～ ・たまねぎ劇場 ・ホール活用 ・ロビーコンサート	・おさんぽかばさん ・移動公民館 ・出前寄席	・保育＊ランティイ ・おさんぽかばさん＊ランティイ ・子ども支援＊ランティイS O R A ・ふれあい料理＊ランティイ ・かばさんルーム＊ランティイ ・山手げんき広場＊ランティイ	・山手地区公民館まつり ・ほかでもがんばっているよ ・ロビー展示／ロビー活用
2014	・ことぶきクラブ ・ふれあい料理	・あそびクラブ（春・秋編） ・第18回泉州地区高校対抗フレスコサウンドコンテスト ・夏の子ども事業 ・放課後子ども教室（山手げんき広場） ・世界のボードゲームを楽しもう ・レッツTRY	・モンセンペーアレンティンクを学ぼう（保育つき） ・ペーアレントトレーニングⅠ・Ⅱ ・おさんぽかばさんのかんたんおやつ作り（保育つき） ・かばさんルーム	・私は私らしく ・発達障がいの子どもを理解するために ・発達障がいの子どもと親の自立＊トに向けて（子ども対象） ・講演会「困り感をもった子どもへの気づきと支援」	・映画「子どもこそミライ」 ・たまねぎ劇場 ・ホール活用 ・ロビーコンサート	・貝塚まちなか7-ミュージアムイベント ・第2回貝塚まちなか7-ミュージアム ・おさんぽかばさん ・移動公民館	・保育＊ランティイ ・おさんぽかばさん＊ランティイ ・子ども支援＊ランティイS O R A ・ふれあい料理＊ランティイ ・かばさんルーム＊ランティイ ・山手げんき広場＊ランティイ	・山手地区公民館まつり ・ほかでもがんばっているよ ・ロビー展示／ロビー活用
2015	・ふれあい料理 ・ことぶきクラブ ・落語講座 ・男料理塾Part2 ・はじめてのミニ菜園（春・秋）	・あそびクラブ ・第19回泉州地区高校対抗フレスコサウンドコンテスト ・夏の子ども事業 ・レッツTRY ・夏休みあそびスペシャル ・将棋倶楽部	・子育てを楽しむヒント（保育つき） ・かばさんルーム ・おさんぽかばさんのかんたんおやつ作り（保育つき）	・子どもとい関係でつきあうために ・私は私らしく ・子どもたちの健やかな将来を育むために～子どもの気持ち・親の気持ち～	・たまねぎ劇場 ・ロビーコンサート	・おさんぽかばさん ・移動公民館 ・「紙芝居&昔あそび」（森福荷神社） ・「居場所づくり」（三ツ松団地南自治会）	・保育＊ランティイ ・おさんぽかばさん＊ランティイ ・子ども支援＊ランティイS O R A ・ふれあい料理＊ランティイ ・かばさんルーム＊ランティイ	・山手地区公民館まつり ・ほかでもがんばっているよ ・ロビー展示／ロビー活用
2016	・ふれあい料理 ・ことぶきクラブ ・はじめてのカクテルづくり ・20代30代対象 ボディメイク講座 ・身体にやさしいヨガエクササイズ	・ササマスペース ・夏のこどもスペース ・ザ★こども納涼まつり ・将棋倶楽部 ・レッツTRY	・もっと楽しむ！わたし・くらし ・子育て（保育つき） ・おさんぽかばさん ・かばさんルーム ・はじめの人形劇場 ・ジョイフルふあみりー ・～おとうさんといっしょ～ ・講演会「こどもと子育てをもうちょっと楽しむ秘密！～こどものはてな？をみんなで考えよう～」	・発達障がいの子どもを理解するために ・私は私らしく～人にやさしく、自分を好きになるために～ ・発達障がいのある子どもとともに～思春期から自立に向けて～	・ロビーコンサート ・イングリッシュバンド＊で奏でる愛のメロデー ・貝塚をつなごう／走る電車模型と水間鉄道写真展	・おさんぽかばさん ・水間末廣座 ・出かける防災 使える防災	・保育＊ランティイ ・おさんぽかばさん＊ランティイ ・子ども支援＊ランティイS O R A ・ふれあい料理＊ランティイ ・かばさんルーム＊ランティイ	・山手地区公民館まつり ・ほかでもがんばっているよ ・ロビー展示／ロビー活用

貝塚公民館(山手) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2017	・ことぶきクラブ ・ふれあい料理 ・子育てママの再就職応援講座 ・和花の盆栽を楽しむ ・男のヨガ ・ノルディックウォーキングで健康寿命をのばそう ・ENJOY☆ジャグリング ・はじめての三味線講座	・ササマヘース ・夏のこども講座 ・ザ★こども納涼まつり／おぼけやしきスタッフ ・将棋倶楽部 ・レッツTRY	・ママのお悩みスッカリ！講座（保育つき） ・ジョイフルふぁみりー～おとうさんといっしょ～ ・おさんぽかばさんのかんたんおやつ作り（保育つき） ・はじめての人形劇 ・かばさんルーム	・発達が気になる子どもの成長を考える ・講演会「さがしていこう！いろんな道」 ・発達がきになったとき、貝塚では？	・たまねぎ劇場 ・ロビーコンサート ・ジャグラーG Tのジ'ャグ'リン'ショー ・劇団すずしろ公演「ハ'ック'ト'ザ'レイン'ボ'ー」	・おさんぽかばさん ・水間末廣座 ・移動公民館 居場所づくり／出かける防災使える防災 ・ロビー活用／ロビー展示	・保育★'ランティ' ・おさんぽかばさん★'ランティ' ・子ども支援★'ランティ'S O R A ・ふれあい料理★'ランティ' ・かばさんルーム★'ランティ'	・山手地区公民館まつり ・ほかでもが'ん'ばっているよ ・ロビー展示／ロビー活用
2018	・ことぶきクラブ ・ふれあい料理 ・ノルディックウォーキングで健康寿命をのばそう ・ストレッチ体操 ・パソコンで年賀状を作ろう ・ふわふわシフォンケーキをつくりましょう♪ ・写真を楽しむ	・ササマヘース ・夏のこども講座 ・ザ★こども納涼まつり／おぼけやしきスタッフ ・将棋倶楽部 ・レッツTRY	・ジョイフルふぁみりー～おとうさんといっしょ～ ・アンガーマネジメント体験講座（保育つき） ・大人が楽しむ絵本の世界（保育つき） ・花のある暮らし（保育つき） ・絵本ピクニック ・おさんぽかばさんのかんたんおやつ作り（保育つき） ・かばさんルーム ・はじめての人形劇 ・親子ふれあいコンサート	・すべての子どもたちには夢は必要だ！ ・生命のことづけ	・たまねぎ劇場 ・ロビーコンサート ・津軽の響き ・サ'デ'ー'ナイト'ジ'ャズ' in山手	・おさんぽかばさん ・水間末廣座 ・移動公民館（居場所づくり／出かける防災使える防災）	・保育★'ランティ' ・おさんぽかばさん★'ランティ' ・ふれあい料理★'ランティ' ・かばさんルーム★'ランティ'	・山手地区公民館まつり ・ほかでもが'ん'ばっているよ ・ロビー展示／ロビー活用
2019	・ことぶきクラブ ・ふれあい料理 ・高齢介護課 共催講座（'ル'ビ'ィ'ツ'ャ'ウ'キ'ン'グ'で健康寿命をのばそう／笑って健幸、笑いヨガ／お一人さまの献立） ・大人の趣味探し 手作り雑貨一日体験 ・本でつながる人と輪とまちづくり ・ストレッチ体操 ・パソコンで年賀状を作ろう ・ふわふわシフォンケーキをつくりましょう♪ ・写真を楽しむ	・夏のこども講座 ・将棋倶楽部 ・レッツTRY ・フアフアクラブ ・夏休みスペシャル	・ジョイフルふぁみりー ・子育て×自分磨き（春・秋）（保育つき） ・はじめての人形劇 ・貝塚ブックフェスタ ・かばさんルーム	・子どもの発達十人十色 ・ヒューマンライツコンサート	・たまねぎ劇場 ・ロビーコンサート ・アルパ演奏inかいづか ・ジャズライブin山手 ・サ'デ'ー'ナイト'ジ'ャズ' in山手	・おさんぽかばさん ・水間末廣座 ・移動公民館（居場所づくり／紙しばい&昔あそび）	・保育★'ランティ' ・おさんぽかばさん★'ランティ' ・ふれあい料理★'ランティ' ・かばさんルーム★'ランティ'	・山手地区公民館まつり ・ほかでもが'ん'ばっているよ ・ロビー展示／ロビー活用

貝塚公民館(山手) 講座・事業一覧(2013年～2023年)

年度	成人・高齢者	青 少 年	子育て支援	人 権 共生社会づくり	文 化	移動公民館 出前事業	人材養成 団体支援	地域ふれあい そ の 他
2020	- ことぶきクラブ - 市民企画「はやりのZoomを体験し、活用してみよう」 - ペーパーキング 6月号を楽しみましょう - 大人向けランタン作り体験 - 公民館でピンポンを楽しみましょう - ふれあい料理 - 台湾をより身近に - パソコンで年賀状を作ろう - ハンドバン体験講座 - 高齢介護課 共催講座「ルディックウォーキングで健康寿命をのばそう」 - 編みあみ講座「ペーパークラフトハンドでかごを作ろう」・編みあみ講座「健康的な布ぞうりをつくろう」)	- こうみんかんへGO！～小学生（高学年）の宿泊体験 - 百人一首 - レッツTRY - 親子でつくる～世界でひとつのX'mas～ ①陶芸作品②竹ランタン ③鉢植えクリスマスツリー - 将棋倶楽部 - 親子でオリジナルアート - 木工作「木のミニこいのぼり」 - 夏のこども講座 - フアフアクラブ - 夏休みスペシャル	- はじめての人形劇 - かばさんルーム - 絵本ビクニック - デニムdeりめいく - プレワーキング母（ママ）のススめ（保育つき）	ほっとハートコンサート	- たまねぎ劇場 - ロビーコンサート～歌と語りで綴る愛物語～貝塚みずま「お夏清十郎」 - ジャズライブin山手	- おさんぽかばさん - 水間末廣座	- 保育ボランティア - おさんぽかばさんボランティア - ふれあい料理ボランティア - かばさんルームボランティア	- 山手地区公民館まつり - ほかでもがんばっているよ - ロビー展示／ロビー活用
2021	- ことぶきクラブ - ふれあい料理 - 健康的な布ぞうりを作ろう - 大人のおやつ作り講座 - 高齢介護課 共催講座 ①認知症予防にもなるスマホでイキキライフ ②「ルディックウォーキング」で健康寿命をのばそう	- 将棋倶楽部 - フアフアクラブ - 夏の子ども講座 - ハビネスパ科的科学実験 - 百人一首 - レッツTRY - かいづかブックフェスタ	- はじめての人形劇 - 絵本ビクニック - 子育て×自分磨き（保育つき） - フリマアプリ～私もできるSDGs～（保育つき） - 親子ヨガ	第3回こうせい展	- ロビーコンサート - たまねぎ劇場 <u>山手地区公民館30周年事業</u> - 歌と語りで綴る愛の物語 貝塚「お夏清十郎」 - ウクレレ タ空コンサート	- おさんぽかばさん - 移動公民館 <u>山手地区公民館30周年事業</u> - 水間末廣座	- 保育ボランティア - おさんぽかばさん - ふれあい料理ボランティア - バンド連絡会	- 木島校区新春映画会 - ほかでもがんばっているよ - 山手地区公民館まつり - ロビー展示／ロビー活用
2022	- ことぶきクラブ - 笑って歩いて健康長寿（高齢介護課共催講座） - 認知症予防にもなるスマホでイキキライフ（高齢介護課共催講座） - ノルディックウォーキングで健康寿命をのばそう（高齢介護課共催講座） - ボクシング風エクササイズ - 実用ボールペン・筆ペン講座～美しい文字への挑戦～	- 将棋倶楽部 - 百人一首 - フアフアクラブ - 夏の子ども講座 - 里山de本と遊ぼう！ - レッツTRY	- 子育てセミナー（保育つき） - 子育て講座「子育て×自分磨き」（保育つき） - はじめての人形劇 - 親子でクリスマスカップケーキを作ろう - おさんぽかばさんのかんたんおやつ作り	ふれあい料理	- ロビーコンサート - たまねぎ劇場 - アフタヌーンライブ - ファミリーコンサート - 人形劇公演&オカリナ演奏 - クリスマスコンサート - 水間末廣座 - ファミリーコンサート	- 移動公民館 - おさんぽかばさん	- ふれあい料理ボランティア - 保育ボランティア	- 木島・東山校区夏休み映画会 - ほかでもがんばっているよ - 貝塚三中軽音フェスティバル - 認知症について学ぼう - 山手地区公民館まつり - ロビー展示／ロビー活用
2023	- ことぶきクラブ - 高齢介護課共催講座 ①いすヨガ ②歩く楽しさと正しいソルディックウォーキングを - スマホ・タブレット・インターネット（基本のキ）なんでも相談会 - 実用ボールペン・筆ペン講座 - 心と体を健康にするエクササイズ	- 将棋倶楽部 - 百人一首 - フアフアクラブ - 夏の子ども講座 - ヤマチク絵画教室 - レッツTRY	- 絵本と子育て（保育つき） - 子育て講座（保育つき） - 親子で料理	- ふれあい料理 - ふらっとサークル - 学習の集いの場	- ロビーコンサート - たまねぎ劇場 - はじめての人形劇 - 水間末廣座 - ヤマチクピアノ - 津軽三味線と民謡 - 気軽にコンサートピアノを弾こう	移動公民館	- ふれあい料理ボランティア - 保育ボランティア	- 木島・東山校区福祉委員会 - 夏休み映画会・落語会 - ほかでもがんばっているよ - 自分の体質に合った「オリジナルチャイを作ろう」 - アーユルヴェーダ的な更年期ケア「ギーとおかゆづくり」 - 一流シェフが語る「地域の魅力と多様性の実現」 - 親子でミツロウラップを作りましょう - 山手地区公民館まつり - ロビー展示／ロビー活用

【直近10年間の公民館予算の変遷】

年度	市歳出計 (千円)	教育費 (千円)	教育費/市歳出 (%)	公民館費 (千円)	公民館費/教育 費(%)	各年度当初現在人口(人) 前年度末の住民基本台帳	市民1人当たりの 公民館費(円)
2013	29,760,392	2,420,422	8.1	126,799	5.2	(平成25年3月) 90,139	1,407
2014	30,494,655	2,556,454	8.4	138,956	5.4	(平成26年3月) 89,810	1,547
2015	31,179,376	3,287,963	10.5	155,418	4.7	(平成27年3月) 89,491	1,737
2016	31,580,142	2,632,520	8.3	130,767	5.0	(平成28年3月) 88,980	1,470
2017	31,678,853	2,450,606	7.7	130,374	5.3	(平成29年3月) 88,390	1,475
2018	31,065,309	2,489,837	8.0	137,021	5.5	(平成30年3月) 87,433	1,567
2019	33,788,480	2,457,848	7.3	127,999	5.2	(令和元年3月) 86,613	1,478
2020	35,290,989	2,960,926	8.4	139,529	4.7	(令和2年3月) 85,900	1,624
2021	38,649,632	3,375,732	8.7	139,689	4.1	(令和3年3月) 84,718	1,649
2022	36,431,796	3,010,253	8.3	143,077	4.8	(令和4年3月) 83,577	1,712
2023	36,516,587	2,979,472	8.2	235,451	7.9	(令和5年3月) 82,960	2,838

新型コロナウイルス感染症への対応と公民館の動き

R2 年（2020 年）

- 1/30 貝塚市新型コロナウイルス対策本部設置
- 2/20 公民館クラブ・団体の活動自粛、講座の中止【第 1 波】
- 3/2～5/6 公立小中高校の一斉休校（公民館は 18 歳以下の利用不可～5/31 まで）
- 4/7～5/31 緊急事態宣言の発出
公民館は 5/15 まで休館、5/15～5/31 までに開館に向けての準備【第 2 波】
- 6/1～ 公民館は定員の制限を設け感染防止対策を講じた利用再開
- 10/12～ 使用室定員の制限を 7 割程度に緩和
- 12/4～ 大幅なレッドステージ移行【第 3 波】

R3 年（2021 年）

- 1/13～2/28 2 回目の緊急事態宣言の発出。公民館は 20 時以降の利用制限
- 4/5～4/25 感染症等まん延防止等重点措置。公民館は 21 時閉館【第 4 波】
- 4/25～6/20 緊急事態宣言の発出。公民館は休館
- 6/21～8/1 まん延防止等重点措置
公民館は 7/11 までは 20 時閉館、8/1 までは 21 時閉館【第 5 波】
- 8/2～10/22 緊急事態宣言発出。公民館は 9/30 まで 20 時閉館、10/31 まで 21 時閉館

R4 年（2022 年）

- 1/27～3/21 まん延防止等重点措置。公民館は通常通り 22 時閉館【第 6 波】
- 4/25～5/22 オミクロン株の特性を踏まえた感染防止対策。
- 7/28～9/27 大阪モデルが非常事態に移行【第 7 波】
- 12/27～ 大阪モデルが非常事態に移行【第 8 波】
- 2/1～ 大阪モデルが警戒（黄信号）に移行

R5 年（2023 年）

- 5/8～ 新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症へ移行

編集後記

貝塚公民館を紹介するときに「人が育つ公民館」と言ってきました。公民館で学び活動してきた人が、地域や学校などで活躍している姿があるからです。

人の育ちに粘り強く寄り添い、人の魅力を引き出し、公民館活動から地域へと自身の幅を広げる市民の姿を見てきた公民館職員。

今回の紀要は「何があったか」という記録ではなく、職員が講座や事業、日々の市民との関係性の中で、「何を見、感じたか」ということを残したいという思いで執筆を始めました。

しかし、書き始めからつまづくことばかりでした。どんな光景を見たのか、どんな会話があったのか、そんなことを問われて戸惑う。記憶を巡らし、思い出し、たくさんの語り合いをしました。語りの中に生き生きとした利用者の姿が浮かび上がる。個々の職員がもつエピソードは数えきれません。しかし、いざ文章になると書けない。書いても校正でバツサリと切られる。なんとも苦しい2年間でした。

紀要は、各館から2～3人の職員が担当者となり、項目によっては担当者以外の職員も執筆に加わりました。校正やデザイン、小見出しの文言などベテランから新人までほとんどの職員が紀要に関わりました。

表現することの難しさに打ちのめされ、本文に十分反映されたわけではありませんが、紀要の執筆で表には見えない大事なことに気づく機会であったことにはちがひありません。人が育つことを喜びとし、その活動や学びを支える公民館職員。職員として原点に立ち返る機会になり学びも多くありました。

先日、第12回貝塚公民館大会を終え、改めて市民の学びの場としての公民館が利用者や市民と共にあることを再確認しました。これからも公民館活動がより一層活発になり、地域へと広がること、そしてこの紀要にまた新たなエピソードが書き込まれることを願って筆をおきます。

2024年2月



貝塚公民館紀要70周年誌執筆者



中央公民館

甲斐 裕二、上野 裕子、山田 知子、江戸 浩子、大野 幸子、中川 知子、奥埜 由紀子

浜手地区公民館

小西 克治、古家 和彦、古谷 菜緒、川上 恵里、木藤 順子、小山 智子

山手地区公民館

井川 剛、要 光志朗、市政 希、南 百合美、半澤 睦子

貝塚公民館70周年紀要

発行日 令和6年3月31日

発行者 貝塚市立中央公民館 〒597-0072 貝塚市畠中1丁目18番1号
TEL 072-433-7222

貝塚市立浜手地区公民館 〒597-0091 貝塚市二色2丁目7番2号
TEL 072-431-0926

貝塚市立山手地区公民館 〒597-0046 貝塚市東山7丁目10番1号
TEL 072-446-0090

編集 貝塚公民館70周年紀要担当

印刷単価 869円

印刷所 (株)和歌山印刷所



KAIZUKA CITY